

---

**プリキュアオールスターズ戦記      ~ パルミエ動乱 ~**

プシェミスル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

プリキユアオールスターズ戦記 ～パルミエ動乱～

### 【Nコード】

N7665U

### 【作者名】

プシエミスル

### 【あらすじ】

パラレルワールドに存在する王国パルミエ、闇の勢力の侵攻から見事に復興したこの国にまたもや存続の危機が。それは・・・まさに身から出たサビの如く。

## 第1回 崩壊の序曲

パルミエ王国。かつてはナイトメアの侵攻により一度は滅亡するものの、伝説の戦士”プリキユア”たちの活躍により、再び国は甦った。しかし時の流れは……。

~~~~~(音楽の演奏音)

「ああ~~~~うん(パクッ)。う~~~~ん、やっぱりシュークリームはおいしいココ。音楽の演奏も申し分ないココ。」

音楽団の演奏を前に、大きな口をあけてシュークリームをほおばるこの子犬のような小動物こそ、パルミエ王国国王、ココである。

「ココ!最近は何日毎日楽団を呼んで宴会ばかりナツ!!少しはパルミエ王国のことも考えて欲しいナツ!!!!」

こう言ってココを諫めているリスのような生き物が、もう一人の国王、ナツ。現在のパルミエ王国は、このココとナツの共同統治下にある。

「ココはもう政治なんかには興味ないココ。誰かいないかココ、次のシュークリームを持ってくるココ!」

「はい、ただいま。」

ココは次のシュークリームを持ってくるよう命じた。

「ナツウ……………」

ナッツはココの有様に、もはや呆れるほか無かった。

この頃、パルミエ王国では王国史上最悪の飢饉が発生していた。雨がほとんど降らず、雲ひとつ無い太陽が出る日が何十日と続いた。大地は乾き、食物は育たず、毎日が高温の日々。ついには餓死者が発生するという最悪の事態にまで発展していた。かつて一丸となってナイトメアに打ち勝った王国民たちは助けを求め続けていた。既に国民の力だけでは限界に達していたのだ。

にもかかわらず、ココは毎日宴会を開き、大好物のシュークリームをたらふく食べ、自分だけが満足する体たらくだった。

「このままではいけないナツ……。」

ナッツはそう思っていた。

その日の夜、ナッツは密かに王宮を抜け、人間界へと向かった。

## 第2回 相談

ここは、小さな湖のほとりにあるナッツハウス。パルミエ国王ナッツは、この人間界で人間の姿となり、「夏」という偽名と名乗ってアクセサリーショップを経営していた。同時に、プリキュアたちの集合場所としていた。

ナッツはプリキュアたちに今のパルミエの状態を説明した。

「……というわけなんだ。」

一同は、あのココがそんなことを……と、信じられないというような顔をしていた。ただ1人を除いては。

「嘘だよ！ココはそんなひどいことは絶対にしないんだから！！！」

キュアドリームこと、夢原のぞみだった。

「ココはそんなことする人じゃない。だって、私に進むべき未来を示してくれたんだもん！皆で力をあわせて、パルミエ王国を復興させただよー！」

のぞみは言葉を強めて言う。

「だけのぞみ、ナッツは嘘を言う性格じゃないわ。ひよっとしたら、ココのこと。」

そう言ったのは、のぞみの昔からの友人である、キュアルージュこと、夏木りんだ。

「りんちゃん！ココのこと疑っているの！？」

「いや・・・そういっわけじゃないけど。」

りんは言葉を弱める。

「ナッツさん、ココさんは本当に政治や国民を省みなくなったのかしら？」

「もしかしたら演技かもしれませぬ。」

キュアミントこと、秋元こまちとキュアレモネードこと、春日野うらははそんな意見を言った。

「演技？」

「ココさんは堕落したフリをして、実は何か別のことを考えているんじゃないかと、国のことを考えてわざと堕落した演技をしているんじゃないんでしょうか。」

「うーん、俺もココに直接聞いたことは無いから、今は何とも言えないな。」

「だったら、直接ココに会って、真意を確かめましょう。それがいま私たちにできることだと思うわ。」

キュアアクアこと、水無月かれんが提案をした。

「そうだよナッツ！ココに直接話して、どう考えているか確かめよ

「うよー!!」

のぞみもかれんの提案に賛成する。

「そうだな・・・、今できることといったら、それくらいしかないかな。」

「よし!それじゃあココに会って、ココが何を考えているか確かめるぞおー!!」

『けつて~~~~い!!』

こうして全会一致により、のぞみたちはココの真意を確かめるべく、パルミエ王国へと向かったのだった。

### 第3回 訪問

ナッツの手引きにより、のぞみをはじめとする5G0G0組は、パルミエ王国へと降り立った。

そこで彼女たちが見たものとは……。

「何よこれ……。」

「街が荒れ果てている……。」

「国民が誰一人としていません。」

「これが……。」

「パルミエだって言うの……?」

そこにはかつての美しい王国だった面影は姿を消し、大地は乾き、街は荒れ果て、道路脇には餓死したであろう国民の遺体が放りっぱなしにされ、ひどい悪臭を放っている。

「悲惨だわ……。」

「ほんと、地獄そのものです。」

かれんとりんはそう言った。

その時。

「食べ物を下さい……。」

1匹の妖精がこちらにやって来た。食糧を恵んでもらおうと思っ  
ているらしい。

だがその妖精の姿は目を被いたくなるようなものだった。体はあば  
ら骨が浮き出すくらい痩せ細り、頬も骨の輪郭が浮き出した。声  
もか細くなっている。全身は、骨に皮をくっつけただけの人形のよ  
うになっていた。

「あなたは、ここに住んでいるの？」

のぞみが質問する。

「そうですニニ。みんなで食べる食糧がもつ底をついてしまいまし  
たニニ。ですから少しいですニニ。どうか食糧を下さいニニ。  
」。

「かわいそうに……こんなにやせ細ってしまって。」

そう言ったのはかれんだった。

「でもごめんなさい……今私たちも食べさせるものを持ってい  
ないの。本当にごめんなさい……。」

「そうですかニニ……。仕方が無いですニニ……。」

妖精は、力なくその場に座り込む。

「あの……そういえば皆さんどこかで見覚えが……。ひよ  
っとして、伝説の戦士”プリキュア”ですかニニ？」

「ええそうよ。私たちを知っているのね。」

「お願いですニニ。どうかこのパルミエ王国を救ってくださいニニ！このままでは国民皆が死んでしまい、王国は完全に滅びてしまいますニニ……。」

「……わかったわ。私たち、このパルミエ王国をもう一度救ってみせる。そして、国民皆におなかいっぱい食べ物を食べさせたい……！」

「ありがとうございますニニ。どうぞよろしくお願いいたしますニニ……。」

そう言ってその妖精は、近くにある家の中に入っていった。そこが妖精の家なのだろう。

「皆、これでわかったナツ。今このパルミエ王国は、最大の危機に瀕しているナツ。国民がこんなにつらい目にあっているのに、ココは毎日毎日遊んでばかりいるナツ。」

「ナツツさん、ナツツさんも国王なんでしょう？ココさんを説得はできなかったの？」

「もちろん説得したナツ。だけどココは聞く耳を持つととしていないナツ。それどころか、国王を辞めさせるとまで言い出す始末ナツ。」

「そ……そんな。」

こまちは落胆する。

「とにかくココに会って話し合おうよ。本人に確認しないと本当のことはわからないよ。」

「のぞみ……。」

「きっとココは、何か悪い病気にでもなったんだよ。そうでなきゃこんなひどいことはしないよ!!」

のぞみは言う。

「……わかったナツ。それじゃあ皆をこれから王宮まで連れて行くナツ。ついて来るナツ。」

ナツの案内により、5人は王宮へと向かう。ココに謁見し、事の真相を聞きだすつもりだ。果たしてココは何を考えているのだろうか……？

### 第3回 訪問（後書き）

一般市民の妖精の語尾は、作者が考えたオリジナルの語尾です。

## 第4回 謁見

ナッツの案内により、5GOGO組はパルミエ王国の王宮に到着した。そして、国王の玉座がある広間に案内され、しばらく待つ。これからココに、この国の状況について問いただすつもりだ。ナッツも国王である為、玉座に座りココの登場を待っている。

十数分後、ココが広間に現れた。

「ココ……………」

「皆、久しぶりココ。」

「ココも元気だったんだね。」

「のぞみも相変わらず元気ココ。」

まずは他愛の無い会話をして、ココの機嫌を伺う。

「早速だけどココ、今パルミエ王国は危機に瀕しているわ。私たちがここに来る前に街を通ってきたけど、ひどい有様だったよ。」

「……………」

ココは無言だ。

「国民は皆飢えに飢えているんだよ。それを見てココは何とも思わないの?」

「……………」

ココはやっぱり答えない。

「ココ、何も言わないんじゃないよ。何もわからないよ。答えてよ。」

「……せつかく来て申し訳ないココ、ココは今執務で忙しいココ。皆の意見を聞く暇は無いココ。」

「聞いてココ、私たちさつき食べ物をせがまれたの。見たところ小さな子どもみだつたわ。『食べ物を下さい』って弱弱しく言っていたわ。生憎食べ物を持っていなかつたから分け与えられなかつたけど、国民はそこまで窮地に立たされているのよ。」

のぞみに続きかれんが言う。

「……ココはまだ執務が残っているココ。これにて失礼するココ。」

「ちょ……ちょっとココ！待ちなさいよ！！」

りんの静止を聞かず、ココはそそくさと奥に消えていった。残ったのはナツツと5人だけになった。

「ねえナツツ、ナツツも国王なんですよ。この状況何とかできないの？」

のぞみがナツツに言った。

「残念だけれど今はどうにもできないナツ。物事の決定には、ナツ

ツとココの両方の承認が必要ナツ。この飢饉の対策にナッツが賛成しても、ココが反対したならば何にもならないナツ。」

「そ……そんなことって。」

「それが今の王国の決まりナツ。」

ナッツは力なく答える。

「ねえナッツさん、一度もこの世界に戻りましょう。それから皆を呼んでこれからどうするか考えたほうがいいと思うの。」

「こまち……。」

「今この5人で考えられることにも限界があるわ。それよりも皆で話し合って意見を出し合ったほうがいいと思って。」

「確かにそのほうがいいかもしれませんが。私たちだけでできることにも限界がありますから。」

こまちとうららの意見が一致した。

「わかったナツ。それじゃあ皆、元の世界に戻るナツ。」

元の世界に戻ったナッツたちは、他のプリキュアメンバーにナッツハウスに来るよう招集をかけた。暗雲は少しずつ広がるうとしていた。

## 第5回 集合

元の世界に戻ってきたのぞみたち5GOGOG組。実は王宮を出るときに、お世話役を務めるミルクと密かに合流していた。なのでミルクものぞみたちと同伴で来ていた。

一旦ナッツハウスに戻ったのぞみたち。しばらくすると、招集をかけた他のプリキュアメンバーが次々と集合してきた。そして全員が揃い、ナッツとミルクによる現在のパルミエ王国の状況説明がはじまった。

ナッツとミルクは話しやすいように、人間体へと変身する。最初にナッツから軽く説明をした。

「皆、忙しいところ急に呼び出して大変申し訳ない。でも緊急の事態だから、最後まで聞いて欲しい。のぞみたちは見てきたんだが、今パルミエ王国は建国以来の危機に瀕している。今年王国では史上最悪の飢饉が発生した。餓死者も数え切れないほど増えつつある。何とかして対策を練りたいんだが、ココは国民たちの苦しみを尻目に贅沢三昧の日々を送っているんだ。」

「そんな……、あのココがそんなことを。」

「にわかには信じられないけれど、ナッツがそこまで言うんだもの、かなり深刻な事態よ。」

「……私にはわかりません。なぜココが。」

MH組の3人、なぎさ、ほのか、ひかりは信じられないといった顔

をして言った。国民の為に力を尽くしてきたココが、ここまで黒く染まるとは思っていなかったからだろう。

そして今度は、くるみが説明をする。

「悪い噂は他にもあるの。2週間前だったかしら、その日の仕事を終えて就寝しようとしていた時……。」

~~~~~

「ミル……今日もお仕事が終わったミル。早く眠って明日も頑張るミル。」

ひそひそひそひそ……

「……？何をひそひそ話しているミル？」

ミルクは物陰に隠れ、ひそひそ話を聞く。

『聞きましたかコン、下働きをしていた者たちが、処刑されたそうですコン。』

『噂では100人も殺されたみたいデーン。』

『まさか……ココ様がスー！？』



「甘いよラブ！今のココは暴君に成り下がっているの。もう言葉だけじゃ解決はできないよ。力を以ってわからせてやるのよ！」

「えりかの言うとおりだよ。もうココには何を言っても通じないはずだ。こうなったら体に直接教えるしかないよ！！！」

そんな強硬論をとなえたのが、ハートキャッチ組のキュアマリンこと、来海えりか。そして同じくキュアサンシャインこと、明堂院いつきだった。

「えりか、いつき！私それには反対よ！力づくでの説得は、相手の憎しみを引き出すだけよ！！！」

ラブは猛烈に反対した。彼女は力づくでの説得は説得ではないことを身を以って知っているからだ。

するとナッツが、

「落ち着くんだ皆！今ここで議論をしても仕方が無い。ここはラブの言うとおり、皆でもう一度説得してみよう。もしそれがダメだったのなら……………」

「ナッツ様……………」

ナッツは言葉を詰まらせた。くるみも何も言えなかった。お互いに心に最後の手段を考えていたのだろう。

その日の説明はこれで終わり、3日後に全員でパルミエ王国に行くことにした。何とかして説得しなければと皆思っていた。さもなけ

ねば  
・  
・  
・  
・  
・  
。

## 第6回 陳情

ナッツハウスでの会議から3日後、プリキュアたち一行はナッツとミルクに連れられ、パルミエ王国へ向かった。そこで彼女たちが見たものは。

「お、おやめくださいピスウ!!!」

「さあ、どんどん持っていくタタ。ここには食べ物が沢山あるタタ!!!」

「こ、この中には我が家の食べ物もありますピス!どうか、それだけはご勘弁をピス!!!」

「そんなこと知ったことじゃないタタ!!!こっちも生きるのに精一杯だタタ!!!」

のぞみたちが以前来た時よりも、状況は悪化していた。街では略奪が横行し、食糧を扱う店が市民によってことごとく破壊され、こっそり盗んでいく有様だった。

それをナッツとミルクが止めに入った。

「何をしているナツ!!!自分が今何をやっているのかわかっているナツ!?!」

「ナッツ様、お放しくださいタタ!こうでもしなければ、我々はただのたれ死ぬだけでありますタタ!」

「わかったミル！！ミルクたちがこの状況を変えてみせるミル。だから、もうしばらく辛抱するミル！！」

「……………」

ナッツとミルクが説得すると、市民は盗んだ食糧をその場に置き、どこかへと立ち去っていった。

「ナッツ様、状況はますます悪化していますミル……………」

「ナツ…………でもここで止まっても仕方が無いナツ、皆急いで王宮に向かうナツ！！」

もう一刻の猶予も許されない状況だ。一行は急いで王宮に向かった。

一方王宮では。

「ココオ……………」

「？、ココ様、いかがなされましたコン？」

側近がココに言う。

「…………ココは、疲れ果ててしまったココ。完璧な統治なんて、自然の前には余りにも無力だったココ……………」

「ココ様……………」

「でも国民をここまで追い詰めたのは他の誰でもない自分ココ。だから、その責任は取らなければいけないココ……。その為には……その為には……」

ココはその場に座り込み、シクシクと泣き始めた。

「ココ様、お気をしっかりお持ちになつてくださいコンー！」

「……もう遅いココ、何もかもが遅すぎたココ……」

ココは力なくそう言った。

その時、

コンコン。ドアをノックする音が聞こえた。

「ココ様、ナッツ様とミルク殿お帰りになりましたデン、それと……多くの人間も、ココ様に謁見したいと申しておられますデン。」

「多くの人間ココ……？」

「どうやらその人間たちもプリキュアのようにございましたデン。」

「……わかったココ、すぐに通すココ。」

「かしこまりましたデン。」

大広間、すでにナッツは玉座に座っている。後はココのお出ましを待つだけだ。

しばらくして、ココがやって来た。

「用件は何ココ。」

「ココ、今日は皆で陳情をしに来たの。今すぐ警沢はやめて、国民たちに食糧を配ってやって頂戴。今はもう略奪まで起こっているのよ。それを見過ごすの?」

まずはのぞみが発言した。

「お願いココ、まだあなたに良心があるなら、私たちの言うことを聞いてほしいの。ナッツの話では、ここの倉庫に多くの食糧が眠っているそうね。ほんの少しでもかまわないわ。どうか分配をしてくれないかしら。」

続いてラブが説得する。

「そ……それは……ココ。」

「ココ?」

「……皆の知ったことじゃないココ!?!この国の王はココとナッツココ!皆には関係の無い話ココ!?!」

「いい加減にするんだココ!ココはどんなに国民が苦しんでいるかちつとも知ろうとしないじゃないか!餓死者だって今でもどんどん増えているんだぞ!それを尻目にココは……、ココはそれでも国王なのか!?!」

いつきが言葉を荒げて言う。

「くどいココー！パルミエ王国の国王はココとナッツココ！皆から口出しをされるのは心外ココー！誰か、この者たちをつまみ出すココー！！」

ココは部下に命令し、プリキュアたちを王宮からつまみ出した。

「……………」

街の通り、皆無言で歩いていった。ココは最後まで聞く耳を持つとっとなかった。

「これからどうしよう……………」

のぞみが小さな声でつぶやく。

「……………私は決めました。」

「？」

「のぞみさん、みなさん……………王政を倒しましょうー！！」

そう言ったのは、キュアブロッサムこと、花咲つばみだった。

「つ、つばみ！？」

「国民がここまで悲惨な目にあっているのに、ココはそれを一切無視して、遊び暮らしているんですよ。この王国は完全に腐敗しきつ

ています。私、完全に堪忍袋の緒が切れました！今こそ王政を倒す  
ときです！！」

「あたしもつぼみの意見に賛成だよ！これ以上ココに国王を続けさ  
せるわけには行かないよ！！」

つぼみに続いてえりかも賛成する。

「つぼみの言うことはもつともだよ。誰かが何か事を起こさなきゃ  
ずーっとこんな悲惨な状況が続くんだよ。プリキュアとして黙って  
は見ていられないんだよ。」

つぼみの言葉になぎさも同調する。

「つぼみちゃん、えりかちゃん、なぎささん……………」

「……………ミルクも賛成するミルク。」

「ミルク！？」

「元はといえば、ミルクが2人が王様になればいいなんて言ったの  
がいけなかったミルク。この落とし前は、ミルクがつけなきゃいけな  
いミルク！」

「ミルク……………」

「今日はもう遅いミルク、明日から同志を募っていこうミルク。みんな、  
頑張ろうミルク！！」

ミルクの決意に、皆は一致団結した。

パルミエ王国は、今変化の時期へと突入する・・・。

## 第7回 決起

王政打倒を決めた翌日から、ナッツをはじめとするプリキュアたちは、同志を募るため、王国各地へ出かけていった。

「すみませーん、プリキュアです。一緒に王様を倒しませんか？」

「すみませんノノ。これから用事がありますノノ。」

「ああ、そうですか……。どうも失礼しました。」

「ごめんください、私たちと一緒にパルミエを変えてみませんか？」

「いたずらなら、帰ってくれりり。」

「すみませーん、プリキュアと申しますが、私たちと一緒に戦いませんか？無理にとは言いません。」

「プ・・プリキュア？一緒に戦うって……。誰とですかカカ？」

「もちろん、現国王ココ様とです。ココ様はもはや国民のことを考えない暴君になりました。私たちと力をあわせてココを倒して、この国を救いませんか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「いかがですか・・・・・・・・。」

「……わかりました力。自分でよければ、微力ですけど力になります力。」

「ああ、ありがとうございますっ!!」

「よろしくお願いいたします力。」

『ごめんくださいナツ(ミル)。』

「これはナツ様、ミルク殿!い、一体何の御用でザザ!？」

「これからパルミエで戦いが始まるナツ。目的は『反逆者』の打倒ナツ。あなたもナツたちと共に戦って欲しいナツ。」

「反逆者って……ま、まさか!？」

「もちろん、ココ様ミル。今のココ様は暴君に堕ちてしまったミル。もうココ様にはこの国を治める資格を失っているミル。今誰かが止めなければ状況はどんどん悪化していくミル!」

「ナツ様とミルク殿がそこまでおっしゃられるなら、私も協力いたしますザザ。皆でこの国を救いましょうザザ!」

『ありがとうナツ(ミル)!』

最初は同士になると勧誘して断られたケースも多かった。プリキユアたちが学校でない時もナツツやミルクたちが粘り強く勧誘を続け、いつしか同士はうなぎのぼりに増えていった。国民のココや

王政に対する不満は頂点に達していたのだ。

「みんな、外を見てみるミル!!」

同志を集め始めておよそ1カ月後、プリキュアたちは驚きの光景を目にする。

「パルミエを救うぜー!!」

「逆賊ココを倒すカカ!!!」

「ナッツ様やミルク殿、そしてプリキュアも味方又又!!絶対負けない又又!!!」

そこには多くのパルミエ国民が集合していた。

「皆やナッツ様やミルクのおかげで、こんなに沢山仲間が集まったミル!!」

「ざっと数えて2000人は下らないナツ!!」

「ありがとうミル!集まってくれて本当にありがとうミル!」

ミルクは国民に礼を言う。

「自分たちはもう我慢の限界カカ!」

「反逆者を倒して、パルミエをまた復活させるぜー!」

「ここにいる皆、あなたたちの味方又又!!」

「ありがとうナツ・・・ありがとうナツ!!!!!!」

ナツも礼を言う。

「そうと決まれば、後はリーダーを決めなくてはいけませんね。一体誰がいいでしょう?」

つぼみがリーダーは誰がいいのか尋ねた。

「私のはぞみが適任だと思うわ。だってプリキュアの中でも、二を争う前向きな子だもの。」

かれんはのぞみをリーダーに推薦した。

「僕ものぞみにリーダーを務めてもらいたいと思ってるんだ。パルミエ王国のことは君が一番良く知っているからね。」

いつきものぞみをリーダーに推す。

「私ものぞみがいいわ。」

「のぞみちゃんだったら絶対リーダーを務められるよ。」

せつなとラブも賛成する。

「あらラブ?あなた戦いには反対だったんじゃないの?」

せつながラブに聞く。

「……せつな、私もう決めたの。このパルミエ王国を救うために、私は今一度戦うわ。」

「わかったわ。けど、油断は禁物だからね。」

「ありがとう、せつな。」

その後国民にも誰がリーダーがいいか聞いたところ、のぞみがいいという意見が多数を占め、のぞみはリーダーに選ばれた。

のぞみはリーダーに選ばれた後、国民に向かって一言あいさつする。

「皆、今度の戦いは皆にとつてつらい戦いになるかもしれないと思うの。私自身もつらいわ。だって、今まで国を治めてきたココを倒すんだもの。だけど今のココは、もう昔のココじゃないわ。今はもう国民を苦しませる暗君でしかなくなっているの。私やプリキュアの皆は、そんな状況を放つてはおけないの。国民が苦しむ姿をこれ以上見たくないの。……お願い、ナッツやミルク、そして私たちに力を貸してほしいの！正直、プリキュアだけでは行動してもあまりにも無力で成功しなかったかもしれない。だけど、皆の協力があれば絶対この困難を乗り切れるって、私は信じるよ。だから皆、力を合わせてがんばろう！このパルミエ王国のために……！！」

オオオオオオオ……！！……！！……！！……！！……！！……！！……！！……！！

ここにプリキュアたちは、王国の危機を救うため、国民と共に決起したのだった。

## 第8回　うちいり

プリキュアと国民たちが決起した翌日、キュアドリーム（のぞみ）をリーダーとした反乱軍は、ココのいる王宮へと進撃していった。途中でココを支持する国民たちに進撃を阻まれたが、特に大きな抵抗も受けず、順調に進んでいった。

そして反乱軍は、王宮前へ到着した。

「みんなはここに残っていて。万が一のために王宮の周りを固めていて欲しいの。誰かが来て王宮の中に入れるように言われても、決して入れちゃダメよ。私たちはこれから王宮に突入して、ココを探し出すから。」

『わかりました!!!』

国民への指示が終わり、ドリームは次にプリキュアたちに指示をする。

「皆、もし途中で兵士たちの抵抗にあっても、絶対殺しちゃダメだからね。気絶させて戦闘不能にさせるだけでいいから。技とかもなるべく使わないこと。ココだけを探し出せばいいだけだからね!」

プリキュアは全員無言でうなずく。

「みんな、行くよ!!!!!」

『Yes!!!!!!!!!』

ドリームの号令で、プリキュアたちは王宮に突入した。

まずプリキュアの前に立ちはだかったのは城門だった。いくら押し  
ても引いても門はびくともしない。

「ダメよ、びくともしないわ。内側から鍵がかけられているみたい。」

「ここは私に任せて頂戴。城門をぶち破るから、みんな離れていて。」

名乗り出たのはキュアルージュだった。ルージュは皆を城門から離  
れさせる。

「プリキュア・ファイヤーストライク!!!!!!」

自らの足から炎の球体を出し、城門に向かって全力で蹴った。城門  
はあっさりと破られ、王宮内への道が開かれた。

「突撃いいい!!!!!!」

ドリームは突撃の号令を下した。

王宮内に入り、プリキュアたちはMH組とSS組のチームと、5G  
OG組、フレッシュ組、ハートキャッチ組の二手に別れてココの  
搜索を開始した。王宮の部屋という部屋をしらみつぶしに探す。

「ココオ！どこにいるの、いたら返事をしなさいー！！」

「もうあんたは”ふたえのきわみ”なのよ！！大人しく出てきなさいー！！」

「何よそのふたえのきわみって！それを言うなら”いふくのきばみ”でしょうー！！」

「ブラック、ブルーム、2人とも間違ってます。」

「それを言うなら”ふくろのねずみ”だと思っただけど・・・。」

『え・・・？そうだったっけ・・・？』

部屋の中に妖精がいたときには。

バターーーン！！！！！！

「な、何をするんですかスー！？」

「何をするんですかじゃないわよ！！一体ココはどこにいるの！？言いなさい！もし答えないなら、あなたを家のパン屋のパンの具材にするわよ！！！！！！」

「ブ・ブルーム！？何て事を言うのー！！」

「し、知らないスー。ココがどこにいるか自分は知らないスー！」

「本当に知らないのね、ええっ！！！？？」

「知らないっいたら知らないスー!!」

「・・・わかったわ、お騒がせしてごめんなさい。どうも失礼しました。」

「2人とも強引過ぎます!もうすこし丁寧に聞いたらどうですか?」

「・・・ごめん。」

「今の所、絶不調ナリ・・・。」

一方5GOGO組たちのチームは。

「ココはどっ?」

「し、知りませんデン・・・。」

「どんな情報でもいいんです。教えてください。」

「そう言えば・・・今日ココ様は1回もお部屋をお出になっていませんデン・・・。」

「ありがとうございます、それで十分です。」

「こんな所に長居は無用だよドリーム。」

「ドリーム、ココの部屋に急ぎましょー!」

「みんな、こっちよー!」

ミルクイローズ（ミルク）の案内により、ココの部屋に向かった。

ココの部屋の前、先に到着したのは5GOG組たちのチームだった。数分遅れてMH組たちも到着する。

「ブラックたちはどうだった？」

ドリームが状況を尋ねる。

「部屋をしらみつぶしに探したけれど、どこにもいなかったわ。」

「もうヘトヘトで疲れたナリ……。」

「ドリームたちは？」

今度は逆にホワイトが尋ねる。

「家来たちは今日ココが部屋から出てくるのを見なかったんですって。だとしたらおそらく……。」

「この部屋の中にココがいる可能性があるわ。」

手分けをしてありとあらゆる部屋や物置等を搜索したが、どこにもいなかった。残っているのはこの部屋のみ……。

「皆、1・2の3で突入するよ。」

「Yes……。」

「1・・・2の・・・3!!!!!!!!!!!!!!」

バーバーン

「コ・・・ココオ・・・」

ココはいた。部屋の真ん中でガタガタ震えてプリキュアたちを見ていた。

「・・・ココ、ココなのね。」

ドリームが確認する。

「いかにもココ・・・」

ココは答える。

「レモネード、お願い。」

「わかりました。」

「プリキュア・プリズムチェーン!!!!!!」

レモネードは黄色い鎖を放ち、一気にココを縛り上げる。

「ドリーム、捕まえました。」

「このまま外まで連れて行くのよ。」

「はい。」

突入してから約4時間、ココは見つかり、捕らえられた。

## 第9回 決別

王宮に突入したプリキュアたちは、懸命の搜索の末に、ついにココを見つけ出した。レモネードによって拘束されたココは、王宮の前に引きずり出されたのだった。

「ココオ……………」

ココは疲れきった表情で後ろ手に縄を縛られ、地べたに座らされていた。ココの周りはプリキュアで固められ、その後で多くの国民がココを凝視している。

「ドリーム……………」

ココがボソリとつぶやく。座らされている前にはドリームがいた。

「…………ココ。」

ドリームがココの下へ歩み寄ってきた。ココの前で止まると、ドリームから話しかけてきた。

「元気そうね、ココ。」

「のぞみの方こそ、元気そうで何よりココ。」

まずは他愛の無い挨拶を交わす。

「ココ・・・どうしてこんな事を。ココはそんな事をする人じゃないってずっと信じていたのに。」

「・・・・・・・・・・。」

「国民皆が飢えて苦しんでいるのに、ココは自分だけすつごく贅沢な暮らしをしていた。それについてココは何も思わなかったの？」

「・・・・・・・・思わなかったココ。」

「どうして!?!」

「ココは、驕り高ぶっていたココ。かつてプリキュアたちと一緒にパルミエ王国を蘇らせて、自分たちは国王に選ばれたココ。でもそんな苦勞して手に入れた平和も時が流れると、苦勞を忘れ、自分は国を救った英雄を気取り始め、国民の頑張りを嘲笑いながら贅沢三昧の日々を送るようになったココ。国に飢饉が襲ったときも、その気持ちは変わらなかったココ・・・。」

「ココ・・・・・・・・。」

「それにココは、自分のわがままで多くの家来の命を奪い、牢屋に閉じ込めたり、その他多くの嚴罰を下してしまったココ。今のココはもう国王でもなんでもないココ! かつてのナイトメアと同じにまで墮落してしまっただんだココー!!」

「ココ・・・・・・・・・・。」

ドリームはココの独白を聞き、体をプルプル震わせていた。

「ドリーム……。」

「何？」

「ココの、最後のわがママを聞いて欲しいココ。」

「最後の……わがママ？」

「ココはもうこれ以上生きてはいけないココ。だからドリーム……、ドリームの手で、ココの命を終わらせて欲しいココ……。」

「……ええ……!？」

「ドリームの手で、ココの命を終わらせて欲しいココ。ココへは誰かが罰を下さなければいけないココ。もう既に覚悟はできているココ。ドリームに命を終わらされたら、ココも本望ココ……。」

「……嫌だよ。」

「ココ？」

「私嫌だよ。ココを殺すなんて、嫌だよ。絶対に嫌だよ!死んでも嫌だよ!」

ドリームはココの願いを拒否する。

「頼むココ!ココはもう取り返しのつかない事を起こしてしまったんだココ!こうでもしなきゃ償えないココ!」

「だったら生きて償ってよ！！！！」

「!?!、ドリーム……。」

「今はまだ生きているからいいけど、死んでしまったら償うどころか、皆に謝る事だつてできなくなっちゃうんだよ！ そうなったら、それこそ取り返しのつかない事になっちゃうんだよ。死んでも皆に恨まれ続けられるんだよ！ 未来永劫恨まれ続けられるんだよ！！ そんなんだつたら生きてこの国のために尽くして、それから命を終わらせようよ！！！！」

「ココオ……。」

その時。

「ダメだよドリーム！！」

「!?!」

「優しさに流されちゃダメ！ ココは自らの手で悪に染まったんだよ。ココの言っている事は口先だけかもしれないんだよ！！ ドリームはそれを真に受けるって言うの!?!」

そう言ったのはキュアマリンだった。彼女は温情を与えず、ココを処罰するべきとの意見なのだろう。

「私もマリンの意見に賛成です。ココのそれは演技かもしれないません。断固として処罰すべきです。」

マリんに続きブロッサムが賛成する。

「悪い存在は根っこから摘み取らなければいけないわ。ドリーム、それがわからないあなたではないでしょう?」

パッションもマリんに賛成した。

「何よ・・・皆揃って悪い奴だの処罰するべきだの、皆正気なの!?それでもプリキュアなの!?!?」

ドリームが思わず叫ぶ。

「やめるココ、ドリーム!」

ココが止めに入る。

「皆ココを処罰するべきだって言っているココ。だからドリーム、お願いココ。ドリームの手でココを・・・。」

「ココ・・・ココオオ・・・。」

ドリームは大粒の涙をこぼしはじめた。

「やあ、ドリーム。」

「・・・。」

「ナッツからもお願いするナツ。」

「ナッツ。」

「ココの意思は誰からも押し付けられたものじゃないナツ。ココは自分自身で決めた事ナツ。だから、ココの意思を尊重して欲しいナツ……。」

「ミルクもナッツ様と同じ考えミル。」

「ミルクまで……。」

「……ココ様あ……。」

ミルクまで泣きはじめた。

そして……。

「ココ、本当にいいのね。」

「本当にいいココ。ドリーム、よろしく頼むココ。」

「……最後に何か言いたいことは無いの?」

「ドリームたちと出会って、パルミエ王国を蘇らせることができたココ。それだけでココは十分嬉しかったココ。後はナッツやミルクたちが上手くやってくれるって信じるココ。ココはずっと応援しているココ。」





かくして、パルミエ王国の復興に全力を尽くした国王コロは、キュアドリームの手により、刑場の露と消えたのであった。

## 第10回 道づくり

ナッツやミルク主導の、プリキュアによるクーデターから3ヶ月の時が流れた。王国は少しずつではあるが、復興への道を歩んでいる。飢えに苦しんでいる国民には食糧が配給され、また飢饉に備え、野菜等の耕作が広がりつつあった。略奪され破壊された家々も、あちこちで再建の音を鳴らしている。

そんな中、のぞみが街を歩いているとき、偶然ナッツたちに遭遇した。

「ナッツ、何をしているの？」

「家の再建を手伝っているナツ。・・・お、重たいナツ！！ミルク、後ろを持って欲しいナツ！！」

「か、かしこまりましたミルク！！」

「私も手伝うよ。2人じゃちょっと忍びないからね。」

「た、助かるナツ・・・。」

「どんくさいのぞみにだけは言われたくないミルク！」

「何よお、ミルクだって足ふらふらにしながら資材持ってるじゃない。」

「お・・・重くなってるないミルク！」

「ほんとかなあ〜。」

のぞみとミルクはふざけあいつつも、家の再建を手伝う。しばらくして一段落ついたところで、休憩を取る。

「のぞみ、ありがとうナツ。おかげではかどったナツ。」

「困ったときはお互い様だよ。」

「ミルク・・・ナツ様とミルクだけで十分だったミルク。のぞみが出る幕は無かったミルク。」

「ミ〜ル〜ク〜?!」

「ナ、ナツ様あ・・・。」

ミルクはナツツに助け舟を求める。

「のぞみとミルクは相変わらずナツ。」

ナツツは軽く流した。

「あ、そうだ！私これから用事があるんだった。ナツツ、ミルク、私行くね。」

「わかったナツ、のぞみ、気をつけて行くナツ。」

「ありがとう、ナツツ。」

そう言うと、のぞみは足早にある場所へと向かった。

「ココ・・・見ているかな。」

ここは歴代パルミエ国王が眠る墓地。そこに真新しい墓石があった。ココの墓である。しかしそこにココの遺体は無い。その墓前にのぞみがお花を供え、しゃがむ。

「王国は少しずつ復興しているよ。ナッツやミルクたちも進んで作業を手伝ったり、鼓舞したりしているよ。皆の顔もとても生き生きしているし、新しい王国にしようと皆一生懸命になっているよ。」

のぞみは墓前に一人つぶやき続ける。

「ココは道を外してしまつて命を落とすたけど、ココの心はいつまでも生き続けるって思ってる。だって、ココたちと力を合わせてパルミエ王国を復活させたのは紛れも無い事実なんだから。皆ココを心底憎んでいないはずだよ。むしろ感謝の心でいっぱいのはずだよ。だから、私からココへ最後のお願い、この国の成り行きを、どうか見守って欲しい。もう2度とこんなことが起こらないように、皆で力を合わせるから。ずーっと、見守って欲しい。今はそれだけ・・・。」

そして、のぞみは立ち上がる。

「……………さようなら、コノ。」

それだけ言うと、のぞみは墓地を後にした。

国王をプリキュアの手で倒されるといふ悲劇に見舞われたパルミエ王国。しかし、国民は一致団結し、新しい時代への道を切り開こうとしている。そして、プリキュアたちもまた……………。

番外編 彼、夢幻の如し

西日が沈みかけているある日の夕方、ナッツハウス内の部屋のソファの上で、のぞみがゴロンと横になっている。天井をボケーっと思つめながら。

「どうしたんだのぞみ、もう閉店時間だぞ。」

今日の営業を終え、後片付けをすませたナッツが呼びかけても、のぞみは天井を見つめたまま返事をしない。

「のぞみ！聞こえてるのか？」

「……んん、あ！ナッツ、いたんだ……。」

「どうしたのぞみ？いつものお前らしくないぞ。ボケっとしていて何か考え事か？」

「それは……。」

「ココの事を考えていたんだろうっ？」

「……。」

「凶星か？」

「……うん……。」

「そうか……。」

「……………」

「葬った事、後悔しているのか？」

「それは……………」

のぞみは少し黙り込むと、ナッツに向かって言う。

「ナッツ」

「何だ？」

「私、もうココの事は忘れる。」

「のぞみ……………」

「最初からココなんていう妖精は存在しなかった。そう思うことにする。」

「のぞみ、お前……………」

「今まで私たちの前にいたココは幻…………、長い夢を見ていたって事にすれば、気も落ち着くから。」

「俺はそうは思っていないけどな。」

「？」

「俺たちは短い間だったが、ココと2人で王国を纏め上げてきた。」

王が2人もいるなんてよそから見れば異常なんだろうが、それでもやってこれたんだ。最後はあんな風になってしまったが、ココは歴代の国王でも慕われたほうだったはずだ。」

「ナッツ……。」

「なぐんてな、お前がそう思っているなら俺はその意思を尊重するさ。誰からも押し付けられたものじゃない。お前自身がそう考えたんだから。」

「うん、ありがとう。」

「もうすぐ日が暮れるぞ、送っていいこうか？」

「ううん、自分で帰れるよ。」

外は暑さが和らぎ、心地よい涼しい風が吹いている。

「ナッツ、またね！」

「ああ、また今度。」

軽く言葉を交わすと、のぞみは帰っていった。

「ココは幻だった……か。」

## 第11回 手紙

ココの死から半年経った。パルミエ王国単独の王となったナッツは、今日の公務を終え、王宮から街を見つめる。

「ナツ・・・この国も大分元の姿を取り戻しつつあるナツ。皆の顔も生き生きしているナツ。ナッツも国王として、皆の期待に応えなければいけないナツ。」

かつての殺気立った雰囲気は既に無く、皆生きる希望を持って毎日を送っている。

その時だった。

「ナッツ様！大変でございますコン！！」

ナッツの家臣が慌ててナッツの元に走ってきた。

「ど、どうしたナツ！？そんなに慌てて、何かあったナツ？」

「ハッ、先ほど運び屋のシロップ殿から、お手紙が届きになりましたコン。」

「シロップから・・・？どついう手紙ナツ？」

「ハッ、それが・・・あまりにも信じられない内容でございますコン。こちらがその手紙でございますコン。」

家臣はシロップから渡された手紙をナッツに差し出す。ナッツはそれを受け取り、目を通す。

「……………ナッツ……………？これは一体！？」

そこにはこう書かれていた。

……………  
……………

パルミエ王国国王廷臣ミルクに、謀反の嫌疑あり。

国王におかせられましたは、何卒細心の注意を払われますよう云々。

……………  
……………

「……………。」

ナッツは手紙を読み、黙ってしまった。

「ナッツ様。」

「宛名は書いていないナッツ？」

「ハッ、恐れながら宛名は封筒にもどこにも書かれておられません  
でしたコン。」

「・・・明日の公務は中止するナツ。お前は直ちにミルクの下へ行  
き、様子を伺ってくるナツ。」

「ハハッ！」

家臣はミルクのいる部屋へ向かった。

その夜、ナツツの部屋

「どうだったナツ？」

「ミルク殿はともお元気でございましたコン。特に変わったご様  
子はありませんでしたコン。ご公務でございますが、ナツツ様は急  
病の為、明日は中止すると申しましたところ、ナツツ様のお体をと  
てもご心配しておりましたコン。」

「そうだったナツ。」

「しかし、まさかミルク殿が・・・スー。」

「ナツツも信じたくは無いなツ。・・・この事はここにいる者だ  
けの秘密にするナツ。他の家臣にも一切しゃべってはいけないナツ。  
」

『ハハッ！』

国王のお手伝いを務めているミルク。かつてはココとナッツから信頼を寄せられていたが、ココの死後、その性格と態度で家臣たちから煙たがられつつあった。廊下で他の家臣とすれ違ってても。

「おはようミルク。」

「・・・はあ、ミルク殿おはようございますゴス。」

「ミルク・・・。」

よそよそしい言葉で返し、そそくさと立ち去るほどだった。

「最近皆冷たいミルク、一体何があつたミルク・・・。」

ミルクの謀反疑惑の手紙は、のぞみたちの所にも届けられた。

「ねえシロップ、これは何かの間違いじゃないかな。もしくは誰かのいたずらとか・・・。」

のぞみがシロップに言う。

「何とも言えないな。手紙には差出人が書かれていない。誰が出したのか俺も全くわからないんだ。」

「そうなんだ・・・。」

「もしかしたら、それは本当なのかもしれないぞ。」

「嘘だよ。ミルクはそんな事をする子じゃないよ。」

「じゃあこの手紙は……。」

「わからない。」

「……俺はもう行く、まだまだ配達物があるからな。じゃあな。」

シロップは人間体から鳥の姿になり、空へと飛んでいった。

「ミルク……。」

のぞみはミルクの名を小さくつぶやいた。

## 第12回 無常

シロップから手紙を受け取ったのぞみは、急ぎ仲間たちをナッツハウスに招集した。

「ミルクが謀反！？どこからそんな情報が入ったの!？」

かれんがのぞみに詰め寄る。

「それが手紙に宛名が書かれていないんです。だから誰が書いたのか全く……。」

「ミルクは謀反を起こす子じゃないわ。私たち皆そう信じてるわ。」

かれんは確固たる自信を持って断定する。

「かれん。」

「何？こまち。」

「ひよっとしたら、いたずらなんじゃないかしら。誰かがミルクさんを陥れようと、濡れ衣を着させようとしていると思うの。」

「濡れ衣を?」

「覚えているかしら。最初にミルクさんと会った時、私たちがココさんやナッツさんに何かしてあげようとする、首を突っ込んできて、ココさんとナッツさんのお手伝いだからと、何でもかんでも自分でやるうとしていたわよね。それは王国にいた時もそうだったと

思うの。そのあまりの身勝手さに、かなり恨みを買っているはずなのよ。」

「確かに出会った頃のミルクはかなり鬱陶しい存在だったわね。」

こまちの推理にりんがうなづく。

「でも、ひよっとしたら……。」

「ひよっとしたら、何ですかこまちさん。」

うららが続きを聞こうとする。

「……いいえ、何でもないわ。」

「ナッツも大変だね。せつかく平和な日々が訪れたっていうのに。」

「のぞみ、国や国民をまとめるのも、とても苦勞するものなのよ。」

しばらく無言の時間が過ぎていく……。

一方その頃、パルミエ王国の王宮内では。

『ねえ、ミルクのスケジュールみたいなもの無いのかしら。一週間分のスケジュールが知りたいの。』

『それでしたら、あちらの部屋にいます。』

『どいつもありがとじ。』

『あつた？』

『……あ、あつたわ。ミルクのスケジュールよ。……ふむふむ、この日ミルクは王宮にいないのね。この日を狙って。』

『この王宮、いや、王国からミルクを……。』

『楽しみだね……。』

『そうだね、わくわくして仕方が無いよ。』

『フフフフフ……。』

『そして、その勢いで。』

『ストップ！今はそれ以上言わないの。』

「今日もいい天気だったミル。明日もこんな天気だったらいいミル。」

ミルクは今日の仕事を終え、就寝する。

平和を楽しむパルミエ王国、しかし時代は新たなる動乱の幕開けを告げようとしていた。

### 第13回 ミルク失脚

今日はミルクが外に出て仕事をする日だ。首都の郊外にある小さな村で食糧をめぐってトラブルになっているので、その決着をミルクにお願いしたいとの事だ。

「お手伝いといっても、他にもいろいろな仕事があつて大変ミル。」しばらくした後、ミルクは問題が起こっている村に到着した。村人の説明によれば、ある家にあつたお菓子を隣の家に住んでいる子が盗んで食べてしまったらしい。自分たちで解決できないのかと思うような何とも下らないトラブルではあるが、ミルクは村人たちにかかるべき裁量を下し、トラブルは一応の解決を見た。

ひと仕事を終え、ミルクが王宮に戻ろうとしたその時、王宮の役人らしき者がやつて来た。

「国王ナッツ様からのご伝達アー。」

「伝達？一体何ミル。」

役人は持っていた手紙を読み始めた。

「国王ナッツ様お手伝い役ミルク、お手伝い役という身分にありながら、ナッツ様にお近づきになり、命を奪って自らが国王になろうとは言語道断！ここに、お手伝い役の任を解き、パルミエ王国北部

に流罪とするアー!!!」

「ミ・・・ミルウ!!!???」

「それだけではないアー、いわれの無い罪を他の家臣たちに着せたり、家臣の仕事を横取りする等の身勝手極まる振る舞い、誠に許しがたしアー!」

「ち・・・違うミル!!!ミルクはそんな事した覚えは無いミル!!!  
本当ミル!!!」

「この期に及んで見苦しいアー、ナッツ様をはじめ、多くの被害者の名前もここに記されているアー。これでもまだ言い逃れをするア  
ー!!!」

「知らないミル!ミルクは全く知らないミル!!!本当ミル!信じて  
欲しいミル!!!!!!」

ミルクが無罪だ、濡れ衣だと懇願しても、役人は聞く耳を持たなかった。ミルクはただ罪状を聞き、その場に座り込むしかなかった。

王宮地下にある牢屋。ミルクは一時ここに収監されている。暗闇の中、疲れきった表情をしていた。

しばらくすると、誰かが入ってきた。

「だ、誰ミル!??」

「私たちだよ、ミルク。」

5G0G0組だった。表で見張っている役人をよくまあ説得できたものだ。

「な、何の用ミル。ミルクはもうお手伝い役じゃなくなったミル。」

ミルクはふて腐れたように言う。

「ミルク、私たちと一緒にナッツの所へ行こう。」

「のぞみ。」

「ミルクはそんな事をする子じゃないよ。きっと誰かがミルクを妬んでつくったでっち上げだよ。」

「そうだよ、ミルクの頑張りはナッツや国民が皆認めてくれているんだよ。なのに……。」

「ミルクに罪をなすりつけた者を、私は許して置けません。だから。」

「ミルクさん、私たちと真実を突き止めましょう。」

「確かにミルクはふてぶてしい態度をとるけど、本当はとても優しい子だって皆思っているわ。」

皆がミルクに説得する。しかしミルクは……。

「もついいミルク……。」

「ミルク？」

「例え作り話であったとしても、ナッツ様のご命令ならば仕方が無いミルク。ミルクは喜んで従うミルク。」

「ミルク……。」

「ミルクはナッツ様の家臣ミルク。家臣は命令を黙って受け入れるのが家臣ミルク。ミルクはナッツ様を裏切る事なんてできないミルク。」

「そんな……、だめだよミルク！」

「だめなわけではないミルク！！……ミルクは今までココ様やナッツ様の御恩を受けてきたミルク。こんな形で返す事になるのは残念ミルクでも、ミルクがいなくなって全て丸く収まれば、……それがミルクのナッツ様やパルミエ王国に対する最後の御恩返しだと思っているミルク。」

「ミ……ミルクウ……だめだよお、そんなの絶対だめだよお、嫌だよお……。」

のぞみがへたり込み、ボロボロ泣きはじめた。

「泣いちゃ駄目ミルクのぞみ！！泣きはじめたら……ミルクまで……」

「…………悲しくなってしまうワ…………グスツ…………グスツ…………」

ミルクまで泣きはじめてしまった。それにつられて、他のメンバーもシクシクと泣いていた。

翌日、ミルクは護衛に守られながら、流刑地である王国北部へと流されていった。お手伝い役として、国の為、国民の為に腕を振るったミルク。その末路は国によって見捨てられるという皮肉なものであった。

## 第14回 野望の芽吹き

『フッフ……ミルクの失脚、上手くいったね。』

『ああ、もつとも今のところはだが。』

『私たちの計画は順調に進んでいるね。』

『そう、だが油断は禁物さ。いつ誰かが何をするかわからないからな。』

『この国にもう王様はいらない。このパルミエは生まれ変わるべきだ。』

『その為には、誰かが裏切り者の汚名を着て、犠牲とならなければいけない。それが私たちよ。』

『そう……全ては。』

『民主化の為に……!!』

ミルク失脚から数日経った。5GOG組は一旦ナッツハウスに戻り、失脚の理由について話し合っていた。

「ナッツ、ミルクは本当にナッツを殺そうとしていたの？」

開口一番にのぞみが尋ねる。

「それは無いはずだ。確かにミルクは何でも自分でやらないと気がすまないタイプだが、ココや俺にはよく忠節を尽くしていたよ。もっとも、周りの家臣たちはそれを気に入ってはいなかったようだが。」

「ココやナッツのご機嫌取りをして、自分の株を上げているって見られていた……？」

「その可能性はあると思う。」

「そうなんだ……。」

のぞみは少しがっかりする。

「ナッツさん。」

「何だこまち？」

「ミルクさんの話では、罪状にミルクさんを気に入っていない家臣の署名の他に、ナッツさんの署名も入っていたって事だけれど、ナッツさんは罪状に署名をしたのかしら？」

「……いや？俺は署名した覚えは無いぞ。」

「ええ……!？」

「でもミルクさんが見たところ、罪状には確かにナッツさんのサインがされていたって言っていましたよ。」

「うちら、それはミルクに聞いたんだな？」

「はい。ミルクさんに直接聞きました。」

「そうか……。。。」

「じゃあナッツは、本当に罪状に署名していないのね？」  
かれんが念を押して聞く。

「ああ、俺は署名なんかしていない。」

「ということは、あのサインは……。」

「コピーか、あるいは偽者……?」

「まさか……。」

謎はますます深まるばかり。その時。

「ロプーーーーー!!!!!!」

全速力でシロップがこちらに飛んでくる。

「シロップ!？」

そしてすぐに人間体になり、のぞみたちの下へ走ってきた。

「た・・・大変だみんな・・・!」

「シロップ、一体どうしたの!？」

「・・・暴動だ。パルミエ王国で暴動が発生したんだ!!」

『えええーーーーーつつ!!!!????』

「シロップ!!状況を説明してくれ!!!」

ナッツがシロップに説明を求める。

「俺が王国で配達をしていた時だ。何やら王宮のほう騒がしかったから、少し様子を見に行ってみると。大勢の国民が王宮に詰め寄っていたんだ。中には護衛の兵士を集団で暴行していたり、無理やり王宮の門を突破しようとしている国民もいた。」

「国民の様子はどうだったの!？」

りんがシロップに続きを求める。

「上空にいたから詳しくは聞き取れなかったけど、『解放しろ〜!』とか、『王を倒せ〜!』とか聞こえた気がする。」

「解放・・・?倒せ・・・?」

失脚に続いて国民の暴動。もはや一同の頭の中は混乱するばかりだった。

「一体何がどうなっているのよ。」

「ナッツ、ここでジタバタしていても仕方が無いよ。パルミエ王国に行こう!今は混乱しているけれど、まずはこの暴動をやめさせなきゃ!」

「わかった、皆、疲れている時で申し訳ないが、もうひと頑張りしてほしい。」

「Yes!」

7人(ナッツとシロップも含む)は休む間もなく、パルミエ王国へと向かった。

## 第15回 狼煙

「国王はどこだカカアツ!!」

「今すぐ出て来いルフリーー!!!!」

「ミルク殿を今すぐ解放しろロノーリーー!!!!」

王宮前、ミルクの失脚・流罪を聞き、暴徒と化した国民が一斉に押しかけていた。その勢いに衛兵も手が付けられない状態だ。ナッツたちは王宮から離れた空き家に身を潜め、暴動の様子を見つめていた。

「想像以上にひどいわ。下手に近づいたら何をされるかわからないわね。」

「でもかれんさん、このまま見ていてもどつにもならないですよ。近づいて暴動をやめるよう説得しましょう。」

「……それでやめてくれるかしら。」

「できるはずですよ!皆ならきつとわかってくれるはずですよ!」

「……」

「かれんさん、こまちさん、うらら、りんちゃん、ナッツ!」

のぞみは暴動をやめる事に協力するよう皆に説得する。

「わかったわ、のぞみがそこまで言うなら皆協力するわ。」

「ありがとう、りんちゃん。」

「だけど、国民の皆はナッツさんを憎んでいるみたいね。ミルクさんの失脚はナッツさんが命令したって皆思っているみたい。」

「ナッツは命令していないっていう証明ができれば、皆を説得できるんだけどね。」

「それは……………」

「だけど、今の私たちにはそれを証明するものは何も持っていないわ。」

「……………だけど、このまま何もしないんじゃ暴動はどんどんエスカレートするだけですよ。今すぐ暴動をやめさせましょう。」

「つららの言う通りだよ。今は暴動を止める事が重要だよ。」

結局のぞみとつららの意見を受け入れ、暴動を止める為、王宮へと向かった。

王宮前、王宮に突入しようと多くの人が出てきている。5GOGO組は群集に向かって大声で叫んだ。

「皆聞いて！ミルクは謀反を起こそうなんて考えてなかったんだよ

！そしてナッツは流罪の罪状にサインなんかしていないんだよ！！  
きつと、ミルクを気に入っていない者たちのいたずらなんだよ！！」  
のぞみ在必死で説得する。

「お願い皆、今すぐ暴動をやめて頂戴。こんな事をしていても、ど  
うにもなるものではないわ！！」

こまちもやめるよう説得するも、国民はおさまらない。

「ミルク殿を流罪にさせたのはナッツ様だろう力力！！！」

「ナッツ様もミルク殿の事を目障りだと思っているんだらうルフ！  
！」

「あの罪状が何よりの証拠口ノ！ちゃんとナッツ様のサインも入っ  
ていた口ノ！！！」

「あれはナッツさんの直筆じゃありません！あれはナッツさんのサ  
インを誰かが勝手にコピーしたものです！！！」

うらががナッツのサインはコピーだと言う。しかし証明できる品が  
無いのでは、いくら言い聞かせても無駄だった。

「やっぱりナッツ様がミルク殿に罪を着せたんだ力力！」

「ナッツ様は自分たちを裏切ったんだルフ！！！」

「絶対許すわけにはいかない口ノ！！！！！」

国民は断固として、ナッツがミルクに濡れ衣を着せた張本人だと言  
い張った。説得を聞く耳を持たなかった。

「そうです！その人たちの言葉を信じてはいけません！！」

突然、どこからか声がした。何やら聞き覚えのある声だった。

「ミルクに謀反の濡れ衣を着せたのはナッツです！」

「ナッツはミルクの力を恐れ、わざとお世話役を解任させたんだよ  
！！」

「そんなナッツの愚行を。」

「私たちは絶対許さない！」

「そして、そんなナッツを庇うプリキュアたちもよ！！」

「だ・・・誰なの！？」

のぞみが辺りを見渡す。

「ナ・・・ナツウ！！皆、あ・・・あれを見るナツ！！！！」

ナッツが声の主を見つけ、指をさす。

「う・・・嘘でしょ・・・。」

「どうしてなの・・・。」

「何で彼女たちが・・・。」

「一行が見た人物とは・・・。」

「つぼみちゃん!？」

「えりか!？」

「いつきさん!？」

「美希さん!？」

「せつな!？」

そこにいたのは、同じプリキュアの仲間である、つぼみ、えりか、いつき、美希、せつなの5人だった。どうして彼女たちがここに・・・?のぞみたちは、ただただ驚くばかりだった。

## 第16回 宣言

暴動を起こしている群衆を止めようとしたのぞみたちの前に、突如現れたつぼみたち5人。果たして彼女たちの真意は・・・？

「つぼみちゃん・・・!?!?」

「えりか！これは一体何の真似なの!?!?」

「いつきさん！どうしてしまったんですか!?!?」

「美希さん！自分たちが何をしているのかわかっているの!?!?」

「せつな！それに皆、説明して頂戴!?!?」

5GOGO組の言葉に、つぼみが答える。

「何の真似ですって・・・?フッフ、それは実に簡単な事ですよ。私以前言いましたよね。」

.....

「この王国は完全に腐敗しきっています。私、完全に堪忍袋の緒が切れました！今こそ王政を倒すときです!?!?」

.....

「つて。」

続いてえりかが言う。

「ココを倒したところまでは良かったわ。だけどあなたたちはナッツを倒そうとはしなかった。」

「当たり前でしょ！！ナッツは何も悪い事なんかしていないもん！  
！」

えりかの言葉にのぞみが反論する。

「そうかしら？あなたたちの前では善人ぶっているけれど、裏ではエグい事に手を染めているんじゃないの？何せこの国の王様なんだから。何をやっても許されるもんね。」

「絶対違つって言うならその証拠を見せて欲しいものだね。」

いつきが証拠を出せと詰め寄る。

「そ……それは……。」

のぞみは言葉に詰まる。

「権力者なんて所詮そんなものよ。己の保身の為には、犠牲をも厭

わないのよ。」

「そんな存在<sup>もの</sup>はこの世から抹殺されるべきなのよ。かつてのメビウス様のように。」

「そして、夢と希望を騙って皆を食い物にするあなたたちもよ！！！！」

美希とせつながナッツと5G0G0組の打倒を宣言した。

続いてつぼみたち5人が、力強く宣言する。

「私たちはここに！！」

「全パルミエ国民の幸福を守る為に！！」

「全パルミエ国民の安全を守る為に！！」

「そして、永遠の平和の為に！！」

「『パルミエ共和国』の建国を！！！！」

『宣言いたします！！！！！！！！』

「パルミエ……共和国……!?」

「何なのよ……一体……!?」

のぞみたちはただただ驚いていた。

「さあ皆さん！戦いを始めましょう！このパルミエの為に……！」

つぼみたちは一斉にプリキュアに変身した。

「さて、最初はどうかしらブロッサム？」

ベリーがブロッサムに尋ねる。

「決まっています。共和国樹立に邪魔する彼女たちを、まずは倒します……！」

『OK……！』

ブロッサムたちは真つ先にのぞみたちに襲い掛かる。まだ変身していない為、一方的に攻撃される。

「ハハハハハハ！……どうしたの、どうしたの……!???早くプリキュアになって戦ったらどうなの？それとも、仲間と戦うのは嫌なの……!???」

「マリン、もしそうだったら彼女たちはとんでもない臆病者だね……！」

「あなたたちはそんな臆病な心で今まで戦っていたのかしら?」

「皆、笑ってやりましょう。この臆病者たちに。」

『フフフフフフ・・・フフフハハハハハハ・・・アー  
ツハツハツハツハツハツハツハツハ!!!!』

ブロッサムたちは明らかにのぞみたちを挑発している。

「・・・思い上がるんじゃないわよ!」

「!?!」

「さつきから黙っていらやあ勝手な事ばかりしげと・・・、  
もうあつたまに来たわ!!!」

りんが激昂し、キュアルージュへと変身する。そしてブロッサムた  
ちに突進する。

「ウオオオオオオオオ!!!!」

ルージュはたった1人で5人と激しい打ち合いをしている。

「ぐうう・・・やるじゃないルージュ!!それでこそプリキュ  
アよ!!!」

「やっかましい！！今はただあんたたちが憎いのよ！！！！！」

「そうですよルージュ、もっと怒りなさい！！その怒りと憎しみの炎で、思う存分ぶつかって来なさい！！！！！」

「ルージュだけに戦わせるわけにはいかないわ。私たちも変身よ！！！！！」

かれんの呼びかけで、のぞみを除く3人はプリキュアへと変身した。そしてそれぞれのプリキュアへと立ち向かってゆく。

しかしただ1人、のぞみだけは変身できないでいた。

「どうして……どうしてなの……つぼみちゃん、えりかちゃん、いつきちゃん、美希ちゃん、せつなちゃん……。」

## 第17回 入城

5GOGO組とつぼみたち共和国派は、激しい打ち合いをしている。プリキュア同士の共食いが今日の前で起こっているのだ。

「ハアアアアアア！！！！！！」

「ウオオオオオオオオ！！！！！！！」

ルージュとマリンが敵意を丸出しにして戦っている。

「マリントッ！そろそろ疲れてきた頃合じゃないの。降参したらどうなのよ！！！」

「あたしたちはハナっから降参なんて考えていないわ。あんたたちをやっつけるまで倒れる気はさらさら無いわ！！！」

「だったら、あたしがあんたを倒してやるわ！！！」

ルージュは技を繰り出す体制に入る。

「プリキュア・ファイアーストライク！！！」

自らの足から炎に包まれた球体を全力でマリンに蹴っ飛ばす。

「ふん！馬鹿じゃないの！？マリン・シュート！！！！！」

マリンも負けじと水塊を放つ。その前にルージュの技はかき消される。

「・・・!!」

「ルージュ、火は水の前には無力なのよ。そんなのは幼稚園児でもわかる事よ。じゃあそろそろ、とどめを刺そうかな！集まれ花のパワー!!」

マリンはとどめをさすように、マリンタクトを召喚する。

「花よ煌け!!プリキュア・ブルーフォルテウェーイーイブ!!  
!!」

タクトから水色の花が現れ、ルージュに向かって放たれた。

「ウワアアアッ!!」

見事命中、技の浄化作用により、ルージュは元のりんの姿に戻ってしまった。

「ベリー！パッション!!今すぐ変身を解いて投降しなさい！あなたたちとは戦いたくないのよ!!」

「ミント、あなたは優しすぎるのよ。戦士には時には非情さを備えておかなきゃいけないわ!!」

「そんなあなたに、戦士の掟を体に教えてあげるわッ!!」

ベリーとパッションは、ミントに集中攻撃する。

「ほらほらどうしたの!!?? 防戦一方じゃないの! そんな事じゃあたたちには勝てないわよ!!!」

「話にならないわね! ベリー、一気に畳み掛けるわよ!!!」

「響け! 希望のリズム! キュアスティック・ベリーソード!!!」

「歌え! 幸せのラプソディ! パッションハーブ!!!」

ベリーとパッションがそれぞれの武器を召喚する。

「悪いの悪いの飛んでいけ! プリキュア・エスポワールシャワー・フレッツシュ!!!」

ベリーソードから出された青いスピードがミントの体を包み込む。

「吹き荒れよ! 幸せの嵐! プリキュア・ハピネス・ハリケー!!!  
ンッ!!!!!!」

パッションが技を繰り出すと、旋風が起こり、それが更にミントを包み込む。

「あああああああ.....」

ミントはなす術も無く浄化され、元のこまちの姿に戻ってしまった。

レモネードとアクアはブロッサムとサンシャインと戦っている。

「ブロッサム！サンシャイン！目を覚ましてください！！あなたたちのやり方は明らかに間違っています！！」

「レモネード、私たちが間違っているって一体誰が決めたんですか？神様ですか？」

「それは……それは……」

「私たちは私たちで正しいと思っています。それが国民の幸せにつながるのであれば、例え間違っていると言われても、ただひたすらに進むだけです！！」

「だから2人とも、私たちの邪魔をしないでくれるかな。今の状況は、明らかに君たちが悪なんだよ。」

「！！！！！！」

サンシャインの言葉が癪に障ったのだろう。レモネードが技を繰り出す体制に入る。

「プリキュア・プリズムチエー……ン！！！！」

黄色の鎖が放たれ、ブロッサムとサンシャインを縛り上げる。

「アクア、今です！！」

アクアも負けじと体制に入る。



「花よ輝け！プリキュア・ピンクフォルテウエー……イブ……！！」

「花よ舞い踊れ！プリキュア・ゴールドフォルテバー……ースト……！！！！」

それぞれの武器からピンクの花とひまわり型の光弾が発射され、レモネードとアクアに襲い掛かる。

「ウワアアアアアアアア……」

技の浄化作用により、レモネードとアクアは、うららとかれんに戻ってしまった。

「なーんだ、もうおしまいなの！？5GOGO組って、全然手ごたえが無いんだね。」

「全くね。お話にならないわね。」

「さて、邪魔者は片付いた事だし。」

「パルミエ共和国の建設を。」

「はじめるとしますか……！！」

その時、5GOGO組に、国民から石が投げつけられ始めた。

「出て行けロノー!!この裏切り者どもロノー!!!!!!」

「もうお前たちは伝説の戦士でもなんでもないレクラー!!!」

「くううううう……」

りんが苦虫を噛むかのような顔をする。

「みんな、ひとまずここは撤収するナツ!!!」

「……そうね、みんな！撤収するわよ!!!」

『Yes……』

もう返事に元気が無くなっていた。

「どっして……どっして……どっして……」

のぞみはうわ言の様に言葉を繰り返しつつ、撤退して行った。

かくして、5GOGOG組と共和国派の戦いは、5GOGOG組の完敗に終わった。共和国派は堂々と王宮に入城し、ここにつぼみを首班とする、『パルミエ共和国臨時政府』が樹立されたのであった。

## 第18回 開墾

つぼみたちは5GOG0組を倒し、王宮に入城して『パルミエ共和国臨時政府』を樹立した。ここで彼女たちのある1日の活動を見る事にする。

「ただいま。」

「あ、美希さん、お疲れ様です。どうでしたか？」

「周辺の諸王国は不干渉を約束してくれたわ。しばらくは何もしてこないでしょうね。」

「すごいじゃない美希、さすが私の仲間ね。」

「せつな、それを言うなら私『たち』の仲間じゃないかな？」

美希は外務の仕事を担当している。

「外務の仕事も大変ね。たったら5人でいろいろな仕事を掛け持ちしてるんだもん。あたしもうバテそうだよ。」

「えりか、その言葉はまだまだ早いですよ。花壇と畑の開墾がこの後ありますからね。皆で頑張りましょう。」

臨時政府庁舎『旧王宮』の一角にある場所。ここでつぼみたちは花壇と畑を作っていた。



「何の種があるのかしら？」

美希が尋ねる。

「ピーマンとナスの種です。その他にも芋の苗や人参の苗もありますよ。」

「ゲゲツ……ピーマンの種……。」

「どうしたんですかせつな？顔が真っ青ですよ？」

「ごめんなさい……、実は私ピーマンだけは食べられないの……。」

「そうだったんですか！だったら今こそ絶好の機会です。ピーマンを食べて、好き嫌いを減らしましょう！」

「そ……そんなあ……。」

「諦める事ね、せつな。」

「頑張ろうせつな！」

「あたしたちも一緒に食べるからさ。せつなもピーマンが取れたら皆で食べよ！」

「せ……精一杯……頑張るわ……。」

パルミエ国内ではゴタゴタが続いているが、それ以外はいつもの日常と変わらなかった。一部王政復古の動きがあったものの、すぐに鎮圧。共和国の地盤は着々と固められていった。

別のある日、つぼみたちは5人揃って視察の名目で出かけた。目的地はというと……。

「ミルク、元気かしら？」

「ミルク、あたしたちよ、出ておいで。」

ミルクの流刑先である、共和国北部のとある村だった。

「何の用ミル……。ミルクはもうお世話係でも何でもないミル。」

「そうじゃないわ。今日はミルクにお話したくて来たの。」

「お話……。ミル？」

「……………」

「……………ミルクがミル……。?!」

「そっだよ、それが出来るのは、今はもうミルクしかないんだ。」

「もしここにのぞみたちが来たとしても、この事は私たちだけの内緒よ。約束できるかしら。」

「で、でもつぼみたちは……。」

「私たちの事は気にしないで下さい。これは私たち全員一致の結論ですからね。」

「わ……わかったミル。約束するミル。」

「ありがとうミルク。これで少しは荷が軽くなったよ。」

「これもパルミエの為、その為に私たちは……。」

ミルクとの会話を終え、一行は帰路につく。

「いいのつぼみ？このまま進んで。」

「いいんですえりか、私たちは仲間なんですから。」

「たった1人ではどうにもならないけど、力を合わせれば……か。」

「つぼみ、もう後戻りは出来ないのよ。本当にいいのね？」

「美希さん、もう私たちは後戻り出来ない道を進んでいるんです。今更とやかく言っても仕方ありませんよ。」

「わかったわ、つぼみがそこまで言うのならもつ何も言わない。皆で精一杯頑張りましょう。」

「ありがとうございますせつなさん。今日の夕食はピーマンが出るみたいですからね。おいしくいただきますしょう。」

「それは……別問題……。」

「関係ありません!!」

つぼみたちは今、運命への道を歩き始めた。

## 第19回 再会

照りつける太陽、長い丘の道を上がったり下がったり、フラフラになりながら歩き続ける一行がいた。先日つぼみたちに惨敗した5G O G o組だった。彼女たちの足取りは重く、少しでも気を抜いたらその場に倒れるくらいだった。

「あつつい……暑いわ……。」

かれんが汗びっしょりにしてつぶやく。

「私たち、一体どこに向かっているんでしょうね……。」

「りん、私に聞かないですよ。私はおるか皆だつてどこに向かっているかわからないのよ。」

更に歩き続けて40分ほど経っただろうか。ナッツがある光景を目にする。

「皆、あれを見るナツ！村が見えるナツ！！」

「村？……村ですって……？」

「助かりました……、私たち助かったんですね……？」

「助かったの……かしら。」

「あの村で休息をとりましょう。」

「うららがすぐさま提案する。」

「私もうららさんの意見に賛成よ。けど……。」

「問題はのぞみね……。」

「どうして……つぼみちゃん……えりかちゃん……。」

つぼみたちとの戦いの時から、のぞみはずっとこんな状態なのだ。かつての仲間に裏切られた事に、よほどショックを受けたのだろう。

「しっかりしてのぞみ！まとめ役のあんたがそんな調子でどうするの……。」

「のぞみさん、もうすぐ村に到着するから、それまでがんばりましょう。」

「足ももうがくがくじゃない……。ほら私たちの肩につかまって歩ける？」

「ありがとう……皆。」

互いに支え支えられて、のぞみたちは村に到着した。もう皆の体力も限界に来ていたのだろう。到着した直後、皆はバツタリとその場

に倒れてしまった。

「おいカシユー、この方……ナッツ様じゃないのかピス!？」

「ピスタチオ、この人たちどこかで見なかったかカシユ?」

「ひよつとして……、プリキュア……!? かつてパルミエを救った英雄ピス!！」

「どうしてこんな村にいるカシユ!？」

「でも皆意識が無いピス!! 村の皆を呼んでカシユーの家に連れて行くピス!！」

「わ、わかったカシユー!!!」

「うう……うう~~~~ん。」

「あ、気がついたピス!」

「こ、ここは……?」

「ここはカシユーの家ピス。皆、村の入り口で倒れていたから、村人と協力して連れて来たピス。」

「良かったカシユー、皆たいした怪我もしていないみたいようだし、

良かったらここでしばらく休んでいてほしいカシユ。」

「どこの誰だか知らないけれど、ありがとう。私たち実は……。」

「皆まで言わなくていいピス。あなたたちはかつてパルミエを救った伝説の戦士、プリキュアですピス。」

「私たちを知っているのね。」

「ナッツ様とご一緒に、一体何がありましたカシユ？」

「実は私たち……。」

「そうですかカシユ、都でそのような事がカシユ。」

「ミルク殿を失脚させたのはナッツ様という事になっているピス。」

「あなたたち以外にもプリキュアがいたとは知らなかったカシユ。」

「そして今は、その……仲間のプリキュアが国政を牛耳っている状態なの。」

「何と言う事ピス……。」

しばらく沈黙が続く。

「実はこの村に、ミルク殿がおらっしゃるカシュ。」

「え・・・ミルクがですか？」

「何でもナッツ殿への謀反の嫌疑でこの村に流されてきたみたいピス。」

「ミルクはどこにいるの！？すぐ会わせて頂戴！！」

「早まってはいけないカシュ！今あなたたちは体力を消耗しているカシュ！少し休んでから、そしてミルク殿に会われたほうがいいカシュ。」

「カシューの言う通りピス。ミルク殿は護衛に守られて無事なはずピス。今はあなたたちの体調がよほど心配ピス。ここはゆっくり休んで、それからでも遅くは無いピス。」

「そ、そうね。どうもありがとう。えっと・・・あなたたちは。」

「あ、これは申し遅れましたピス。ピスタチオの名前はピスタチオピス。」

「同じくカシューと申しますカシュ。2人ともこの村の住人カシュ。」

のぞみたちはしばらくの休息をとった後、ミルクが軟禁されているという場所に向かった。

「ちょっといいナツ？」

「こ、これはナツツ様！！いかなさいましたかケク！？」

「ミルクの顔を見たいナツ。面会の許可を欲しいナツ。」

「はっ！た、ただちに。」

見張りが鍵を開け、のぞみたちは中へと入る。

「ミ、ミルク・・・、誰ミルク？」

「久しぶりナツ、ミルク。」

「ナ・・・ナツツ様あ・・・。」

「私たちもいるよミルク。」

「のぞみたちまで・・・。皆どうしたミルク・・・？」

「ミルク、私たちと一緒に都へ戻ろう。」

「ミ・・・ミルク？」

「ミルクの無実は皆わかっているんだよ。皆ミルクの帰りを待っているんだよ。」

「今のパルミエはつぼみたちが牛耳っている有様よ。」

「つ……つぼみたちがミル……!?信じられないミル……。」

「私たちも信じたくありません。ですが事実なんです。先日私たちはつぼみさんたちと戦って、負けてこの村に落ち延びてきたんです。」

「この事態を收拾するには、どうしてもミルクの力が必要なの!」

「お願いしますミルクさん、私たちと一緒に来てください!」

「ミル……。」

「ミルク、ナッツからもお願いするナツ!」

「ナッツ様まで……。」

ミルクはしばらく思索した。そして。

「……わかったミル。」

「ミルク……!」

「皆はともかく、ナッツ様のお願いとあらば、逆らうわけにはいかないミル。ミルクは都に戻るミル。」

「……ありがとうナツ、ミルク。」

「ありがとうミルク！よく決断してくれたわ。」

「そうと決まれば長居は無用です。すぐにここから出ましょう。」

「ナツツは見張りと話し合ってくるナツ。」

その日の深夜、ミルクは軟禁先から救い出された。そして翌日。

「皆、都に帰ろう！！」

『YES！！』

「ナツツ様~~~~~！！ミルク殿~~~~~！！」

「プリキュアの皆さん~~~~~ん！！」

旅立つ前、村から誰かがやってきた。

「カシユーさん！ピスタチオさん！」

「皆さんが出発すると聞いて、お見送りに参りましたカシユ。」

「ナツツ様、ミルク殿、そして皆さん、このままではこのパルミエがまた滅びてしまいますピス。」

「国を失うのはもう沢山カシユ。皆さんの力で、またパルミエをお

救いくださいカシユ。」

「ありがとうカシユーさん、ピスタチオさん。私たちも本当にお世話になったわ。どうもありがとう。」

「礼には及びませんピス。困った時はお互い様ピス。」

「皆さんお元気で。ご無事を祈っておりますカシユ。」

「皆……ありがとうナツ。」

「本当にありがとうミル……。」

「あ、そうですカシユ。あのお、大した力にはならないと思いますが、村人を何人かお供させてほしいカシユ。」

「この者たちは今の状態に不満タラタラでございますピス。ぜひお連れ下されば……。」

カシユーとピスタチオが何匹か村人を連れて来た。

「喜んで預かるナツ！」

「同士は多ければ多いほうがいいもんね。」

「あ、ありがとうございますピス……！」

偶然たどり着いた村で体を休め、やはり偶然にも同じ場所に流され

ていたミルクを救出し、更には同土まで引き入れた5GOGOG組。  
村に来た時の疲労感が消え失せ、のぞみも無事に回復し、皆はまた  
もとの道に戻っていく。目指すはつぼみたちのいる都。

## 第20回 絆

偶然たどり着いた村でミルクと再会、解放。更に僅かな同士を引き連れて都へと向かった5GOGO組。都に向かう道中、我も我もと同士に加わる数が増え、最終的にはおよそ3千の大集団となった。

一方臨時政府庁舎内では。

「そうですか・・・、ミルクが脱出しましたか。」

「どうやら反対勢力は日を追う毎に多くなってるみたいだよ。」

「僕たちも、腹を決める時が来たみたいだね。」

「私たちの意見は一致しているわ。」

「皆最後までつぼみについて行くつもりよ。」

「皆さん・・・・・・・・すみません・・・・・・・・ここまで付き合わせてしまつて。」

つぼみが泣き始めた。

「今更泣き言は無しよつぼみ。私たちちつとも後悔なんてしてないわよ。完璧とまではいかなかったけれど、あなたとしては結構上出来だったわ。」

「美希さん……。」

「どうしてかしらね……。今私、とても晴れやかな気分だわ。何  
だか自分の仕事をやり遂げたような気分ね。」

「せつなさん……。」

「きっと彼女ならやってくれるはずさ。僕はそう信じているよ。」

「いつき……。」

「なあゝにしけた顔しているのよ！ここまで来たんだから、後は最  
後まで全力疾走しなきゃ！つぼみはもう昔のつぼみじゃないんだか  
らさー！！」

「えりか……。」

『私たちは、最後までずっと一緒だよ！だって仲間なんだから！！』

「ありがとうございます……ありがとうございます……  
。」

つぼみは下を向いて、声を出さず大泣きした。

数日後、5G0G0組とその集団は、都に到達した。のぞみたちは戦いに備えプリキュアへと変身し、国民たちも臨戦態勢に入った。

案の定共和国支持派の抵抗にあつたが、反対集団の必死の抵抗もあり、何とか足止めをしていた。

「くうう、これじゃあ先に進めないわ。」

「ルージユ、だからと言って攻撃技なんて使っちゃ駄目だよ。相手は同じパルミエ国民なんだからね！」

「わかってるわよ！！けどしつこいわねこいつら……！！！」

「皆さん、ここは私に任せてください。」

レモネードが名乗りを上げ、技を出す。

「プリキュア・プリズムチェー……ン！！！！！」

無数の鎖が市民たちを縛り上げる。殺してしまわないよう力を加減してあるようだ。

「ここは私が食い止めます！皆さんとナッツとミルクはやく王宮へ……！」

「頼んだわよ、レモネード……！」

レモネードが市民を縛り上げても、他に縛りもらした市民が待ち構

えていた。

「皆さん、邪魔をしないで下さい！あなたたちに構っている時間は無いの！」

「恨みは無いけど、しばらく眠っていて頂戴！」

ドリームたちは攻撃技を使わず、急所を殴って気絶させる戦い方をしている。しかしいくら頑張っても、次から次へと支持派の抵抗に遭う。

「全く……きりが無いわねこいつら！邪魔だと言っていているでしょ……！」

「皆どいて！攻撃されなくなったら今すぐ抵抗をやめなさい！」

再び臨時政府庁舎内。

カリカリカリカリ……。つぼみたちが何やら手紙を書いている。それも1枚の紙に皆が書いている。

やがて全員書き終わった。

「皆さん、書き終わりましたか？」

皆一斉につなずく。

「この手紙には、今の私たちの気持ち全て書かれています。これ

を皆に見せて、私たちの真意を広く伝え、後世に残す事。それが、  
私たち臨時政府の最後の仕事です。」

そう言うとおぼみは、1人1人にコップを配り始める。そして5つ  
のコップにジュースをなみなみと注ぐ。注ぎ終わると、またおぼみ  
が話し始める。

「これは特別なジュースです。皆さん、残さず飲んでくださいね。」  
わかってるわと皆答える。

「それでは皆さん。」

「パルミエ国民の幸福と。」

「パルミエ国民の安全と。」

「そして、この国の平和に。」

『乾杯！！！！！！！』

ゴクッゴクッゴクッゴク・・・。

皆、コップの中のジュースを全て飲み干した。



るっ。

「ぐ……ぐるじい……ぐるじいよおおおおお……!!」  
「!!」

「え……えりか……ほん……の……少しの……がまん……  
ですっ。ウウウ……!!!!」

「そ……そうよ、じきに全身に……まわ……って、  
ハア……ハア……ハア……」

「楽に……ウウツ、らく……に……なれるのよ……。  
グウウウウツツ!!」

「これ……で……これで良かったん……だよ……ね。  
っ……ぼ……み……」

「す……全て……は、パルツ……ミエツ……の為……  
……で……す……」

皆口々に言葉をつぶやく。そして。

「……!!」

「も……もっ……ダメ……」

震えが10秒ほど続き、全員動かなくなった……。

「!!!??」

「何なの今の声は!？」

市民の抵抗を何とか乗り越え、庁舎内に突入した5GOGO組。しかし、抵抗らしい抵抗が無い。更にさっきの大きなうめき声。一体何が起きているのか。

「急いで皆!！」

『Yes!!!』

急いで声のした方向へと向かう。

「この部屋の中ね。」

「確かにここから大きな声がしましたね。」

「何がどうなっているのかしら……?」

「1・2の3で突入するよ。」

「わかったわドリーム。」

「じゃあ行くよ。1……2の……さぁーーーーん  
！……！」

バターーーーーン！！扉が大きな音を立てて開いた。

そこには……。

「な……何なのよこれ……。」

「こんな事って、あっていいんですか……。」

「嘘よね……、こんな嘘に決まっているわ……！」

つぼみたちが1つにかたまって、皆倒れていた。そばには空のコップが転がっていた。

「うう……ううう……アアアアアアアアアアア  
ア……！」

ドリームが一目散につぼみたちに駆け寄る。

「つぼみちゃん！えりかちゃん！！いつきちゃん！！美希ちゃん  
！……！せつなちゃん！……！ねえ皆どうしたの……！皆起きてよ

「……ねえつてばあつ……!」

「落ち着きなさいドリーム!!今私が確認するから!!……ミント、ドリームを抑えて頂戴!!」

「わ……わかったわアクア!」

ミントが後からドリームを羽交い絞めにする。その間にアクアがつぼみたちの脈拍を調べる。

「……だめだわ……皆既に息絶えた後よ……」

「そ……そんなあ。」

「市民に手間取りすぎましたね……」

「市民を無視してまでも、もう少し早く王宮に到着していたら……」

「今となつてはもう遅いわ。悔やんでも仕方のないのよ……」

「つぼみちゃん……えりかちゃん……いつきちゃん……美希ちゃん……せつなちゃん……ねえ、皆目を開けてよ。起き上がつてよ。そして前みたいに皆で遊ぼうよ……ねえ……聞こえないの……?返事くらいしてよ……」

ドリームが信じたくないと言いたいように、事切れたつぼみたちに力なく呼びかける。

「ドリーム……信じたくは無いけど、彼女たちはもう……」

「ルージュ言わないで。それ以上聞きたくない……」

「ドリーム……」

ふとレモネードがつぼみたちのそばにある封筒を見つける。

「皆さん……これ……」

「……封筒？」

「宛名が私たちとナッツとミルク宛になっています。」

「中を開けて。」

レモネードが封筒を開くと、手紙が出て来た。

「読みますね。」

「レモネード、お願い。」

そして、レモネードが手紙を読み始めた。

## 第21回 遺言

5 G O G O 組と反対派が都で共和国支持派と攻防していた時、自ら毒をあおり壮絶な最期を遂げたつぼみたち5人。彼女たちの亡骸のそばには、ナッツとミルク、そしてのぞみたちへの宛名が書かれている1通の手紙が残されていた。レモネードが封筒を開き、その手紙を読み始める。

拝啓

5 G O G O 組の皆さん、あなたたちがこの手紙を読んでいる時には、もう私たちはこの世の者ではなくなっている事でしょう。ですが、気を落ち着かせて聞いてください。

まず、何故私たち5人が、ナッツ廃位、ミルク復権を求めた暴動を支持したのか。それは私たちの中で、ナッツに対する不信感から生まれた思いでした。私たちプリキューア一同は、かつて仲間として行動を共にしたココのあまりの変貌ぶりに、ショックと失望を隠せませんでした。このままではいけない、何とかしなければと、つぼみが王政を倒そうと発言したのです。ココを処刑したまでは良かったのですが、もう1体の王であるナッツはお咎め無しでした。ナッツがもう少し手を尽くしていれば、ココの暴走を止められたはずなのに。こんな事をする必要は無かったのに。皆さんの中ではナッツは何も悪くないと思っていたのですが、私たちはナッツを許せま

せんでした。そこで、『そつだ、お世話役であるミルクを使って・・』と考えたのです。

私たちはミルクに謀反の嫌疑有りという『冤罪』を着せ、日頃からミルクを快く思っていなかった家臣をそそのかして、ミルクを流罪にしました。ミルクの罪を並べ立てた罪状。そのほとんどがミルクの小さなミスを大げさに表現したものでした。ナッツのサインや被害者のサインも、過去の書状を王宮から探し出し、その中に記されていたサインを私たちが模写したものでした。

ミルクは流されました。そして私たちは、ナッツがミルクに冤罪を着せたと宣伝し、民衆の怒りをあおり、今度こそ王政を倒そうとしたのです。ナッツを廃位して、腐敗した王政に終止符を打ちたかったのです。

次に、私たちが何故、『パルミエ共和国臨時政府』と名乗ったのか。その鍵はミルクが握っていました。実は私たちは、ミルクをパルミエ共和国の首相に考えていました。私たちは結局よそ者でしかありません。なので民衆の支持など得られるはずありません。しかしミルクならば、強いリーダーシップと厚い支持で、共和国を任せられると思いました。私たちはミルクが流された後、指導者不在の都で、共和国樹立の下準備をし、しかるのちミルクに権限を移譲し、完全なるパルミエ共和国を誕生させようとしたのです。ミルクに冤罪を着させ、流罪にしたのも、ミルクが残っていたら共和国樹立を邪魔するのではないかと思い、しばらくの間、遠ざけようと考えたからです。あなたたちがミルクを脱出させ、反対する国民を率いて都に攻め上ってくる事も、計算のうちでした。国民の支持を得ているミルクがリーダーとなつて、国政を牛耳っている私たちを倒させ、国を救った英雄として迎えさせ、その暁にミルクを共和国首相にと思いました。

正直、あなたたちと戦うのは嫌でした。しかし時代の変革には、誰かが汚名を着なければいけません。その役目を担えるのは私たちしかないと考えました。私たちが犠牲となる事で、パルミエに永遠の平和と幸福と安全がもたらされるのなら、喜んでその役目を引き受けようと思いました。

ミルク、パルミエをよろしく頼みます。そして国民全体に夢と希望を与え続けるシンボルとなってください。それが私たちの最後の願いです。

長々となってしまうましたが、最後まで読んでくれてありがとうございます。ありがとうございました。そしてのぞみさんたち、こんな事に巻き込ませてしまって、本当にごめんなさい。ここで、私たちは筆を置こうと思います。皆さん、短い間でしたがお世話になりました。皆さんと会えて本当に嬉しかったです。それでは、さようなら。またいつか会いましょう。

敬具

花咲 つぼみ

来海 えりか

明堂院 いつき

蒼乃 美希

東 せつな

以上

「……以上です。」

レモネードが手紙を読み終える。

「……………」

一同手紙の内容を聞き、ただ黙るしかなかった。

「……………ねえミルク。」

「何ミル……ドリーム。」

「どうして首相に推挙されていた事、黙っていたの？」

ドリームがミルクに聞いたです。

「……………実はのぞみたちが村に来る前に、つぼみたちがミルクの所に来ていたミル。そして、『のぞみたちを混乱させないように、これは私たちだけの内緒』と言われたミル。」

「そうだったんだ……。」

「つぼみさんたちは、自らを犠牲にしてまで、このパルミエの平和を守りたかったのね……。」

「全く……、どこまで大馬鹿なのよあいつら!!こんな事をやっても……誰一人として……喜ばないってのにさあ……!」

ミントは落ち着いて、ルージュが感情的に言う。

「ミルク。」

「ナッツ様……。」

「つぼみたちは命を捨ててまでパルミエ共和国を作ろうとしたナツ。そしてミルクに国の舵取りを任せたいと思っていたみたいナツ。ミルクはやっていく自信はあるナツ?」

「ナッツ様……それってまさか!?!」

「ミルクにその気があるのなら、ナッツはミルクに国を任せてもいいナツ。ミルクなら国民の皆も、納得してついて来るはずナツ。」

「ナッツ様!そ……それではナッツ様が王様でなくなってしまう

ますミルク！それでもいいのですかミルク！！」

「国民がそれで幸せになれるのならば、皆も納得してくれるはずナツ。」

「ナ……ナツツ様ああああ！！！！！！！！！！」

ミルクはナツツの側により、大声で泣き始めた。ナツツはよしよしとミルクの頭をなでる。

「プリキュアの皆も、それでいいナツか？」

ナツツがのぞみたちに最終確認をとる。

「ナツツがそこまで言うのなら、もう私たちは何も言わないわ。大丈夫、ミルクならきつと大丈夫よ。」

「ミルクさんなら、この国を任せられるわ。」

「私もミントの意見に賛成です。」

「ちょっと小うるさいけれど、ミルクなら皆も納得するんじゃない？」

「ミルク、つぼみちゃんたちの思いを無駄にしちゃ駄目だよ！！」

「み……皆あ……」

「ミルクは良い仲間を持ったナツ。これでナツツも一安心ナツ。ミルク、パルミエを、よろしく頼むナツ！！」

「は………はいつミルク!!!」

その後ナッツとミルクは王宮前に現れ、小競り合いを続けていた国民に向かい、自らの王位の放棄と、ミルクの共和国初代首相への任命を発表した。反対派は最初納得がいかなかったようだが、しばらくして、ミルクならばと納得してくれたみたいだ。

ここに、長きにわたって続いたパルミエ王国はその歴史に幕を下ろし、新たにミルクを首相とする『パルミエ共和国』が誕生した。旧き時代は終わり、新しい時代が始まるうとしていた。

## 第22回 信頼

パルミエでの戦いの後、5GOG組は足取りを重くしてナッツハウスへと戻ってきた。そしてこっちの世界に残っていた他のプリキユアたちを集め、パルミエで起こった一連の事件を報告する事にした。

「今日は皆に知らせたい事があってここに集まってもらったわ。実は先日、パルミエで国民による暴動が発生したの。目的はナッツの退位と、ナッツの命令で流罪にされたといわれるミルクの釈放。そしてその暴動を扇動していたのが……、つぼみちゃん、えりちゃん、いつきちゃん、美希ちゃん、せつなちゃんの5人だったの。つぼみちゃんたちは王政を倒し、『パルミエ共和国』を樹立すると宣言した。私たちは、ナッツの命令は偽物、つぼみちゃんたちが間違っていると思って戦ったけれど、ぼろぼろに負けてしまったわ。その後故あってミルクの流刑地に偶然たどり着き、共和国反対派の国民と合流し、体制を整えて都に進軍したんだけど、その時……もう……」

のぞみが下を向き、言葉を詰まらせる。

「…………ウウツ…………ウウツ…………」

「のぞみちゃん、下を俯いたって私たち何もわかんないよ。その時一体どうしたの!？」

ラブがよくわからないとのぞみに続きを求める。のぞみは声を振り絞って続ける。

「私たちは賛成派の抵抗を抑えて、つぼみちゃんたちが籠る王宮に突入したの。そしたら……上のほうから変な声が出てきたの……。急いで階段を駆け上って、声のした部屋の前に到着して、部屋の扉を開けたの。そしたら……。」

「そしたら……?」

「……。」

「のぞみ!黙っていたってわからないわ!そしたらどうしたの?はつきり言いなさい!」

ゆりが少々きつい口調で言う。

「そしたら……そしたら……。」

「そしたら……?」

「……つぼみちゃんたちが、部屋の真ん中で、……  
・死んでいました……。」

「!!!??!!??」

「つぼみちゃんたちが、部屋の真ん中で、毒を飲んで……、死んでいました……。」

「……証拠はあるの?」

「つぼみさんたちのそばに、コップが5つ転がってました。かれんさんが調べたところ、恐らく毒を入れたジュースか何かを飲んで、そのまま息絶えたらしいです。こんな手紙もありました。」

のぞみはつぼみたちが書いた手紙をテーブルの上に出す。皆手紙を一通り読み、読み終えたら次の人に回した。

「……………嘘よ。」

「?」

「こんなの嘘に決まっているわ。つぼみちゃんや、美希ちゃんせつなちゃんが自殺するわけじゃないじゃない。自殺する理由なんてどこにも無いじゃない！自殺したなんて、私絶対信じない！！」

そう言っつて自殺を否定したのは祈里だった。

「……………祈里ちゃん、ラブちゃん、ゆりさん、これを……………」

「

のぞみは5つの小さな紙の包みをテーブルに並べる。



。。つぼみ。。。えりか。。。いつきい。。。。。。。。」

ゆりも下を向き、大粒の涙を流して泣きはじめた。

「ううつ。。。グスツグスツ。。。うう。。。うええええええん。。。。」

5GOGO組もへたり込み、皆静かに泣いた。

「のぞみ、皆。。。よく知らせてくれたわ。」

「な。。。なぎささああん。。。。」

「確かにつぼみたちは間違っていたのかもしれない。でもそれも彼女たちが精一杯考えに考えて出した結論だと思っの。私たちにはそれを責める権利は無いわ。」

「つぼみたちはパルミエ国民の夢と希望と幸せを願って、敢えて汚名を着たのね。それは並大抵の精神力じゃ絶対に出来ない事よ。」

「ほのかさん。。。。」

「経緯はどうであれ、つぼみたちはパルミエ共和国という新しい国を作ったナリ。そんな彼女たちの気持ちを無駄にしちゃいけないよ。」

「今は首相であるミルクを皆で助け、そしてパルミエ共和国を守り抜いていく事、それがつぼみさんたちへの最大の供養じゃないかしら。」

「咲さん、舞さん……。」

なぎさたちがそう言って、皆を慰める。

「でも……だからって……だからって……。」

「祈里ちゃん、泣いてばかりいてもどうにもならないわ。起こった事は起こった事よ。今はひたすらに前進するしかないわ。そうしなきゃ、つぼみたちまでがあので泣いてしまうわ。」

「大丈夫よ、ミルクなら国を任せられるわ。ミルクの事は私たちが良く知っているし、大丈夫よ。ミルクなら共和国を守っていける。」

「……はい。」

「信じようよ。ミルクを、パルミエ国民を、皆の力を。」

「……私信じる、ミルクちゃんならパルミエを守っていけるって、私信じてる……！」

「私も信じる。ミルクならいつか国民の皆を幸せに出来るって。いつか幸せをゲットできるって！そうですよねゆりさん……！」

「そうね2人とも……がんばってミルク、私たちも出来る事なら支援していくわ……。」

「それじゃあまたね！」

「ナッツやミルクによろしくと伝えといてね！」

「うん、わかった！じゃあね、また今度！！」

ミルク率いるパルミエ共和国。その旅路は、まだ船出をしたばかりなのだ。

## 第23回 新たなる火種

パルミエ共和国の首相となったミルク。まだ建国したばかりなので、あれやこれやと大忙しの日々を送っている。時には協力し合い、時には対立し合いながらも、ミルクは首相の職務をこなしていった。

そんな中、ある奇妙な噂が都に広まりつつあった。それは・・・。

「旧パルミエ王国国王、ココ王とナッツ王の他に、実はもう1人王子が存在している。その王子はスイーッツ王国に亡命しており、パルミエへの帰国の機会をねらっている。」

というものであった。

最初のうちこそミルクたち閣僚は、

「そんな事実は聞いた事が無いミル。きつと心無い者のいたずらミル。」

と、たかをくくっていた。

しかし事態はそう簡単には収まらなかった。スイーッツ王国はその「王子」を旧パルミエ王国の王子として支持していたのだ。それだけではない、パルミエ周辺のドーナツ・ババロア・クレープ・モンブラン諸王国も、王子として承認していたのだ。これはすなわち、共和国自体が周辺国に承認されていない事を裏付ける事実であった。

もはや事態は急を要していた。ミルクは閣議の中で、全プリキュアの共和国への召喚を提案。全会一致で了承され、直ちにプリキュアたちに伝達、プリキュアたちは共和国へとやってきたのだった。

「皆、急に呼び出してしまって本当にごめんミルク。でも、とても大変な事になってしまったミル。」

「ココとナッツの他に、もう1人王子がいたですって……？」

「でも、ミルクはその存在を知らないんでしょ？」

なぎさとほのかが、ミルクに確認をとる。

「今まで長い間お世話係を勤めてきたミル。けど、ココ様とナッツ様の他に王子がいたなんて、全く知らなかったミル。」

「それは、ココとナッツも知らなかったんですか？」

「どうなのナッツ？」

今回は同行者としてナッツが来ていた。ひかりと咲がナッツに聞く。

「ナッツも全く知らなかったナツ。父上様と母上様からもそんな事は聞かされなかったナツ……。」

「そう……。」

「ごめんナツ。力になれなくて。」

「何も気に病む事じゃないです。気にしないで下さいナツッ。」

「それじゃあ、その王子は、一体何者なんだろう……。」

ひかりと咲は首をかしげる。

「もしかしたら……偽者じゃないかしら……?」

「こまちさん?」

「その王子って名乗っている人は、本当は王国の王子でも何でも無く、普通の市民じゃないかって事。担ぎ出されているだけじゃないかしら。」

「何が言いたいんですかこまちさん。」

りんが少しイラついた口調で言っ。

「もしかしたら周辺の国は、その王子を担いで、あわよくばこのパルミエを……。」

「まさか!?!?」

「可能性が無いとは言いきれないわ。だって周辺の国は、ミルクさんの共和国を承認していないんでしょう?」

「た・・確かに。」

「今はまだ平穏だけれど、いつ何が起こるかわからないわ。しばらくは共和国にとどまって、様子を見たほうがいいと思うの。」

「私もこまちの意見に賛成よ。共和国になったとはいえ、まだまだその実体は弱小よ。今はこの国を守っていく事が一番大事だと思うわ。」

ゆりがこまちの意見に賛同する。

「私よくわかんないけれど、今ミルクはとても困っているんだもん。困っていたら助けるのが筋だよ。」

「そうだよ、もう2度とあんな悲劇を繰り返させないために、この国を守らなきゃ!」

続いでのもみとラブが賛同する。更に他のプリキュアたちも次々に賛同した。

「よ〜〜し! またパルミエにピンチが来たけど、私たちプリキュア全員で守っていくぞおお!!」

『けって〜〜〜〜〜い!!!!!!!!!!!!!!』

「皆、ミルクに力が無いばかりに、本当にごめんミルク……。そして、ありがとうミルク……。」

その日の夜から、プリキュアと市民で外部からの見張りをすることになった。国境の城壁は市民たちが、政府庁舎周辺はプリキュアたちが、それぞれ担当する。

今、新たななる火種が、パルミエ共和国に降りかかるうとしていた。

## 第24回 爪弾く人々

見張りを始めてから2週間経過した。外部からの進入等は今のところ報告は入っていない。パルミエ国民は、とりあえずは平穏な日々を送っていた。

「のぞみちゃん、交代の時間だよ。」

「あ、ラブちゃん。もうそんな時間なんだ。じゃあ、後はよろしくね。」

政府庁舎前、見張りの交代時間となり、のぞみはラブに見張りを引き継がせ、気分転換に街をぶらつく事にした。

「気をつけてねのぞみちゃん。」

「うん、ラブちゃん行って来るね。」

「とは言ったもの……ふあ……あ……あ……眠い。」

いくら何事にも前向きなのぞみでも、体力を使う見張り役は体にこたえるのだらう。眠たい目をこすりながら散策をしていた。

しばらく街中を歩いていると……。

~~~~~

「………音楽………?」

のぞみは最初幻聴だろうと思った。頬をつねって目を覚まさせるが、やっぱり音が聞こえる。

「聞こえる………あっちからだ!」

音の聞こえるほうへのぞみは走る。

「~~~~~

パチパチパチパチ

ピューピューピュー

そこでは確かに演奏が行われていた。観客にも好評のようで、大喝采が起きている。

「みんな、どうもありがとう！じゃあ次のナンバーは……。」

「ちょ……ちょっと響、休憩しよう。私腕が疲れちゃった。」

「えくく！？もう休憩するのエレン。まだ10曲しか演奏していないじゃん。」

「10曲も演奏したんでしようが！響、これ以上無理させると、もうケーキ食べさせないからね！！」

「ず……ずるいよ奏！ケーキを楯にするなんて！！」

「へえくいいんだ、もうケーキ食べられなくなっても。」

「……………わかりました。」

「あれは、響ちゃんに奏ちゃん……？それに知らない子もいる。一体誰なんだろう……？」

のぞみは演奏が終わるのを見計らい、彼女たちの元へ向かう。

「ふう……お疲れ様エレン。初めてにしては上々だったわ。」

「ありがとう、そう言う奏も見事なドラムスだったよ。さすがリズムを名乗るだけあるんだ。」

「まあ・・・まだ慣れていないんだけれどね。」

「響のキーボードも格好良かったよ。」

「ありがとうエレン！やっぱり仲間は多く持つものだね。」

「アハハハハハハ・・・。」

「響ちゃん、奏ちゃん・・・？」

『の・・・のぞみちゃん！？』

「ど、どうしたのここで！？」

「ちょっと街を歩いていたら音が聞こえてきてね。来てみたらあなたたちが演奏していたから。」

「そうなんだ！！ねえねえのぞみちゃん！あたしたちの演奏聴いてくれた！？」

「うん、とっても良かったよ。皆息ぴったりで。」

「良かったあ、ありがとうのぞみちゃん。」

「響ちゃんたちはどうしてパルミエで演奏なんかしているの？」

「実はミルクから御呼ばれされてさ、ここ最近パルミエはかなり大

変な事態になっているから、せめて音楽で皆の心を元気にしてやってくれって頼まれたんだ。」

「困っていたら放っておくわけにはいかないでしょ。」

「そうだったんだ。ところで2人とも、その子は一体誰なの？」

「あ、そうだ、のぞみちゃんとは初対面だったね。ほら、挨拶して。」

響がエレンに言う。

「あ・・はじめまして、私はエレン、黒川エレンです。」

「へえ、エレンちゃんって言うんだ。かわいい名前だね。私は夢原のぞみ、どうぞよろしくね！」

「よ、よろしく。」

「それにしても、皆楽器が弾けるなんて、すごいなあ。」

「そんな事ないよ。私たちもこういう楽器はまだはじめたばかりだから。」

先ほどの演奏では、響がキーボード。奏がドラムス。エレンがギターを担当していた。

「のぞみちゃんたち、今まで大変だったのね。ミルクからいろいろ聞いたわ。」

「ココやつぼみちゃんたちの事も……。」

「響言い過ぎよー!」

「あ……ごめん。」

「ううん、いいよ。気にしていないから。」

「でも、こんな事言っちゃ何なんだけど、彼女たちのおかげで今の平和があるんだね。」

「いつまでも続いていくといいんだけどね。」

「ミルクたちなら、きっと出来ると思う。」

「そうだね、それが一番だよ。ありがとう3人とも。」

「じゃあ私たち行くね。次のお客さんたちが演奏を待っているから。」

「のぞみちゃん、困った事があつたらいつでも呼んでいいからね。」

「私たち、すぐに駆けつけるから。」

「うん、わかった。じゃあ、また後でね!!!」

演奏を聴いてすっかり元気になったのぞみ。時計を見たらそろそろ交代時間が来ると知り、急いで庁舎へと戻っていった。

## 第24回 爪弾く人々（後書き）

今回スイート組が演奏していた楽器は。

響⇨幼い時からピアノをやっていた⇨キーボード

奏⇨変身後の名前がキュアリズム⇨リズムといえばドラムス

エレン⇨ギター型の武器を用い、ギターを弾いているカットもある  
⇨ギター

という設定で演奏させました。



「王国から共和国になったとはいえ、国民の生活は余り変わつたらんみたいやな。結構結構。うちらも少しは見習わなあかな。」

庁舎に向かう途中、タルトたちはパルミエ国民の暮らしを歩きながら見物する。飢饉、クーデター、暴動、革命の四重苦があつたにも関わらず、国民は明日の糧を得る為、日々一生懸命に生きている。

「タルト様。間もなく到着いたします。」

「わかつとる。気を引き締めな。」

「タルト王子、お待ちしておりましたミル。」

「ミルクはん、あんさんも相変わらずで何よりや。」

庁舎に到着し、タルトは広間へ案内される。そこには既にミルクがテーブルに座って待っていた。

「しつかし、ミルクはんがパルミエの首相とはなあ……、出世したもんや。」

「痛み入るミル。」

お世辞も終わり、いよいよミルクとタルトの二者会談が始まる。

「タルト、スイーツ王国に旧王国の王子が亡命しているのは、本当ミル?」

「ホンマや。陛下をはじめ多くの家来がパルミエ王国の正当継承者として承認したる。」

「つまりパルミエ共和国を、スイーツ王国は承認していないという事ミル?」

「そう言うことじゃ。それにドーナツ等の諸王国もパルミエ共和国を承認したらんみたいやなあ。うちに亡命したる王子を、大人しく早う迎え入れえとまで言うて来とるらしいやないか。」

「そうミル、最悪の状況ミル・・・。」

「ミルクはん、あんさんどないするつもりや。このまま何もせんでも、この状況はズーっと変わらへんで。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「スイーツ王国は王子を奉じて、パルミエ共和国に行く時まで言うてる。それはすなわち、・・・・・・・・・・・・・・・・・・パルミエと断交し、ドンパチする事も辞さんと言ったことじゃ。他の国も同じやるなあ。」

「何て事ミル・・・。」

「ミルクはん、悪い事は言わん。王子を迎え入れて、またパルミエ王国を復活させてくれんか。わいはパルミエやミルクはんとは戦うなんてまっぴらごめんや！」

「タルト……。」

「頼む！わいの一生のお願いや！せつかく仲良うなったのに、こんなつまらん事で引き裂かれるなんて末代までの恥や！頼むミルクはん！考えたつてくれえつ！！！」

タルトはその場に土下座し、半泣き声でミルクに懇願した。

「タルト、ごめんミルク。」

「ミ……ミルクはん……!?!」

「タルトの気持ちは痛いほどよく判るミルク。でもこの共和国は、多くの尊い犠牲の上に成立したミルク！今王子を受け入れたら、犠牲者たちの気持ちを裏切ってしまう事になるミルク。ココ様……つぼみ……えりか……いつき……美希……せつな……そして多くの国民の皆。そんな数知れない犠牲の上に成立したかけがえの無い共和国ミルク。ミルクはこの共和国を守り抜く責任があるミルク。我がパルミエ共和国は、その『王子』をパルミエ王国の継承者として断じて承認できないミルク！！！」



のぞみたちが驚きの声を上げる。

「スウィーツもドーナツもその他の国も、自国の要求を取り下げなかったミル。」

「回避する手段は他に無かったの!？」

「無理だと思うわ。向こうが要求を取り下げないんじゃ、手段も何もあったものじゃないわ。そうでしょう?」

ゆりがミルクに言った。

「タルトたちは、また今度来るって言っていたミル。そこで最終結論を出すつもりミル。」

「そう……。じゃあまだ希望はあるのね。」

「どうかしら?もう期待しないほうがいいかもしれないわ。」

しばらくすると、ミルクがプリキュアたちに尋ねてきた。

「皆に聞きたいミル。もし今度の交渉が決裂して、諸王国が王子を奉じてパルミエに侵攻して来た時、皆はどうするミル?」

「決まっているでしょ。パルミエ共和国を守るためなら。」

「戦うしかないわね。」

「例えそれがタルトさんたちであろうと。」

なぎさ、ほのか、ひかり。MH組は戦うと言った。

「私たちも同じ意見だよ。」

「つばみさんたちの犠牲を無駄にしないためにも。」

咲と舞のSS組もなぎさたちに同調する。

「私たち戦うわ。」

「せっかく未来に向かって歩き始めたパルミエ共和国。」

「その道を邪魔するのだったら。」

「黙っているわけにはいかないわ。」

「私たちはこの国を最後まで守り抜くわ。」

5GOGO組も全員の意見が一致した。しかし……。

「ミルク、私たちにもう少し考える時間を頂戴……。」

「まだ完全には決められないのよ……。」

ラブと祈里とゆりはもう少し時間をくれと言った。まだ仲間を失ったシヨックが残っているのだろう。

「・・・わかったミル。タルトたちは2カ月後にまた来るミル。それまでよく考えて、答えを出して欲しいミル。」

「うん・・・、ありがとうミル。」

パルミエ共和国の進む道。決定まであと2ヶ月。

## 第26回 疑惑

『戻ってもいい!?!』

ある日の事、プリキュアたちは突然ミルクからそう告げられた。しばらく敵の来襲は無いだろうと予測し、休息も兼ねての帰郷との事だ。

「プリキュアたちに任せてばかりいられないミルク。ここはミルクとナッツ様、それに国民の皆で監視を続けていくミルク。だから皆は休息をとって欲しいミルク。」

「で、でもミルク、あなたたちだけで大丈夫なの？もし私たちが休んでいる間に攻めて来たら……。」

「心配要らないミルク。国民たちも一致団結してこの国を守ろうと頑張っているミルク。それでもミルクはミルクイローズとして国民たちの大きな力になるミルク。」

結局プリキュアたちはミルクの言葉を受け入れ、元の世界へと一時戻っていった。

ナッツハウス、帰郷した翌日の夜、プリキュアたちが密かにここに集合した。しかし集まったのは5GOGO組とSS組とMH組だった。

「ねえ皆、今の私たちにとって目の上のごぶって何なんだろうね？」

「と・・・突然どうしたのぞみ？目の上のごぶって。」

りんはのぞみの言葉に違和感を持つ。

「ここにいる私たちは、皆パルミエ共和国を守ろうと約束したよね。だけど私たちの中には、もしかしたら目の上のごぶになるかもしれない人物がいるんだよ。」

「私たちの中に・・・？一体誰なのよ？」

今度はなぎさがのぞみに訊ねた。

「皆、本当にわからないの・・・？」

皆が一斉に頷いた。のぞみは一息ついて、その名を言った。

「ラブちゃんたちだよ。」

「……ラブたち……!?」

皆の顔が驚きの表情をする。

「正直言って、スウィーツ王国やドーナツ王国等、以降は『連合』  
って勝手に呼ぶね。連合には強い戦力は存在しない。皆で力を合わ  
せればたちまち撤退するでしょうね。ただ1つ心配なのが……。」

「心配なのが……?」

「連合とラブちゃんたちが結びつく事だよ。」

のぞみがそう言うと、皆は言葉を失った。そんな事があり得るのだ  
ろうかと。

「皆も知っている通り、私たちは共和国樹立前につぼみちゃんたち  
と戦った。そして彼女たちを間接的に死に追いやってしまった。暴  
動現場で何とか説得できていれば命は救えたのかもしれない。けど  
できなかった。ラブちゃんたちは、私たちの前では協力する素振り  
を見せているけど、一緒に戦った仲間に先立たれて、内心悔しい思  
いをしているかもしれない。ひよっとしたら、私たちを憎んでいる

「のかもしれない。」

「ラブさんたちは、もしかしたら寝返るかもしれないって言いたい  
の!?!?」

「私も考えたくありません。ですがラブさんたちはスイーツ王国  
とはよしみを持っています。」

「スイーツ王国に加担してもおかしくはない……!?!?」

「だからあの時答えを出すのを渋っていたの……?」

「じゃあ最悪の場合、ラブたちと……。」

「とりあえずは様子を見よう。変な動きをしなければそれでいいん  
だから。」

「そうね、それがベストよね。」

「もし寝返る動きがあったら、力づくでも止めよう。何が何でも止  
めよう。」

『うん。』

「……………私はもう嫌だよ。これ以上仲間が死んでいくのは……………」

のぞみは声を震わせながらつぶやいた。

「のぞみ、あんた変わったね。仲間を疑うなんて……………」

のぞみの緩やかな変貌に、りんが落胆するように言った。

「疑いたくもなるよ。だんだん皆を信じられなくなっていくようだよ。」

## 第27回 夢と未来の為に

『スイーッ王国に味方する!?!』

「うん、私決めたの。スイーッ王国に加わるって。」

ナツツハウスで話し合いをしていたちようどその頃、ラブ、祈里、ゆりの3人は、桃園家に集まり、話し合いをしていた。

「ラブちゃん、そんな事したらなのぞみちゃんたちとは……。」

「わかってる。最悪戦わなければいけないかもしれない。けど仮にパルミエが負けて、プリキュア全員が倒されてしまったら、それこそ未来への望みが絶たれてしまう。それだったら、私はあえてスイーッ王国に加担し、プリキュア全滅を回避したほうがいいと思うの。」

「危険な賭けね。例えスイーッ王国といつても、パルミエや私たちをどういう風に扱うのか判ったものじゃないわ。ドーナツやババロア等の王国もパルミエが欲しくて欲しくてたまらないはずよ。パルミエを巡って内輪もめが起こるかもわからない。そうだったら、この世界はまた破滅の危機を迎えるのよ。それに私たちも、『裏切り者』の烙印を押されてしまうのよ。」

ゆりがラブに警告する。

「かまいません。もしスイーッやドーナツがパルミエで乱暴を働いたら、その時は王国を見限って、パルミエの為に戦います。」

「それでいいの？どちらにしても多くの国民が犠牲になる可能性があるよ。」

「元より承知です。それを怖がっていたらプリキュアは務まりません。私たちはもう茨の道を進み始めているんですから。」

「ラブ……。」

「ラブちゃん……。」

「わかったわ。あなたがそこまで言うのなら、私たちはもう何も言わない。あとはただひた走るだけよ。」

「すみません、ゆりさん。」

「私、ラブちゃんを信じてる。パルミエを信じてる。そして、希望と未来を信じてる。」

「ありがとうブッキー。その気持ちさえあれば十分だよ。」

翌日、ラブたち3人はスイーツ王国へ投降した。しかしそれは表向きであり、故あらば寝返るといふ偽りの投降だった。

「ごめんねのぞみちゃん。だけど許して。これも皆の為なの・・・。」

「美希ちゃんやせつなちゃんに顔向けが出来ないけれど・・・。」

「つぼみ、えりか、いつき、安心して。あなたたちの行動を、私たちは絶対に無駄にさせないわ。」

2カ月後、パルミエ政府庁舎で最終交渉が行われた。スウィーツ王国ら連合は以前の要求を再度ミルクに突きつけた。しかしミルクはこれを再度拒否。交渉は決裂し、開戦は決定的なものとなった。

更に1カ月後、ついに連合は総力を率いてパルミエに侵攻。その数およそ4万。パルミエ共和国最初の試練が、今始まるうとしていた。

## 第28回 激闘

遂にパルミエ共和国に侵攻してきた、スウィーツ王国を中心とした連合軍。その勢い、ナイアガラの滝の如く。

『セーノツ！ セーノツツ！！ セーノツツツ！！！ セーノツツツ！！！！！！』

連合軍兵士たちは大きく長い木の棒を使い、一気に城門突破を試みていた。

「皆頑張つて！ここを突破されたら後は庁舎までまっしぐらなのよ！！！！」

城門守備を指揮しているのは、キュアブラックとキュアホワイト。そしてシャイニールミナスらMH組である。衛兵たちと協力し、その驚異の力としぶとさで、で何とか城門を押しとどめている状態だ。

「例え相手がスウィーツだろうと、連合だろうと・・・！！」

「パルミエを脅かすのであれば、容赦はしませんっ！！！！」

しかしそれがミスだった。城門を突破しようとする兵のほかに、はしごをかけ、そこから国内に突入する者たちがいた。

「しまったっ！城壁を突破されちゃう！！！！」

その時だった。不意を突かれたMH組は城門を抑える力を弱めてしまった。その隙を狙い、突破する兵士の力が大きくなった。

ズツツドーーーーー！！！！！！

もはや城門はその機能を果たせなくなっていた。連合軍は城門を突破。一気に共和国領内へなだれ込んだ！！

「……………城門を突破されてしまった……………」

「嘆いていても仕方ありません！もはやここにおいても無意味です。ブルームとイーグレットに合流しましょう。」

「わかったわ！急ぎましょう！！」

首都市街地。怒涛の進撃を続ける連合軍は、ここで共和国軍と激突する。激しいもみ合いの中、数で勝る連合軍に対し、少なくとも無いが連合軍からすれば少数に見える共和国軍と一進一退の攻防を展開していた。

市街地で指揮をとるのは、キュアブルームとキュアイーグレットのSS組。

「かけがえの無い共和国を侵略する者どもよ！」

「阿漕な真似はおやめなさいっ！！」

名乗りを上げた2人は、敵中に割り込んでいった。

「でええええいつっ！！！」

「そりゃああああっっ！！！」

敵の急所を命をとらない程度に攻撃し、次々と気絶させる。

「いいみんな！いくら敵とはいえ、相手はスウィーツ国民等の妖精たちよ。命を奪っちゃ駄目！戦闘不能にするだけでいいのよ！！！」

ブルームは皆にそう指示した。その言葉に応え、守備兵たちも奮戦する。

「ブルーム！いくら倒しても倒してもきりが無いわ！！！」

「イーグレット！これしきの事でへこたれないで！ここを突破されたら、庁舎まで無防備なのよ！！！」

「……そうだよな。このパルミエを守らなきゃ、ココさんやつぼみさんたちは一体何の為に死んでいったの……！？ココさんやつぼみさんたちの心を無駄にしないためにも……。」

「パルミエの平和と幸せを守るためにも……。」

『ここは絶対に突破させないっつー!!』

「甘いわよあなた達!!!!!!」

「……………その声は……?」

「……………ブルーム!!あ…あれ!!!!!!」

イーグレットが指差した先には……………。

「いやああっつー!!」

「たああああっつー!!」

「はああああああっつー!!」

「ピーチ…パイン……ムーンライト……!!!!???」

「そんなどろろっつーてるのよ!!」



「イ……イーグレット!!!」

「ゲホツゲホツゲホツ……ゲエエエホツツ!!!」

イーグレットはその場にへたり込み、鳩尾を押さえ咳き込んでいた。

「……よくもやってくれたわね。ピーチツツ!!!」

「だったら何だって言うのよ!」

「決まってるでしょ。あんたたちを戦闘不能にしてあげるわあつ!」

ブルームはたった1人で戦闘を再開した。

「あ、ブルームだわ!それに……ピーチ、パイン、ムーンライ  
ト!?!」

「イーグレットが座り込んでる。一体何があったの……?」

そして、MH組がSS組に合流した。

「ブルーム!これは一体!?!」

「寝返りよ……!こいつら敵に寝返ったのよ……!」

「ええっ!寝返り!?!?!」

「これで3対3。イーブンね。」

「何人寄ろうと関係ないわ。まとめて叩き潰すのよ!!」

「何があったのか知らないけれど。」

「敵対するんだったら、いくらあんたたちでも容赦しないわっ!!」

3対3とイーブンなのは良かったが、MH組は先ほどの城門攻防戦でかなり体力を消耗していた。最初はピーチたちと互角に戦っていたが、次第にピーチたちが優勢となり、連合軍の大勢の援護もあって、遂に市街地を突破されてしまった。

「くっそおおお・・・、城門で手こずらなければ・・・。」

「ブラック、諦めるのはまだ早いよ。またのぞみやミルクたちが残っているわ。後は彼女たちに託しましょう・・・。」

「連合軍にもかなりダメージを与えられたはずよ。大丈夫よ。きっと彼女たちならやってくれるわ。」

「でも・・・どうしてピーチたちは・・・。」



ローズたちも負けじと戦う。

「邪魔をしないで雑魚ども！！そんなにおねんねしたいのかしら！？」

ローズのパワーが圧倒し、敵兵を次々と戦闘不能に追いやる。

「すごいよローズ！さすが蒼い薔薇の戦士だね。」

「ドリームツ！しゃべっている暇があるのなら敵を食い止めなさいよ！！他の皆を見てみなさい！！」

「何よお、そんな言い方しなくて良いじゃないのお！」

軽いロゲンカをしつつも、ドリームも負けじと戦う。なるべく命を奪わぬよう。

「ドリーム！ローズ！！そこまでよっ！！！！」

「MH組とSS組は私たちが片付けたわ。大人しくそこをどきなさい！！！！」

ピーチたちも庁舎前にやって来た。

「ピーチ、パイン、ムーンライト。あんたたち、やっぱり裏切ったわね。」

「裏切った……？ドリーム、あなた何を言っているのよ。」



『ソーレッツ！ソーレッツ！！ソーレッツッ！！！！』

「まずい！庁舎に突入されてしまう！」

「だめよ！ピーチたちが邪魔して救援にいけない！」

「皆頑張つて！絶対に突破させちゃ駄目よ！！！」

「何よそ見しているのよ。ソーレッツ！！！」

「アアアアツツッ！！！！！」

ピーチのパンチがドリームの顔に当たった。

「イアアアアアアアア！！！」

「キヤアアアアアアアツツ！！！」

パインのキックがミントに直撃した。

「ソオレエエエエエ！！！！！！！」

ムーンライトも次第にアクアやルージュたちを圧倒していく。

「……駄目だわ。手も足も出ない。」

「もう……これまでだって言うの……？！」

その時だった。

シュワワワワワアアアア

空の彼方から、5つの光の球体がすごい速さでやって来た。

「な・・何!？」

「何なのこの球体は!？」

双方目をぱちくりさせる。

『ローズ、ドリーム、そして皆。負けちゃいけません!!!』

『あなたたちは、パルミエの最後の希望なのよ!!!』

「そ・・・その声は・・まさか・・・!!!?!?!?」

光の球体は、徐々に人の姿を現してきた。それは何とも懐かしい顔。

「あ・・・あなたたちは・・・!!」

「大地に宿る一体の魂、スピリット・ブロッサム!!」

「海風に揺らめく一体の魂、スピリット・マリン!!」

「陽の光の如き一体の魂、スピリット・サンシャイン!!」

「ブルーのハートは希望の魂! つみたてフレッシュ、スピリット・ベリー!!」

「真赤な魂は幸せの証! 熟れたてフレッシュ、スピリット・パツシヨン!!」

「パルミエの平和を守るため!」

「パルミエの幸福を守るため!!」

「冥土の世界より只今参上！……！」

『我ら、スピリットプリキュアッ……！！……！！……！！』

## 第29回 不条理な終戦

『スピリット……プリキュア……!?!?』

戦いのさなか、突然現れた未知の5人。その顔は、かつて自ら命を絶った、つぼみ、えりか、いつき、美希、せつなに瓜二つだった。

「つぼみちゃん……あなたはつぼみちゃんなの？」

「そうですよドリーム。私は花咲つぼみ。かつてはキュアブロッサムとして戦っていましたが、今はスピリットブロッサムとしてここにいます。」

「ま、要するにあたしたちは『靈魂』のプリキュアなだけだね。」

「れ……、靈魂……!?!?」

「どつしたのルージュ？」

「靈魂つてさ、要するに……ゆ、ゆ……、」

「幽霊に決まっているでしょ。」

スピリットベリーが割り切ったように答える。

「う……ううう……うわああああああ……!?!?!?!」  
「!」

ルージュが突然絶叫し、その場を立ち去ってしまった。



ピーチたちが周りを見てみると、連合軍は火が消えたように戦意を喪失していた。そして自ら退却していった。

「ちょっと、これはどういうことよ。」

「元々彼らは戦いには消極的だったのよ。パルミエに敵対する動機も無かったし、彼らもわけがわからずに引つ張られてきたみたいだしね。」

「ですからあなたたちにも、もう戦う理由が無いんです。ここは大人数く投降したほうがいいですよ。」

ブロッサムが投降を勧める。

「私は嫌よ。」

「ムーンライト!?!」

「それじゃあ私たちは今まで何の為に戦ってきたの?こんなんじゃない、見捨てられたも同然じゃない。そんなので納得なんてできるわけないわ。」

「ムーンライト……。」

。それだけ言うと、ムーンライトは何処かへと去っていった……。

「ま……待ってよムーンライト!!」

「置いて行かないで下さーい!」

ピーチとパインも、ムーンライトについて行った。

「ちょ……ちょっと!?? 3人ともどこに行くのよ!?!?」

ブラックが追いかけてようとしても。

「いいのよブラック、追いかけてなくても。もう、終わったんだから。」

「それでいいのドリーム!??」

「私、何だか疲れちゃった……。」

それだけ言うと、ドリームは庁舎内に入っていった。

「私たち、邪魔だったかしら?」

「そんな事無いんじゃないの?」

「けれどこれで、一安心、なのかもしれないね。」

ブロッサムたちも、いつしかその姿を消していった……。

一週間後、連合とパルミエ共和国との間で、停戦協定が締結された。突然起こった戦乱は、また突然に終結したのである。匿われていると言う『王子』の存在も、うやむやにされてしまった。

しかし停戦協定締結当日、のぞみの姿が、忽然と消えてしまった……。

### 第30回 存在意義

「のぞみ~~~~!どこにいるの~~~~!?!?」

「いるのなら返事をしてください!!」

のぞみが消息を絶ってから1ヶ月が経った。プリキュアたちは懸命に捜索を続けているが、一向に消息が掴めない。国民にも呼びかけはしているが、有力な情報は入らない。

一通り聞き込みを終えたMH組が、庁舎前に集合した。

「どうだった?」

「駄目だったわ。姿はおるか影かたちすら見かけなかったそうよ。」

「そう。。。。」

「ラブたちといい、のぞみといい、一体どこに行ってしまったのよ。」

「もしかしたら、死んでいるのでは。。。。」

「ひかり!滅多な事を言うもんじゃないわ!そりゃいつもは、。。。  
・まあ言っちゃ何なんだけど、バカ丸出しな子だけれど、やるべきにはやる子でもあるのよ。そんなのぞみが容易く死ぬわけなんて、ぶっちゃけありえないでしょ!!」

「ごめんなさい。言い過ぎました。」

一方その頃、首都から遠く離れた森の中。ここに連合軍に加担したとして、追われる身になっていたラブたちが潜んでいた。

「ラブちゃん、ゆりさん、もう投降しよう。これ以上逃げ回っても無意味だよ。」

「祈里、今投降してどうするつもり？投降したら最後、終身刑か処刑は免れないわよ。」

「でも！前の戦いで皆わかってくれたはずよ。終身刑ならまだしも、処刑はされないはずよ。」

「わからないわよ。国民は許してはくれないじゃないかしら。」

そこへ。

ガサゴソガサゴソ

「ラブちゃん、祈里ちゃん、ゆりさん。」

「の、のぞみちゃん!？」

「どうしてここに？」

「私たちを連れ戻しに来たの？だったら絶対戻らないわ。」

3人は警戒する。

「違うよ。森の中を歩いていたら、ガサガサ草陰から音がして、近づいたらあなたたちがいたんだ。」

「そうだったの。」

「お邪魔して良いかな？」

「え?・・・ええ、いいわよ。」

「で、用件は何？」

ゆりがのぞみに用件を聞く。

「皆、『プリキュア』って、一体何なんだろう。私たちは何で戦っているんだろう。」

「ど、どうしたの突然？」

「私わからなくなってきたの。倒すべき敵を倒したら、平和が訪れる。そうなたら私たちはどうなるの？お払い箱に捨てられちゃうの？プリキュアはもう必要とされなくなっちゃうの？」

「のぞみちゃん何が言いたいの？私よくわかんないよ。」

「平和になるのなら、それでいいんじゃないかしら。」

ラブが頭を抱え。祈里が答える。

「ラブちゃん、祈里ちゃん、プリキュアの役目って何？……皆の夢と希望を守る為に戦うんだよね。それらを脅かす奴らは倒さなければいけない。だけど戦いには常に敵を必要としなければいけない。戦う事がプリキュアの仕事だから……。」

「……………」

「戦いを取り上げられたら、何の役にも立たないヘツポコ同然の存在になる。それはプリキュアに限らず、全てのヒーローやヒロインにも言える事だよね？倒すべき敵がいるからこそ、ヒーローは輝く存在になるんだよね。」

「じゃあのぞみはどうしたいの？」

「私は、このパルミエの敵になる！」

「て・・・敵!？」

「プリキュアがヒーローである為に、皆の希望の象徴であり続ける為に、私は敢えて皆と敵対する！だからお願い、私に力を貸して欲しいの!!」

「のぞみちゃん！気は確かなの!？皆と敵対するなんて!!」

「私は本気だよ！そうでもしなきゃ、プリキュアはプリキュアで無くなるんだよ！さっきも言ったよね。戦いを取り上げられたら、プリキュアは何の役にも立たなくなるって。」

「のぞみちゃん・・・・・・・・あなたって・・・・・・・・。」

祈里は言葉を失う。

「おもしろそうね。」

「ゆ、ゆりさん!？」

「プリキュアがヒーローとしてあり続ける為に、敢えて敵となる。実に勇敢じゃない。私そんなのぞみに賭けてみたくなったわ。あなたについて行く覚悟よ。」

「パルミエへの反旗か。危険ではあるけれど、やってみる価値はあるのかもしれない……。」

「ラブちゃん!」

「ありがとうゆりさん、ラブちゃん。……祈里ちゃんはどこうするの?」

「ブツキーも一緒に戦おうよ。」

「プリキュアである為にね。」

「………うん。」

祈里は小さな声で同意した。

「よぉ〜し! もう後には退けないぞ! プリキュアがヒーローである為に、夢と希望の象徴である為に、私たちは敵として、パルミエに反抗するぞぉ〜……!」

『けつて〜〜〜い! …!』

その言葉には、いつものような楽天的な響きは無く、決意を込めた響きを持っていた。

辺りは暗くなり、まもなく夜になるうとしていた。

### 第31回 理想郷

ドンドンドンドンドンドン

コーンコーンコーン

ガガガガガガガガガガ

「大分完成してきたね。」

「そうだねラブちゃん。」

「ここが、私たちの新しい住処。」

「そして、新しい地獄……。」

パルミエ奥地の丘陵地帯。この地でのぞみたちは、自分たちの新たな拠点を建設していた。6ヶ月の突貫工事。総建設費は百億単位は行くであろう。その拠点も後僅かで完成する予定だ。

「ねえのぞみ。こんな巨大な拠点を建てて、誰がお金を出すの？」

ゆりがのぞみに尋ねた。

「心配ありませんよ。費用は全額かれんさんの家が負担してくれましたから。」

「よく取り付けたれたわね。」

「それも『元』仲間のなせる技ってやつね。」

「あははははは……。。。」

それから数カ月後、政府庁舎。

「ロプ~~~~~!!!!!!!!!!!!大変ロプ~~~~~!!!!!!!!!!  
!!!」

シロップが真っ青な顔をして庁舎に駆け込んできた。

「シロップ! 一体どうしたの!？」

「また新しい敵が現れたの!？」

「一体どこに現れたんですか!？」

ガヤガヤガミガミドヤドヤペチャクチャ……



5GOGOG組がメルポに向かってしゃべり始めた。

「いいから黙っていて！！ちゃんと最後まで見ましよう。」

なぎさが一喝して、黙らせる。

「ねえ皆、プリキュアの使命って何だろう。何の為に戦うんだろうね。それは世界を脅かす巨悪と戦い、世界に平和をもたらす事。それがプリキュアを含めた全てのヒーローに言える事だよ。」

のぞみに続いて、ラブが話し始める。

「でもちよっと待って。悪を倒したはいいけど、その後はどうなるの？脅威は取り除いたんだから、もうプリキュアは戦わなくても良いんだよね。なのにどうしてプリキュアは存在し続けるんだろう。」

更に祈里が続く。

「それは、まだまだ戦い足りないからじゃないかな。」

ゆりも、

「ヒーローがヒーローであり続ける為には、常に対となる敵が必要なのよ。敵という憎まれ役が存在し、それに立ち向かうことによつて、ヒーローの心は充実し、やがて生きがいとなり、同時に皆の夢と希望の象徴にもなるのよ。」

と言った。

「だから私たちは、ヒーローから、ヒー悪役ルになる！皆の敵となり、脅威となり、そして皆に、戦える喜びと生きる希望を与え続ける！戦い続けるからこそ、プリキュアはプリキュアであり続けられるんだ！！」

「これを見なさい！！！！」

画面が徐々に後ろに下がる。そこに映ったものとは。

「どうこの大要塞！素敵でしょ！！！！」

画面いっぱい広がる、鋼鉄に包まれた現代的な大要塞。その姿は禍々しさすら覚えるものだ。いつの間にかこんなものがパルミエに建てられていたとは。プリキュアたちは出る言葉が見つからない。

「これこそが私たちの新たな家であり、理想郷よ！！」キュートピア

「ヒーローが生きる喜びを得られる世界！」

「それを築き上げる事が、私たちの夢！！」

「プリキュアを含めたヒーローが、ヒーローであり続ける為に！！」

「私たちはここに！」

「U O P ” U t o p i a o f P r e c u r e s ” ! ! !」

「『プリキュアたちの理想郷』の完成を！」

『宣言するわ！！！！！！』

プツン

映像はここで終わった。

「何なのよこれ……………」

「プリキュアたちの理想郷 ( U t o p i a o f p r e c u r e )  
ですって……………! ?」

「ヒーローが生きる喜びを得られる世界……………! ?」

M H 組は衝撃を隠せなかった。

「おかしいよ、のぞみちゃん……………」

「ラブさん、祈里さん、ゆりさんも……。」

SS組はどこか失望したような表情をしていた。

「どうしてなのよ、のぞみ、あんたって奴は……。」

「のぞみさん、残念です……!」

「ラブさん、祈里さん、ゆりさん。やっぱり敵対するのね。」

「グループの予算が大分使われていて、おかしいと思ったら、こんな事に使われていたなんて……っ!!」

5GOG組はやり切れなささと怒りを滲み出していた。

「シロップ、よく伝えてくれたミル。ありがとうミル。」

「こんな事を伝えてお礼を言われても、あまり嬉しくないロプ……」

「シロップは仕事に戻っていいミル。後はミルクたちに任せるミル。」

「……わかったロプ。皆、気をつけるロプ!」

シロップはそう言うと、メルポを連れて次の配達先へと向かった。

「のぞみたちが裏切ったっていうのは本当なの!？」

駆け足の音と共に、突然部屋に誰かが入ってきた。スイート組の、響、奏、エレンの3人だった。

「響さん!奏さん!？」

「それに……誰？」

「あ……皆さんはじめまして、私、黒川エレンと申します。響と奏の仲間です。」

互いに紹介が終わった後、スイート組にどこで情報を聞いたのか質問する。

「私たちはこのパルミエ共和国で演奏旅行をしているの。ミルクからの依頼で、長い動乱で心身ともに疲れた国民に、音楽で安らぎと希望を与えて欲しいって。」

「そんな中、ある町で私たちが演奏をしてた時、遠くに何か巨大な建物が建っているのを見たの。あれは何って聞いても、わからないって皆言っのよ。」

「後になって、それは要塞だって事がわかったの。しかも建設しているのはかつて共に戦ったプリキュアたちだったって事もわかったわ。」

「私シヨックだよ。のぞみやラブたちがそんな事を実行するなんてさ……。」

「響……。」

響ものぞみたちの行動に、深い悲しみを覚える。

「かと言って、要塞に殴りこんで無闇に戦っても、彼女たちの思いつぼだと思っわ。そうする事で私たちは戦う快感を得てしまっんだから……。」

響に対し、エレンは冷静だった。

「じゃあ、私たち一体どうすればいいのよ……。このまま黙って見過ごしなさいって言うの……。」

なぎさがエレンに聞く。

「そういうわけじゃないけれど……。」

エレンも手の打ちようが無いようだ。

2度目のプリキュアの裏切り。その前にプリキュアたちは作戦も立てられず、途方に暮れていた。

第31回 理想郷（後書き）

メルポの顔がモニターになる。これは本作独自の設定です。

### 第32回 エレン偵察

カシャツカシャツカシャツ

無機質なカメラのシャッター音が誰もいない空間にこだまする。

「思っていたよりも強固に造られているわね。こりゃ攻略も難しそ  
う。」

ここはのぞみたちの本拠地である、UOP Utopia of  
precureの内部。ここに単身で潜入し、内部を撮影している  
者がいた。

「まったく、どこからこんな資材を手に入れたんだか……。」

キュアビートこと、黒川エレンだった。エレンは皆に黙って要塞の  
偵察をしていた。

コツコツコツコツ……

「見張り……？長居は無用ね。次の場所に行きましょう。」

エレンは静か且つ速やかに立ち去り、次の撮影ポイントに向かう。

「……？この扉は。」

それは要塞には余りに似つかないしゃれた扉だった。中からは明かりがかすかに見えた。何やら話し声も聞こえる。

「……ゆりさん……の方はどうなっているの……」  
「……？」

「この声はのぞみ？ゆりもいるのかしら……？」

エレンは装備品からICレコーダーを取り出し、録音を開始する。

しばらく後、会話がやんだ。レコーダーを止め、エレンは立ち去る。

敵に悟られぬように進み、エレンがたどり着いた場所。どうやら格納庫のようだ。そこには。

「……これは……一体……！？」

人・・・いや人と呼ぶにはあまりにも巨大。尚且つ無機質な体躯と無表情の顔。そしてその手に持つ、鉄砲・・・?のような物体。エレンは素早くカメラにその物体をおさめた。

「そこに誰がいるの・・・?」

しまった！誰かが入っていたようだ。エレンは隠れられそうな場所に身を潜め、その場を立ち去ってくれるまでじっとする。

カツカツカツカツ

足音が徐々に近づいてくる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！！！！！！！」

カツカツカツカツカツカツ・・・

だんだんと足音が遠のく。どうやらやり過ごせたようだ。

「これ以上は危険ね。脱出しよう。」

エレンはまさに脱兎の如く走り、要塞の脱出に成功した。

翌日、政府庁舎でエレンは皆に囲まれ、地べたに座らされ、ミルクからありがた〜いお説教を食らっていた。

「エレンは一体どこに行っていたミルク！！昨日の夜から姿が見えなかったから、皆で手分けして一生懸命探していたミルク！！」

「むう・・・人がせっかく有力情報を手に入れたってのに、その扱いはひどいよミルク。」

「ひどいわけないでしょ！！本当に皆心配してたんだからね！！！」

「か・・・奏までえ・・・。」

「待つてよ奏、今エレンは有力情報を手に入れたって言ってたよね。」

「それがどうしたのよ響。」

「エレン、昨日どこに行っていたの？」

響がエレンに、どこに行っていたか聞いた。

「実は昨日皆には内緒で、のぞみたちの籠る要塞に偵察に行っていたの。」

「偵察？」

「苦労したわ。見張りも厳重だし、至る所に監視カメラが設置され

ていたの。この写真を見れば判るはずよ。」

エレンは自信が撮影した数十枚の写真を皆に見せる。皆も写真に注目する。

「こ……これは……………」

写真に写っていたのは、重装備の衛兵、監視カメラ、侵入者を感知する赤外線センサー、ガスの噴出装置？のような物体、その他多くの仕掛けが撮影されていた。

「すごい……………こんなに嚴重だなんて。」

「よく撮影できたわね。」

「ねえ響、奏、私偉い？」

『ぼちぼち……………』

「ガクツ……………」

するとミルクが一枚の写真に注目する。

「エレン、これは一体何ミル……………」

それは格納庫のような広い空間で撮影された。人型……………のような物体を撮影した写真だ。

「それが私にもわからないの。これが何なのか……。」

「そうミル……。」

「とにもかくにも、これらは最重要の物証ね。今まで秘密に包まれていた要塞の内部がこうして暴かれたんだから。」

「後、このICレコーダーも聞いて欲しいの。どうやらのもみたちの会話らしいのよ。」

「のぞみたちの!?!?!今すぐ再生できる!?!?」

「え、ええ。じゃあ再生するね。」

エレンはレコーダーの再生ボタンを押す。

「……りさん……よいよ……すると……ですね……」

「……れさえ……ば……したちの……ばが……  
えるわ……」

「……ユアが……である……にわた……」

ちは戦い続けなければ……ない……」

「……んげんは……なそん……だから……  
たちが……必要なよね……」

「……べては……意義の為に……」

カチン

音声はそこで途切れた。

「あまり音質は良くないね。」

「でも所々聞こえる箇所はあったわ。戦い続けなければとか、意義の為にとか。」

「のぞみたちは本気ね。本気でこの世界、いや、全世界に理想郷を作り出すつもりね。」

「『戦士の』理想郷をね……」

「だけど、そんな理想郷は一般人を苦しめるもの……」

「普通の人たちにとっては、とんだ迷惑でしかないナリ。」

「のぞみたちの言い分も判るわ。判るけれど……今はまだ時期が早過ぎる。」

「今はまだその理想郷を完成させてはいけない。まだ完成させちゃ

」

「今出来る事は、彼女たちの行動を止める事だけ。」

皆の意見は一致していた。今は理想郷を完成させない。今一度皆の可能性に賭ける事。それが意見だった。

### 第33回　のぞみの夢

要塞内格納庫。エレンが撮影した謎の物体の前に、一人のぞみが立って見上げていた。

「これが完成すれば、始まるんだね。新しい世が……。」

人型の物体。完成すれば新しい世が来るとは、一体どういふことなのだろうか……？

「……ん？」

のぞみは誰かが入ってくるのを感じた。

「こんな所にいたのね、のぞみ。」

「なあ〜んだ、ゆりさんか。入ってくるなら一声掛けてくださいよ。」

「ごめんなさい、驚かせてしまったかしら？」

「そりゃあ無言で入ってきたら誰だって驚きます。」

ゆりはのぞみの隣に立った。

「のぞみ、もうすぐ完成するのね。」

「私たちの夢の結晶です。」

「『悪夢の』、でもあるかしら?」

「見方によってはそうでしょうね。」

「ねえゆりさん。」

「何かしら?」

「この世界は、どこか狂ってますよ。パルミエも、私たちの世界も。」

「狂ってる・・・?」

「私たちがいくら平和の為に頑張って戦ったとはいえ、皆はそ知らぬ顔をして、感謝の言葉の一言もかけず、のうのうと生きてるんですよ。そんなのを見てみると、私たちは一体何の為に戦ったのか、こんな奴らを守りたいが為に戦ったのか。考えるだけで馬鹿馬鹿しくなるんですよ。」

「あなたの言いたい事は良くわかるわ。私たちが頑張っても、相手がわかってくれなければ、失望するのも無理ないわ。」

ゆりはポケットから缶コーヒーを取り出し、のぞみに渡す。2人でコーヒーを飲みつつ、話は続く。

「ゆりさん、私ようやく見つけたんです。自分の夢を、自分が一番やりたいことを。」

「自分の夢？」

「それは……世界の脅威となる事です。」

「世界の脅威……？」

「プリキュアが夢と希望の象徴としてあり続ける為には、それに相応する脅威が必要です。プリキュアは脅威無しには存在する価値はありません。」

「それじゃあ、私たちがその脅威となるわけね。」

「そういう事です。そしてこの兵器が何よりの脅威となります。そのぞみが物体に目を見やる。」

「皆もバカですよ。あからさまな悪にはすぐに食いついて戦うんですから。人間を完全に善だと信じ込んでいますから。」

「素直……と言えばそれまでよね。」

「そんな皆の目を覚ます為にも、私たちは行動しなければいけません。愚かだ、狂ってる、倒すべき悪だと言われても構いません。そ

の時は、『じゃああなたは100%正義なのか?』と言います。」

「もう後には引けないわね。」

「そうです。後は夢に向かって突っ走るだけです。」

しばらくしてゆりが立ち去ると、1人残されたのぞみは。

「プリキュアの皆お願い、全力で私たちと戦って。そして……。」

「私たちの夢の成就の為に、死んで。」

### 第34回 首相告示

要塞格納庫内でのぞみとゆりが会話していたちようどその頃、庁舎内では。

「くそおっ!! 一体どうすりゃいいのよ!! こうしている間にも、のぞみたちは着実に力を付け続けているってのに。」

「落ち着くのよりん! 冷静になって、今出来ることを考えるのよ。」  
声を荒げるりんに対し、なぎさが落ち着かせようとする。

「なぎささん! あんたは悔しくないの!? 現にのぞみやラブたちは私たちが裏切ったのよ! そしてあんな巨大な要塞を建設して、どんどん図に乗って……!!!」

「悔しくないわけ……ないでしょう……。」  
なぎさは下を向き、絞るような声で言う。

「……すみません、こんな事言ってしまった。」  
りんも熱が下がったように謝る。

「なぎささん、りんさん、こっちに来てください。少しばかり話をしたいので。」

エレンが2人を呼ぶ。他のプリキュアたちは、エレンが得た情報を元に、要塞攻略の準備を進めていた。

「外から見た様子では、要塞の守りはかなり強固です。広範囲のサ―チライトや周りを囲む高電圧網、見張りの兵、猫が出入りする隙もありません。」

「エレン、あんたも猫だったでしょうが。」  
響が軽くつつこむ。

「ですが、1箇所だけ見張りが甘い所がありました。それがこの水路です。」

エレンは水路の写真を見せる。話によれば要塞内には水路が通っており、それを外に排出しているらしい。

「流れはどうだったの？」  
なぎさが質問する。

「それほど急な流れではありませんでした。ただし、かなりの深さでしたが。」

「長さは？」

「およそ150m〜200m位かと。」

「結構長いわね。エレンはよく息がもったわね。」

「ええ、少々空間がありましたから、息継ぎは何とかできました。」

「じゃあ侵入ルートはここで確定でいいかしら？」

「それでいいと思います。」

「ちょっと待つて。いきなりこんな大人数で乗り込むのは無謀だわ。まずは何人かを先に潜入させて、それから残りのメンバーで突入させるべきよ。」

「私もほのかさんに賛成よ。全員で突入して全滅したらどうにもならないわ。」

ほのかとかれんが慎重にしようと言う。

「うーん、どうしたものだろう……。」

その時。

コンコン

ドアをノックする音がした。

「お邪魔するミル。」

「ミルく、どうしたの？」

「ついさっき、要塞攻略についての閣議が終わったミル。結果は攻略賛成が多くを占めたミル。」

「それじゃあ、遂に始まるんだね。のぞみたちとの戦いが……。」

「そう言う事ミル。」

ゴクリ……。

皆の顔が緊張したように強張る。そしてミルクは。

「今から名前を呼ばれた者は、ミルクの前に整列するミル。」  
名前を読み上げる。

「九条ひかり！」

「は……はいっ！」

「夏木りん！」

「はい！」

「秋元こまち！」

「はいっ！」

「黒川エレン！」

「は・・・はいっ！」

「以上4名は整列するミル。」

ひかり、りん、こまち、エレンの4人はミルクの前に整列する。

「代表として、エレン、前に。」

エレンは1歩前に出た。ミルクがエレンの前に立ち、1通の文書を読み上げる。

「パルミエ共和国首相告示。ひとつ、夢原のぞみ、桃園ラブ、山吹祈里、月影ゆりの4名を、パルミエ共和国への『反乱分子』とみなす。」

「ひとつ、先の4名を、パルミエ共和国を脅かす反乱分子として、速やかに鎮圧せしめたり。」

「ひとつ、九条ひかり、夏木りん、秋元こまち、黒川エレン。以上4名を先遣隊に任命し、2日後\*\*日の03:00時に要塞に潜入させ、内部工作を行わせるものとす。」

「ひとつ、他のプリキュアたちは要塞近郊の森に待機。先遣隊が工作を成功させた後、無線で知らせ、しかる後に総攻撃を行うものとす。」

「\*\*\*\*年 ×月 日 パルミエ共和国首相 ミルク」

ミルクは読み終わると、文書をエレンに渡す。

「皆、よろしく頼むミルク!!」

「わかりました。先遣隊の務め、見事果たして見せます!」

エレンたちは決意を新たにした。

その日の夜、皆が眠る大部屋。

「うう〜ん、エレンさん?」

「こまちさん、起きていたんですね。」

「エレンさん、私たち大丈夫でしょうか?」

「大丈夫ですよ。皆で力を合わせれば、務まるはずです。・・・」

そう言えば、のぞみさんはこまちさんやりんさんの友達ですよね。  
こまちさんはどう思ってるんですか？」

「……………」

「やっぱり辛いですよね。」

「……………いいんです。」

「こまちさん？」

「今やのぞみさんたちは、パルミエの敵になってしまいました。哀しいですけど、のぞみさんたちを止められるのは私たちしかいません。」

「こまちさん……………」

「もう後には退けません。もう後には退けないんです。」

こまちは自分に言い聞かせるように何度もつぶやく。

「エレンさん。」

「はい？」

「お互い、皆で生き残りましょうね。」

「……………はい。」

「さあ、もう夜も遅いですし、眠りましょう。」

そう言つと、こまちとエレンは再び眠りに入った。

運命の日は刻々と近づく。

### 第35回 潜入

首相ミルクの告示が下された2日後の、現地時間AM3:00。先遣隊に任命された、シャイニールミナス、キュアルージュ、キュアミント、キュアビートの4名が、水路に身を潜め、突入を待っていた。

「ううううう……」

「一応水の冷たさに対応した装備はしてるもの……」

「さ、さすがに……冷たいですね……」

「く、くしゃみ出そう……」

「駄目よビート！くしゃみなんかしたら、すぐに気づかれるのよ！」

「もう……指示はまだ来ないのかしら？こっちはいつでもOKなのに。」

ブルルルルルル

その時、無線機が震えた。音で敵に気づかれぬよう、無線が来たときは、震えるようになっている。4人は無線に出る。

「こちらルミナス（ルージュ）（ミント）（ビート）です。」

「こちらホワイトよ。皆水路にいるわね？」

「皆準備万端です。いつでも突入できます。」

「もう一度確認しておくわ。あなたたちの仕事は、あくまでも内部工作よ。自ら積極的に敵を攻撃しちや駄目よ。万が一見つかったも、あくまでも戦いは最低限に。隠密に、速やかに行動して、格納庫を目指して。そして例の物体の破壊をするのよ。タイムリミットは8時間。それまでに何としても成功させて。」

『了解。』

無線を切り、4人は水路を要塞内へと進む。結構水深が深いようだ。足が届かない。

「ビートの言った通りね。こりゃ長いわ。」

「息継ぎがやっとです。」

「皆頑張つて。後少して抜けられるはずよ。」

水路を抜け、行き着いた場所は倉庫だった。コンテナやら木箱やらが整然と置かれている。

「よし、ここから上陸ね。」

「待ってルージュー！見張りがあるわ。」

ミントの目線の先には武装した兵士が見回っていた。兵士はしばらく倉庫内の異常を調べていた。声を押し殺し、やり過ごす。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

異状が無いと確認すると、兵士は倉庫の外に出て行った。

「ふうふう・・・緊張したわ。」

「まだ突入したばかりですからね。気を引き締めましょう。」

倉庫を突破し、長い廊下を進む4人。

「おっと監視カメラだわ。」

「ここにも見張りがあります。」

「危ない危ない。」

「結構長い廊下ですね。」

しばらくすると4人は、広間にたどり着く。しかしやけに不自然だ。どうして廊下の途中に広間が・・・？

「ミント、どう思います・・・？」

「どう考えても不自然よ。周りを見ても部屋の扉は無いし、どうしてここだけ広いのかしら？」

「う〜〜ん。」

「ビート、何かわかるの？」

「何か感じるの。何かか遮っているのを・・・。」

「遮っている？何がよ。」

「わかりません。でも感じるんです。」

ブルルルルルル

無線だ。

「皆気をつけて。そこにあるのは赤外線センサーよ。触れると周りが閉鎖されて、毒ガスが噴出すわ。スイッチを切らない限り、そこを突破するのは不可能よ。向かって右奥にあるのがスイッチよ。それを押して解除しなさい。それじゃあね。」

それは、4人には聞きなれない声だった。

「ちょっと待って。あなた誰なの？どこから無線をかけているの？」

ルージュが、無線の相手は誰か問いただす。

「『遡行者』・・・と名乗っておくわ。所在地は教えられないけれど。」

「どうして私たちにスイッチを教えてくださいるんですか？」

ルミナスが続いて聞いた。

「あなたたちにはまだ死んで欲しくないから。それだけよ。」

「あなた誰なの!？」

.....

既に無線は切られていた。

「ブート、どつする。」

「どつすると言われても.....。」

「今は『遡行者』の言葉を信じましょう。あれがスイッチですね。」

ルミナスは言葉を信じている。

「私も信じるわ。ここを突破しない事には先には進めないもの。」

「私もルミナスの意見に賛成です。」

ミントとビートも賛同する。

「わかった。皆離れてて。私が押すから。」

「どうやって押すつもりですか？」

「いいから見てください。」

ルージユが技を繰り出す体制に入る。

「プリキュア・ファイアーストライク……。」

いつもならサッカーボール大の火球を蹴るのだが、今回はゴルフボール大の球をスイッチに向かって蹴った。

カチッ、プシュー……。

見事スイッチに命中。音が鳴って気配が消えた。どうやら解除に成功したようだ。

「気配が消えました。」

「さすがルージユね。見事なコントロールだね。」

「さあ、急ぎましょう。」

2分ほど走っただろうか。目の前に扉が現れる。鍵はかかっていないようだ。

4人が扉を抜けると、中庭らしき場所に出た。学校のグラウンド位の広さだろうか。

「ここは、中庭・・・でしょうか？」

「要塞に中庭なんているのかしら？」

「兵士も生き物ですから。中庭に出てリフレッシュしたいんじゃないの？」

「そうなのですか？」

「ようこそ要塞へ。お客さんとは珍しいわね。だけどここまでよー！」

突然どこからか声がした。聞き覚えのある声だ。

「この声は・・・。」

「もしかして・・・。」

「皆さん！あそこですー！！」

ルミナスの先にいたのは。

「祈里さん……。。。」

「祈里……！！」

UOPの構成者になった祈里だった。祈里はルミナスたちに近づきながら。

「Change precure！！ Beat up！！！！！！」

キュアパインへと変身する。

「イエローハートは祈りの印！とれたてフレッシュ、キュアパイン  
！！！！！！」

そしてルミナスたちの前に立ちふさがった。

「これ以上は進ませないわ。皆ここで大人しく倒されなさい……！」

### 第36回 祈れる魂

要塞に潜入したシャイニールミナスら先遣隊。数々の仕掛けを上手くかわし、一行は中庭らしき場所に出る。しかし、そこに待ち構えていたのは、キュアパインこと、山吹祈里だった……。

「そこをどきなさいパイン！」

ビートがパインに説得する。

「嫌だつて言ったら……？」

「……力づくでも通させてもらおう……！」

「ふん！結局は力づくなのね。ま、あなたたちらしいと言えば、あなたたちらしいけど。」

パインが嘲笑うように言う。

「パイン、あんた変わったね。」

今度はルージユが呆れたようにつぶやく。

「人間なんてそんなものよ。無垢な人間ほど残酷になりやすいのよ。世の中は汚れに満ち溢れている。そんな中で無垢なものは淘汰され



間を置かず今度はビートの体当たりが襲つ。

ビシイッツ！！！

「あああつつ！！」

体当たりの衝撃でパインが吹っ飛ぶ。

「お願いですパイン、もう気は済みましたでしょう。そこを通して下さい。」

ルミナスがパインを説得しようとする。しかし……。

「……嫌よ！」

「どうしてですか!？」

「私にもね、私の夢があるのよ！それは……。」

「人間の抹殺よ。」

「抹殺・・・!!??」

ルミナスたちは言葉を失う。

「私の家の動物病院にはね、毎日多くの動物たちが運ばれてくる。その中には人間に捨てられた動物たちも多く含まれているわ。あの子たちも毎日一生懸命生きているってのに・・・、人間たちは己の勝手な都合で平気で捨てたり、虐待したりするわ。私は許せないの、そんな人間たちが。」

「それで、元凶である人間を抹殺しようとする・・・。」

「そうよ。人間さえいなくなれば、あの子たちも人間に虐げられることなく、のびのびと生きていけるのに・・・。」

パインは続けて、

「だから、そんな人間を守ろうとするあなたたちを許すわけにはいかない。だから、ここで倒されなさい。」

そしてまた戦いが始まる。

「プリキュア・ヒーリングフレアー!!!」

パインが光線を放つ。そしてそれはミントに直撃した。

「あぁっ!!!」

ミントはその場に倒れる。

「こんなにボロボロになってまで、人間を守りたいの？」

『とりやあああああああ！！！！！』

ルージュとビートのダブルパンチがパイんに炸裂する。

「パイン！あなたの言い分も判るわ。確かに人間は自分の勝手な都合で動物たちを虐げてきた。報いを受けるのは当然だと思っわ。」

ルージュが言うとビートも。

「でも、私たちは今一度信じるわ！人間はそこまで鬼畜ではないって事を！！」

そしてビートが技を繰り出す。

「弾き鳴らせ、愛の魂！」

自分の武器、ラブギターロッドを装備する。

「おいで、ソリー……！」

どこからともなくソリーが現れ、ロッドに装着し、

「チェンジ、ソウルロッド!!」

ソウルロッドに変形させた。

負けじとパインも。

「癒せ、祈りのハーモニー! キュアスティック、パインフルート!

」!

パインフルートを装備する。

「悪いの悪いの飛んでいけ! プリキュア・ヒーリングフレアー...

」.

すかさずビートも。

「プリキュア・ハートフルビート.....」

『フレイーッッシュ(ロック)!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

2つの異なる光弾が同時に発射され、撃ち合いとなった。

「ぐうううううう.....」

「んんんんん.....」

互いに踏ん張るビートとパイン。

「諦めなさいパイン！もう勝負は決まっているわ。」

「そんな事勝手に決めないで！勝つのは、勝つのは……私なんだから……！！！」

その時だった。

ヒュンッ！！

どこからか1本の光る矢が飛んできた。そしてそれは……。

ズブリッ！！！！

パインの背中を貫通し、胸にまで達した。

「！？！？！？！？！？」

互いのエネルギーが消え、ビートはその場に何とか立ったが、パインは崩れ落ちるようにその場に倒れた。そして変身が解け、元の祈りの姿に戻っていた。

「ああ……あああああ……」

ビートたちは混乱していた。そして皆一目散に祈里の下に集まる。

「祈里さん……ねえ祈里さん……」

ミントがいくら声をかけても微動だにしない。

「う……嘘よね、こんなの嘘よ。祈里はただ疲れて眠っているだけなのよ。そうでしょうルミナス……」

ルージユが声を震わせてルミナスに言う。

「私にもわかりません。心臓の鼓動はあるのですが……」

「傷も負っていないわ。祈里はどうなってしまったの……?」

ブルルルル

無線だ。

「パインは倒れたわ。あなたたちは先を急ぎなさい。のぞみの夢を阻止する為に。」

「その声は、さっきの『迦行者』ね。教えて、あなたは一体誰なの

！？祈里はどうなったの！！」

ルージユが必死に声をかけても。

「いずれわかるわ。」

それだけ答えて無線を切られてしまった。

「一体何なのよもう……。」

「とにかくここは『遊行者』の言葉を信じましょう。今の私たちに  
はそれしか道は無いんですから。」

ルミナスが先に進むしかないと言った。

「そうね、今はのぞみの夢の阻止が第一よ。」

ビートも同調する。

後味の悪さに押されつつも、先遣隊は中庭を突破し、要塞の奥深く  
へと向かう。あらゆる謎を秘めたまま……。

### 第37回 悪意

中庭でキュアパインを退け、第1関門を突破した先遣隊。しかし、彼女たちの心の中には、得体の知れないもやもや感だけが残っていた。パインを射た矢と、『逆行者』と名乗る謎の人物……。

ブルルルル

確認をとるべく、ホワイトたちに連絡する。

「ホワイト、さっきから『逆行者』と名乗る人物から無線が入ってくるのですが……。」

ミントがホワイトに報告する。

「こちらでも傍受していたわ。一体誰なのかしら。この周波数は関係者以外極秘なのに……。」

「そうですか………ミルクさんに替われますか？」

今度はミルクが無線に出る。

「ミルクさん、『逆行者』について、心当たりは？」

「逆行者？一体誰ミル？」

「判らないんですが、さっきから何回も無線にかかってくるんです。」

「

「う~~~~~ん」

ミルクはしばらく考えていたが。

「ミルクには心当たりは無いミル。」

「そう……ですか。」

「あっ、そう言えば。」

「どづしたのミルクさん？」

「30分くらい前に、のぞみからミルクたちに連絡があったミル。」

「え、のぞみさんから!？」

30分前と言えば、先遣隊が中庭に向かっていた時だ。

「『あんたたち、いい加減にしないと、アレを起動させるからね……』って。」

「アレ……?!アレって何ですか。」

「知らないミル。無線では『アレ』しか言っていなかったミル。」

しばらくして無線を切る。

「『アレ』って一体何なんでしょうか？」

「私に聞かないでよ！私だって初耳なんだから。」

ルミナスがルージユに聞いても、ルージユは知るはずが無い。

「ひょっとしたら……。」

「ビート？」

「私が以前偵察した時に撮った写真に、何やら人型の物体が写っていましたよね。」

「それがどうしたの？」

「もしかしたら起動するってそれを……。」

「動かすって言うの？」

「もし動いたらどうなるんですか？」

「さあ、のぞみさんに直接聞くほか無いわね。」

……

有力な情報はほとんど得られず、かえって謎が深まるばかりだった。

「とにかく今は先を急ぐしかないわね。」

「こんな所でうじうじしていてもどうにもなりません。ビートの言う通り、今はのぞみさんたちを止める事が第一です。」

「そうすれば、『アレ』の謎も解けるかしら？」

「判りません。でも今は先に進むだけしか私たちにはできませんか」  
「。5。」

「皆、急ぎましようー！」

その頃のぞみサイドは。

「何ですって！？祈里ちゃんが……。」

見回りの兵士から祈里が何者かに倒されたと聞いたのぞみは、驚きを隠せなかった。

「……………!!!!!!」

ラブが下を向き、ブルブルと拳を震わせていた。

「そう、死んではないのね。わかったわ、見回りに戻って。」

見回りが配置に戻っていくと、ラブがのぞみに言う。

「のぞみちゃん、今度は私が行くよ。」

「ラブちゃん？」

「仲間を、ましてやブツキーを傷つけたあいつらを放っておけないの！」

「わかった。でも気をつけてね。」

「プリキュア同士が争いあっている。」

「伝説の戦士がこうもな……。」

「だが、それももうすぐ終わりですな。」

「今の所はな。だが万が一の為に、準備は怠らぬよう。」

「これ以上の拡大はこっちも御免被りますからな。」

「不安の芽は早いうちに摘み取らねば。」

第38回 野望開花

祈里を傷つけた先遣隊たちに逆襲する為、今度はラブが迎え撃つと言った。のぞみは了承し、ラブを向かわせた。

後にはのぞみとゆりが残った。

「先遣隊と違って見くびっていたけれど、やっぱりやるわねあいつら。ただ……。」

「『逆行者』ね。」

ゆりがその名をつぶやくと、のぞみは歯を食いしばり、拳をわなわなと震わせた。

「ゆりさん、今はその名を言わないで頂戴。聞いただけでも虫唾が走るの。」

「ごめんなさい。悪気は無かったのよ。」

ゆりは続けて、

「それにしても、ラブ、大丈夫かしら？興奮しているせいかしら、少し焦っているように見えたけど。」

「それ位が丁度いいんです。プリキュアの真の存在意義は戦う事にありますからね。いい運動にはなりますよ。」

.....

しばらくの沈黙、するとゆりが部屋を出ようとする。

「ゆりさん？どちらへ？」

「少し仮眠をとるわ。今のうちに休息をとって、後々の事に備えなきゃね。」

「わかりました。」

そう言うと、ゆりは仮眠室に入った。

「さて、私も・・・。」

しかしのぞみは、ゆりの入った仮眠室とは逆の方へ向かう。

コソコソコソコソ...

「あ、のぞみ様！」

「見回りご苦労様。引き継いだらちゃんと休息をとるのよ。」

「はい、心遣い感謝します。」

見張りと軽い会話をしつつ、のぞみは向かう。

たどり着いたのは格納庫だった。のぞみはあの謎の物体の前に立ち、語りかける様につぶやく。

「もし、本格的な攻撃が始まったら、あなたの力を借りる事になるわね。あいつらとやり合う事になると思う。その時はよろしくね。」

物体は何の反応も示さない。

「それに私たちには切り札があるのよ。とっておきの切り札がね・・・」

のぞみの言う切り札。その正体やいかに・・・。

「さて、私も準備しなきゃね。」

「プリキュア・メタモルフォーゼー!!」

のぞみは誰もいない格納庫で、プリキュアへと変身する。

「大いなる希望の力、キュアドリーム!!」

「・・・でも、今の私ではあいつらに勝つ事は出来ない。ましてや目的を達成する事も出来ない。私にはこれ以上の力が必要なのよ。」

ドリームはそう言うと、どういいうわけか再び変身の体制へと入る。

「プリキュア・メタモルフォーゼ!!!!!!」

ドリームの体に再び変化が起こる。

ドリームの体が光り、それまで纏っていたドリームのコスチュームが次第に黒く変色していく。胸の蝶の飾りはクロアゲハのように黒くなり、髪の色も鮮やかなピンク色から、濃い紫色へと変色していく。髪飾りの薔薇も黒薔薇へと変わった。顔つきも、何となく険しくなったような気がした。

変身を終え、名乗りをあげる。

「大いなる野望の力！キュアアンビション!!!!!!」

キュアドリームからさらに変身を遂げた新たなるプリキュア。彼女

の名はキュアアンビション。『野望』の名を持つプリキュア。その姿は、かつてのダークドリームを髣髴とさせるものだった。

「キュアアンビションか……。自分で言うと、何だか照れくさいな。」

新たな力を得ても、のぞみはのぞみだった。彼女は少し照れていた。

そんなアンビションの姿を誰かが見つめていた。

「キュアアンビション。厄介な事になるわね。今の彼女たちでは不安だらけだわ。この私がやるしかないのかしら……。。」

ブルルルルル

要塞を進む先遣隊に無線が入った。

「その先を進むと右手に部屋があるわ。そこに入りなさい。」

「その声は『遊行者』ね！いい加減教えて！あなたは一体何者なの！！何が目的なの！！??？」

ルージユが切れたように無線機に向かって叫ぶ。

「今のあなたたちではのぞみを止める事は出来ない。一度あなたた

ちを見極めておきたいのよ。だから、部屋に入りなさい。私はそこで待っているから。」

無線はそこで切れた。

先遣隊がしばらく進むと、『遡行者』の言葉通り、右手に部屋があった。中は薄暗くてよくわからなかった。

「ここね。『遡行者』がいるって部屋は。」

「とうとう正体がわかるのね。」

ルージユとビートは緊張して唾を飲み込んだ。

「でも、薄暗くてわかりませんね。」

「ルミナス、ここは全員で、1 2の3で踏み込みましょう。」

ミントの提案で、一斉に突入する事にした。

「じゃあ、行くわよ。」

4人は無言で頷く。

「1・・・2の・・・」

『3!!!!!!!!!!!!!!』

先遣隊は一斉に部屋に突入した。

「約束通り来たわよ『遡行者』!!姿を現しなさい!!」

ルージュが出てくるように言う。

「あなたの目的は何なの!!出て来なければわからないわ!!!!」

続けてビートも叫ぶ。

その時だった。

「ルージュ!!伏せて!!!!!!!!!!」

ルミナスがとつさに叫んだ。

「!?!?!?」

言葉通りルージュは伏せた。その頭上を何かがかすった。

「な・・・何だったの・・・?」

ルージュは頭上をかすめたものを拾った。

「……………これは、銃弾!?!?!」

拾ったのは銃弾だった。一体誰が?

「さすが伝説の戦士プリキュアね。その反射神経、まずは誉めておくわ。」

暗闇の中から、1人の少女が現れた。身長はルージユと同じ位だろうか。ロングの漆黒の髪をなびかせながら現れた少女。

「あなたが『遡行者』なんですね……………」

ルミナスが確認をとる。

「ええ、いかにも。私が『遡行者』よ。けれどそれはあなたたちを……騙す為って言い方は悪いけれど、仮の名前よ。」

「では本当の名前は……………」

ビートが『遡行者』に聞いた。彼女はすぐに答えた。

「私の名前は………ほむら。」

「………曉美ほむらよ。」

「あけみ………ほむら………!?!?!?」

先遣隊はただただ驚くばかりだった。

### 第39回 魔法少女

遂にその正体を現した、『迦行者』こと暁美ほむら。彼女はとうして先遣隊に関わろうとするのだろうか・・・？

「ほむらさん・・・でしたね。一体あなたの目的は何なのですか？そしてあなたは何者なのですか？」

ルミナスがほむらに質問する。ほむらはすぐに答えてくれた。

「私の目的はこの要塞の主、夢原のぞみを止める事よ。その辺りはあなたたちと同じね。そして私は、契約によって『誕生』した、『魔法少女』よ。」

「契約によって誕生・・・！？」

「魔法・・・少女・・・！？」

ほむらが何を言っているのかルージユとビートにはわからなかった。

「でも、魔法少女と言われても、あなたは私たちがイメージする魔法少女とはかなり違うみたいね。」

ミントがほむらの姿形を見て言った。

「詳しい事は、話すと長くなるから今は言わないでおくわ。・・・それにしても、夢原のぞみ、かなりむちゃくちゃな事をしでかした

わね。『プリキュアの理想郷』だなんて……。」

「それよりほむら、私たちをこの部屋に導いた理由を聞きたいわ。」  
ルージュがそう言った。

「さつきも言ったはずだけど、今のあなたたちの力ではのぞみはおろか、要塞だって落とす事も不可能だわ。ここで私が訓練してあげようと思っているのだけれど……どうかしら？」

「訓練？」

「私と勝負しなさい。私と戦って勝ったならば、あなたたちは要塞を落とせる力と技量と心を備えているって認めるわ。もし負けたならば、あなたたちは一生要塞を落とせないでしょうね。」

「そんな……。」

「さあ早く決めなさい。」

ほむらが催促する。

「わかったわ。訓練を受けるわ。」

「ビート!?!」

「確かに今の私たちは力不足よ。さっきパインと戦った時、4人で力を合わせても苦戦した。ほむらのあの矢がパインを射抜かなかつたら、私たちはきつと負けていたでしょうね。」

「ビート……。」

「私は是非あなたの訓練を受けたい。そしてのぞみに対抗できるほどの力を手に入りたい!そうでしょ皆?」

ビートが他の3人に問う。

「……ビートの言う通りね。今の私たちじゃのぞみは止められない。」

「ルージュ……。」

「外には、なぎささんたちが待機しているけれど、私はなぎささんたちの力を借りないように、力を持ちたいです。」

「ルミナス……。」

「パルミエは日に日に荒廃しつつあるわ。私はこの地を再び安らぎと緑の溢れた大地にしたい。その為には何でもやるわ。」

「ミント……。」

「どうやら皆の意見は一致したみたいね。私の訓練は本気で怪我を

するわよ。それでもいいのね?」

「もちろんです!ほむらさん、私たち一同、よろしくお願いいたします!!--!--!」

そして訓練は始まった。ルールは4対1の攻防戦だ。

「タアアアアアア!!--!--!--!」

ルージュとミントとビートの3人の息の揃ったキックがほむらに襲い掛かる。

「.....」

しかしほむらは突然姿を消した。

「消えた!?!」

「どこなの!?!」

「今度はこっちの番よ。」

ほむらはプリキュアたちの後ろに現れ、拳銃を取り出すと、勢い良くプリキュアたちに向けて銃弾を放つ。

「おっと!!--!--!」

「あぁっ！！」

ミントとビートはかわしたが、ルージユの腕に銃弾がかすった。

「卑怯よほむら！！あんただけ拳銃を使うだなんて！！！」

「ごめんなさい。けれど……これが私の戦い方なの！！！」

ほむらは刹那にマシンガンをぶっ放し、更に手榴弾を2、3個投擲する。

ガガガガガガガ

ズドンズドン！！！！！！

「うわあああああ！！！！！！！」

プリキュアたちにマシンガンの雨が降り、手榴弾の爆発による爆風が彼女たちを吹っ飛ばした。

「つ……強い。」

「そして、動きも速い……。」

「あれは瞬間移動……？！」

「どじしたの？もうやめにする？」

ほむらはやめようかと勧告した。

「ほむらさん……私たちはギブアップなんて一言も言っていないわ……。」

「あなたに勝って、のぞみたちを止める力が欲しい……。」

「このパルミエに再び安息の日を来させる為にも……。」

『この苦しい試練の峠を、私たちは絶対に越えてみせる！……！！』

「こんな所にいたんだね！さっきから何か騒がしいと思っいたら。」

「その声はラブさんね！どこのの……！」

「……」

「ほむらさん！後……！」

「……！！……！！」

ほむらの後にラブが立っていた。危険を察したほむらはとっさによけた。

「よくも……よくもパインを、大切な友達のブッキーを傷つけてくれたわね……この落とし前、あんたたちの命で償ってもらわ……！！」

『Change precure!! Beat up……!!』

「……！！」

ラブはキュアピーチへと変身を遂げる。

「ピンクのハートは愛ある印！もぎたてフレッシュ、キュアピーチ……！！」

「さあ皆、思いっきり戦おう！プリキュアがプリキュアである為に……戦士である為に……！！」

「……邪魔が入ったわね。」

「ほむらさん？」

「訓練は後回しよ。まずはこいつを片しましょう。……そんなに傷を負って、戦える？」

「大丈夫よ。これくらい屁でもないわ。」

「こんなの怪我のうちに入りません。」

「行きましょう、ほむらさん。皆で力を合わせて!!」

「力を合わせて……。……か。何だか小恥ずかしいわね。」

ほむらは少し照れる。

「何べちゃくちやお喋りしているの!? そっちから来ないんだっから、こっちから行くわ!!」

痺れを切らしたビーチがほむらたちに襲い掛かった。

「デエエヤアアアアアアア!!!!!!!!!!」

## 第40回 愛憎

ピーチと先遣隊が戦っている頃、要塞外では他のプリキュアたちが今か今かと突入を待っている。

「ミルク、パルミエの妖精たちは皆無事なの？」

ブラックがミルクに聞いた。この緊急事態の中、市民たちはどうしているのだろうか？

「心配要らないミル。市民たちは政府庁舎に皆避難させているミル。万が一の時でもあそこなら大丈夫ミル。ナッツ様もいるから皆の心の支えになっているはずミル。」

「さすが元国王だけあって、民衆の支持もまだまだ厚いわね。」

「アクア、からかわないで欲しいミル。」

「ごめんなさいミルク。あなたもパルミエ共和国の首相だものね。」

その時だった。

「あ……あ……あ……」

要塞の中から1人の少女が現れた。胸から血を流しつつ、おぼつかない足取りでこちらにやってくる少女。祈里だった。

「あれは!?!」

「祈里さんなんですか……!?!?!?!」

「うううう……うううううううううう……」

プリキュアたちの陣取っている森影からわずか10mほど手前で祈里は倒れた。

「祈里さん!大丈夫ですか!?!」

イーグレットが近付こうとするも。

「待ちなさいイーグレット!ここは私が行くわ。」

アクアが静止し、警戒しつつ祈里の下へ向かう。

「胸に傷……。おそらく銃弾かもしくは弓矢か何か貫通したんでしょうね。それに、内臓もやられてしまっているようだわ。」

弓矢か何かによる傷。しかしあの時祈里は傷を負っていなかった。弓矢に胸を貫かれたのだが。どういう事だろうか?

あの時祈里に放たれた矢は、実はほむらが射掛けたものだった。彼女の弓矢は彼女の盟友から受け継いだものであり、殺傷能力は十分にある。祈里が傷を負わなかった理由、それは彼女に残された最後

のプリキュアの力のおかげ・・・なのであろう。

その後、祈里は目覚めた。安っぽい言い方だが、これを奇跡と言わずしてどう表現すればいいのだろう。覚醒こそしたが、先ほどの貫通創で彼女のプリキュアの力は全て失われ、力で守られていた傷も一気に噴出し、悪化した。

アクアは一応の止血処置を終え、祈里を横に寝かせる。プリキュアたちは一斉に祈里の周りに集まる。

「アクア、どうなの？」

「まだ目覚めないわ。」

「うう・・・ん」

「あ、目覚めたわ！」

「・・・ここは・・・どこ？」

「ここは要塞外の森よ。」

「・・・あなたは・・・誰？美希ちゃん・・・？せつなちゃん・・・？」

「・・・バカね。私よ、アクアよ。」

「アクア・・・？」

「無理してしゃべらなくて良いわよ。体力を消耗するわ。」

「……………私、信じてた。」

「祈里？」

「のぞみちゃんを、ラブちゃんを、ゆりさんを信じてた。私は……のぞみちゃんの意志に賛同なんてしていなかったの。のぞみちゃんのやる事はただの破壊、創造なんて微塵も考えていない。理想郷だなんて、所詮は理想でしかないもんね……………」

「……………」

「けど私には止められなかった。のぞみちゃんたちは1度決めたらその決心は変えないから……………。だから仕方なく協力したんだけど、結局はこんな有様だね……………」

「祈里……………」

「……………あれ？美希ちゃん？せつなちゃん……………？どうしてそこにいるの？……………あ、そうか。私を迎えに来たんだね。」

「何を言っているの！？美希とせつなはもういないのよ！？」

「……………うん、わかったよ。皆で行こう。皆で……………」







「勝手なことばかり言わないでピーチ！！愛のプリキュアが聞いてあきれるわ！！！」

「ビート！私とはつくの昔に愛を捨てたの。愛なんか無くったって、私は戦い続けるんだから！！！！！！！」

「調子に乗らないでよ！！！！！」

ルージュがピーチに襲い掛かる。ところが。

「フンッ！」

ルージュのパンチをピーチは片手で受け止める。

「しまった！！！」

「調子に乗っているのは、お互い様でしょうがあっ！！！！！」

殴りかかってきた手を持ち、一本背負いでルージュを投げ飛ばした。

「うわあっ！！！」

「ルージュ！大丈夫ですか！？」

ルミナスが声をかけるも。

「へっ、へへへ。これ位大した事無いわよ。」

「ピーチ！！あなたはああああ！！！！！！！」

今度はビートがピーチを攻撃する。

「見え見えなのよ!!」

攻撃を見切り、ルージュと同じく投げ飛ばした。

「……………つ、強い!!」

「……………」

コロココロン

何かがピーチの足元に転がってきた。

「……………これは、手榴弾!!??」

その刹那。

ボンツツツツ!!!!!!!!!!

手榴弾が爆発し、ピーチの体が飛んだ。

「痛ったあ……………」

「ナイスよほむら!!」

「さすがほむらさんね。」

「ありがとう、借りが出来たわね。」

「褒められるだけの事なんかしてないわ。」

ほむらはクールだった。

「こうなったら・・・こうなったら。」

しかしピーチは立ち上がった。そして技の体勢に入る。

「届け！怒りのメロディ！！キュアスティック・ピーチロッド！！」  
ピーチはピーチロッドを装備するも、そこからは怒りのエネルギーがにじみ出ていた。

「怒りよ憎しみよ飛んで行け！」

『プリキュア・フューリーサンシャイン・・・フレイーーーーー  
ツツツツsh!!--!--!--!』

ズドンズドン

「グフツッ!!!」

突然ピーチの体に銃弾が打ち込まれた。行き場を失った技のエネルギーはその場で大爆発を起こす。

ズゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「危ない！」

「皆伏せて！吹き飛ばされるわよ!!!」

ほむらの指示で皆その場に伏せる。

「グウウウウウウ・・・。」

「伏せて、そして皆で手をつないで!!!」

爆発が収まると、先遣隊はその場に立った。ピーチの姿はどこにも見当たらない。

「皆、大丈夫・・・？」

「ええ、皆何とか無事よ。」

ルミナス、ルージュ、ミント、ビート、そしてほむらの5人は何と

か無事だった。

「ピーチは……？ラブはどこ?!」

「周りから気配がしない……？」

「ほむらさん、ラブさんはどうなってしまったんですか!？」

ルミナスが聞いた。

「恐らく、あの爆発の衝撃で、次元の彼方に……。」

「じ、次元の彼方ああ?!?!？」

「それじゃあラブさんは。」

「もうこの世界にはいないって事……？」

「恐らくは……そうね。」

「じゃあ死んでしまったって事!？」

「断定できないわ。ただ吹っ飛ばされただけかもしれないわ。」

ウオオオオオオオ……

「何かしら？騒がしいわね。」

その頃、プリキュア本隊は中枢を目指すべく要塞を進んでいた。

## 第41回 恩讐

「聞きましたか皆さん、遂にプリキュア全員が要塞に突入したよう  
です。」

「我らの目的もいよいよ大詰めか。」

「慢心は禁物。プリキュアの行動は予測不可能。最後まで気を抜か  
ぬよう。」

「このような戦乱はもう誰も望んではおらんだ。なのに、何故彼  
女らはそれに気づかん・・・？」

タタタタタタタタ

ミルクの号令が下り、一斉に要塞内に突入したプリキュアたち。だ  
が行く手には数多くの仕掛けが待ち構えていた。

ある時は銃弾が。

「うわぁっ!？」

「ホワイト!大丈夫なの!？」

「ブラック、大丈夫よ。ちょっとかすっただけだから。」

「う・・・ううう・・・。」

「どうしたのメロディ！？そんなにボロボロになって。」

「2人がよけたからもろに銃弾を食らってしまったああ・・・。」

「大丈夫大丈夫！食らっても大した傷は無いじゃない！先を急ごう！！！」

「ブラック・・・後で覚えてなさいよ。」

また、ある時は落とし穴が。

ガタンッ

「しまった落とし穴だ！！！」

「うわあああああ・・・。」

ブルームとローズが落とし穴に落ちてしまった！しかし彼女なら。

「私に任せてください！！！」

そう名乗り出たレモネードが、落とし穴を落ち続ける2人に向かって。

『プリキュア・プリズムチェーリーーン！！！！！！』

光り輝く鎖を放ち。

パシッ

「あ．．あああ．．．助かったあ．．．。」

「ナイスよレモネード！後でご褒美を与えなきゃね。」

見事に引き上げる。

そしてまた、ある時は毒ガスが。

「皆、ガスだわ！息を止めなさい！！」

アクアが皆に警告をしたのだが．．。

「ふえええええ．．．。」

「ぎもぢわるいいいいいい．．．。」

見事にお見舞いされていた。

その後何とか毒ガスエリアを突破したは良かったが．．。

「．．．．．。」

アクアとホワイトとイーグレットはほぼ無傷だったが、ブラックとブルームは完全にノビていた。メロディとリズムは辛うじて意識を保っていた。レモネードとローズは口から放送できないシロモノをポタポタと垂れ流していた。

「仕方無いわね。ここには見張りもいないようだし、しばらくここで休みましょう。」

ホワイトの提案により、しばらく休息をとる。

休息の後、再び進撃を開始する。先遣隊がパイソと戦った中庭。ピーチと戦った部屋を通り過ぎ、中枢へと進む。

「ん？」

「どうしたのほむら？」

「誰かが来るわ。」

「新手なの！？」

「・・・いいえ、他のプリキュアたちです！！」

久方ぶりに、先遣隊と本隊が合流した。そこは丁度倉庫のような建物だった。

「よかったあ、皆無事だったんだ。」

「やっぱりルミナスたちに任せて正解だったわね。」

ブラックとホワイトが先遣隊をねぎらう。

「そ、そんな……。私たちは大したことはしていません。ですが……。」

「……祈里とラブね。」

「……はい。」

2人に続いてアクアが語る。

「祈里は……。逝ってしまったわ。私たちの目の前でね。」

「……!?!?!?」

「祈里は悔いていたわ。のぞみたちに協力した事を。のぞみたちの行為の愚かさを。」

「そうですか、祈里さんがそんな事を……。」

先遣隊はピーチと戦った事を語った。『逆行者』の正体が、曉美ほむらという少女である事を。怒りと憎しみに我を忘れたピーチに一時は敗北寸前まで追い込まれたが、ほむらの援護もあり、何とか攻撃を退けた事を。

「だけど、私たちはラブさんも救えませんでした。ラブさんは自らの技の暴走により、次元の彼方へと吹き飛ばされてしまいました。」

ルミナスはそう言った。事実とは多少違っているが、それは言わな  
いことにした。

「……多すぎるわ。今回の戦いは、余りにも犠牲が多すぎるわ  
！！」

ルージュが悔しさを丸出しにして叫ぶ。

「つぼみさん・えりかさん・いつきさん・美希さん・せつ  
なさん・祈里さん……。そしてラブさん……。」

「全滅したチームも出てしまったわね。」

……

プリキュアたちの脳裏に、今まで散っていった仲間たちの表情や思  
い出が走馬灯のように蘇った。

「もう嫌……。もう嫌よこんな戦いは。こんな戦いはもつづんぞ  
りよ……！」

ビートもルージュと同様に嘆き、叫ぶ。

「その言葉はまだまだ早いわよ！！あなたたちにはもっともっと戦  
ってもらわなきゃ。」

「……その声はゆりさんね！どこのの……！」

ミントがそう言った。

「じいよー!」

ビュンッ!!

上からゆりが降りてきた。見事に着地した。

「ここからは私が相手よ。一斉に来なさい!!」

『Precure! Open my heart!!』

ココロ・パフュームを使い、ゆりはムーンライトに変身した。

「月光に冴える一輪の花! キュアムーンライト!! 全ての命が必要としなくなるまで、私は戦い続ける!!」

そして始まる打ち合い。

「タアアアアアア!!」

先手はメロディ、リズム、ビートのスイート組。3人で一斉にム

ンライトに攻撃する。

「甘いわ!」

しかしムーンライトは3人の攻撃をあつさりとかわした。

「ムーンライト! つばみさんたちが何の為に死んでいったのか、考えた事はあるの!？」

メロデイがパンチをお見舞いするが。

「その名前を、軽々しく言わないで頂戴!」

カウンターを食らい、メロデイは地面に叩きつけられる。

「あなたたちにはわからないでしょう。親が突然いなくなった時の寂しさを。そしていつしか敵として現れ、親が造った妹と戦って、最後には使い捨てられて目の前で親と妹を同時に失った悲しみを  
おっ!」

ムーンライトは泣き叫びながら感情をぶちまける。

「そんなのあなたの事情でしょう。私たちはそんな事情なんて知らないし……。」

『知りたくも無いわ!』

再びスイート組がムーンライトに攻撃する。

「あぁっ!」

見事に3人のキックがヒット！ムーンライトはダメージを受けた。

「うううっ、やるわね。あなたたち。だけど今度はこっちの番よ。」

ムーンライトが技を繰り出す。

「ムーンライト・シルバーインパクト！！！」

地面に拳を叩きつけ、膨大な衝撃波を生み、プリキュアたちを吹っ飛ばした。

「………強い。今までのプリキュアとは違うわ。」

「でも弱点は必ずあるはずよ！」

「私たちは終わらせたい、こんなあんまりな戦いを。そして創めさせたい、新しいパルミエの歴史を……！」

「何が戦いを終わらせたいよ。何が新しいパルミエの歴史よ。そんなもの新しい動乱の火種に過ぎないわ。我々は戦うために誕生した伝説の戦士。伝説を紡ぎ続ける為には、戦いは不可欠なのよ。戦いを完全に終わらせるには、全員死ななければいけないわ。」

ムーンライトは、スイート組の言葉を否定する。

その時だった。

ズキユウウウウウン

「ウアツ……………!!」

ムーンライトの額を何かが貫通した。

「動乱の火種は、あなた自身よムーンライト。」

ほむらが放った拳銃の銃弾が貫通したのだ。ムーンライトの額から赤い血が流れ出た。

「そんなに恋しいのなら、あなたも親と妹の下へ行かせてやるわ。」

番外編 静寂

ここは要塞の司令室。のぞみはコンピュータの席に座り、来るべき決戦に備えている。

「セーフティ解除、発射暗号入力完了、発射準備完了。目標は、パルミエ首都市街地……と。ふう、これで一通りの作業は終了つとふわあ〜あ〜あ〜……疲れた。」

のぞみはコンピュータのキーを動かす手を止め、大きなあくびをして、う〜〜〜んと背伸びをする。

「もう、ゆりさんってば『マニュアルがあるからそれを見て作業しなさい。』なあ〜んて言っちゃって、私には全然難しいよ……。まあ無事に終わったから良かったけど。」

ぐううううう〜〜〜

「そう言えばおなかすいたなあ……。」

そう言つとのぞみは食糧保管庫に向かった。

食糧保管庫には軍隊用の糧食が積まれていた。

「この糧食も飽きちゃったなあ……。たまには大きなケーキが食べたいなあ。」

糧食を持って、司令室へと戻った。今日は一人っきりの食事だ。以前はゆりたちと一緒に食していたのだが。

パクパクパク

「独りぼっちで食べるって、何だかつまんないなあ。糧食もおいしくないし、寂しいばかりだよ。」

パクパクパク

「でも、もうすぐそれも終わりだね。もうすぐ終わりだね……。」

「

ゴックン

「私たちプリキュアを必要とする世界を創るために。こんな時代は終わらせなきゃいけない。」

カコーン

「世界を変えるために必要な要素はただ一つ。それは『戦争』なんだから……。」

……

「食べたなら何か眠くなってきちゃった。おやすみなさあ……。」

のぞみはそう言って眼を閉じた。

「Z Z Z Z Z . . . . . Z Z Z Z Z . . . . .」

ゆりがプリキュアたちと戦っている丁度その頃、静寂の中でのぞみは眠っていた。嵐の前の静けさのようだった。

## 第42回 孤高

「ぐうっ、ううううう……。」

ほむらが放った銃弾を額にぶち込まれたムーンライト。しかし彼女は辛うじて立っていた。

「あんたあ~~~~、卑怯よあ~~~~。」

「ムーンライト、私はあなたが哀れでならないわ。プリキユアになんてならなかったら、こんな辛い目に遭わなかったのに。あなたは、私と同じよ。」

「よくもまあずけずけとおおお!!!」

ムーンライトは頭に血が上ったのだろう。鬼のような形相をしてほむらに襲い掛かる。

ダダダダダダダ

「あんたと私が同じですってえっ!?! 同じなわけ無いでしょ! 似て非なるものよおっ!?!」

「見た目は全く異なるけれど、根っこは同じよ。私とあなたは同じ穴のムジナなのよ。」

「ム力つくわ!!! 今私はあんたに対して最高にム力ついているわっつ!!! 。。。あなたを殺さなきゃ気が収まらないわっつ!!! 。。。!!!」

ムーンライトは打撃のスピードをさらに速めた。

「!?!」

ほむらも瞬間移動でかわすものの、時たま打撃を食らうようになる。

「やるわねムーンライト、だけどこれなら……!?!」

ほむらは手榴弾のピンを開けた。しかしすぐには投げず、しばらく時間が経った後に投げつける。

「!?!?!?!?!?!?!?!?!」

打撃を食らわせるために接近していたムーンライトに手榴弾が近づく。その刹那、大爆発が起きる。

「うわあああああああ!?!?!?!?!?!?!?!?!」

ムーンライトは絶叫を上げながら空中を舞い、地面に叩きつけられた。

「あああ……あああああ……」

ムーンライトの姿は無惨極まるものだった。全身からおびただしい血を流し、埃まみれになり、衣装もあちこち破れ、もはやかつての艶やかな面影は見当たらなかった。

「ううう……」

ムーンライトはなおも立ち上がるうとするが。

「ううっ……ガハアツツツ!!!!!!」

立ち上がった瞬間、口から大量の血を吐いた。そしてまたその場に崩れる。

その様子をプリキュアたちは、ただただ見守るしかなかった。

「……………ツツツ!!!」

「こんな見られないよ……………」

ルミナス、イーグレット、レモネード、リズムは手で顔を被っていた。ブルームとルージュとミントとビートも顔を背けていた。

そんな中、ブラックとホワイトとアクアとメロディは、2人の戦いを見つめていた。

「凄い……。凄いと言えない……………」

「ムーンライトはあんなにボロボロになってもまだ立ち上がるうとしている。」

「どこからそんな気力が来るって言うの……………!?!」

「普通だっただらもう命を落としているはずなのに……………」

「……嫌です、こんなの見たくありません。ムーンライトがボロボロになる姿なんて見たくありませんっ！！」

「何なのよおっ！このもどかしさは、この悔しさは、この悲しさは一体何だっと言うのよおっ！！！」

レモネードとルージュが泣きはじめてしまった。ブルームたちも声こそ抑えているものの、下を向いて泣いた。

そんな皆の様子を見て、ブラックが言った。

「皆、しっかりして！ここで泣いちゃ駄目よ。涙を拭いて目を開けて。そして見届けるのよ！！ほむらとムーンライトの戦いを。」

続けてホワイトとアクアとメロディも。

「そして、しっかりと脳裏に焼き付けておきなさい。」

「これが戦士の宿命なんだって事を……………」

「私忘れない。今日、今起こっているこの戦いを、絶対に忘れない……………」

「まだ立ち上がるの……………あなたもタフね。」

「…………私を……ゲウフツ!!!!…他のプリキュアと一緒にしないで頂戴……。戦闘経験は……。私のほうが長いんだからね…………。」

「戦闘経験なんてどうだっていいわ。勝負にあるのは、勝つか負けるか。それだけよ。」

「…………そう、だったら、勝つのは私よ!!!!!!」

ズダダダダダダダダ

ほむらはマシンガンを放った。

『ムーンライト・リフレクション!!!!』

ムーンライトはとっさに防御し、攻撃をかわす。

「あなたの弱点は、接近戦よ!!!」

「…………!?!?」

ほむらは瞬間移動した。だが。

「甘いわよ!!!」

移動した先には既にムーンライトがいた。ムーンライトの拳をほむらはまともに顔で受けた。

「ああああああっっっ!!!」

ほむらもさっきのムーンライトのように遠くに吹っ飛ばされた。

「・・・・・・・・・・ポタポタポタ・・・・・・・・。」

ほむらが立ち上がると、カんだのだろうか。鼻血がポタポタと流れる。口からも血の雫がこぼれた。

「ハアアアアアアア・・・・・・・・!!!!!!」

ムーンライトは続けてほむらを襲う。顔を殴り、腹部を蹴る。その光景はもはやリンチ以外の何者でも無かった。

「グハッ！ゲホッ！！ガハアッ!!!!」

ほむらはまともな抵抗が出来なかった。

「殺してやる・・・・・・・・殺してやる・・・・・・・・まずはお前をこの場で殺してやるわ・・・・・・・・!!!!!!」

「・・・・・・・・・・ムーン・・・・・・・・ライト・・・・・・・・。」

「そうすれば、お前は宿命を終わらせられるし、そしてあの女の下に逝けるでしょう!!!!!!?」

「・・・・・・・・!!?!?!?」

ほむらは薄れゆく意識の中で、ある1つの名前が浮かんだ。

「……………まどか……………!?……………あなた……………まどかの名を……………」

「これで……………終わりよおっ!!!!」

ムーンライトがとどめを刺そうとしたその時。

「プリキュア〜マーブルスクリュー……………」

『マックス……………!!!!!!!!!!』

ドッゴオオ……………ン!!!!!!!!!!

「うわああっつっ!!!!!!」

とつぜん光が起こり、ムーンライトに襲い掛かった。

「ブラック……………ホワイト……………?」

ほむらは、光の先にブラックとホワイトを見た。

「ムーンライト!!かつてのあなたは強くて魅力的なプリキュアだったわ!でも今のあなたは外道の外道の腐れ外道だわっつっ!!!!」



ブルームとイーグレットは、一瞬でブライトとウィンディに強化した。

「精霊の光よ！命の輝きよ！！」

「希望へ導け！2つの心！！」

『プリキュア・スパイラルハート・・・スプラッシュウウ！！！！』

ブライトとウィンディの合体技が、大きなエネルギーとなってムーンライトに迫る。

『ムーンライト・リフレクション！！！！』

何とか防御を試みるムーンライト。

「ぐうううううう・・・！！！！！」

しかし、じりじりと押されつつあった。

「わかってよムーンライト！今のあなたは危険極まりないの！！！」

「あなたは、今この瞬間、この世界に生きていてはいけない存在なのよ！！！！！」

「生きていては・・・いけないですってええ・・・！！！！？」





「そうね、何とでも言わせてもらおうわ。」

「これで私も終わり……。そしてハートキャッチの歴史も終わり……。いざ迎えてみると、呆気無いわね。」

「人間の命は短いわ。例えプリキュアになっても変わらない。私たち魔法少女もまた然り。月影ゆり、やっぱり私とあなたは同じなのよ。プリキュアと魔法少女、名前こそ違うけれど、同じなのよ……。」

「…………ハア…………ハア…………苦しい…………ほむら、あなたにお願いしていいかしら？」

「珍しいわね。何かしら？」

「私を…………楽しんでくれないかしら。」

「……………わかってるわ。元よりそのつもりだったから。」

そう言うと、ほむらは拳銃の銃口をゆりに向ける。

「最後に何か言いたい事は無いかしら？聞いてあげるわ。」

「コロン…ダークプリキュア…お父さん…………ごめんねさい。私は最後まで最低の女であり、娘だったわ…………。つばみ…えりか…………いつき…………、もうあなたたちとは遭えないのね…………。残念だわ…………。」

「……言い終わった？」

ほむらが確認をとると、ゆりは無言で頷いた。

「さあ、暁美ほむら、私をこの苦しみから永遠に解放して……」

……

ズドーーーーーンッッッ!!!……

ほむらは銃弾を放ち、ゆりは心の花と共に、命の花も散らした。

「月影ゆり、永遠に眠りなさい。あなたはもうプリキュアとして戦わなくていいのよ。憎しみを感じなくていいのよ。誰かを傷つける必要も無くなったのよ。あなたは解放されたのよ。この世と言う地獄から……。私は、今はただあなたが仲間達や家族に会える事を願うばかりよ……」

そう言うと、ほむらもその場へたり込んだ。

……

「ほむら……」





## 第43回 逆襲

タッタッタッタッタッタッタッタ...

ムーンライトの猛攻を一蹴し、先へ先へと進むプリキュアたち。だが...

「おかしいわ。ねえ、ホワイト。」

「ええ、どうもおかしいわね。」

ブラックとホワイトは何かおかしいと感じる。

「どうしたんですか？2人とも。」

「ルミナス、これだけの規模の要塞にしては警備が杜撰だとは思わない？」

「そう言われれば、確かに警備が薄いです。」

するとアクアが言った。

「もしかして、これは... 罠？」

「まさか!？」

「どうもそんな感じがするわ。私たちを誘い出しているのかもしれない。」

「いたぞ！こつちだ！！」

「もっつ！鬱陶しいわねこいつら！！」

口ではそういつているが、実際にはそれほど見張りは現れていない。今現れたのもほんの数十人程度の集団だった。

見張りを一通り倒し、先に進む。

「やっぱりおかしいわ。のぞみは一体何を考えているの？」

「さぁ……、会ってみないとわからないわ。」

「あっ！あれを見て下さい！」

レモネードが指差したその先には出口が。どうやら要塞の本丸へとたどり着いたようだ。

「……いよいよね。」

「ついにのぞみさんと……。」

「皆、行くよ！」

ブラックの号令で一斉に突入する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・わぁ・・・・・・・・。」

「凄いわ・・・・・・・・。」

「これなの？エレンが目撃したって言う人型の物体って。」

「ええ・・・、間違いないわ。」

「でも、どこから見ても人間には見えないわ。むしろ恐竜みたいよ。」

「そ、そう？私には人間に見えたけれど。」

一行が到達したのは、だだっ広い空間だった。そこで目撃した人型の物体。だがそれは人間とはとても呼べず、恐竜を思わせる無機質な装甲の塊だった。

「だけど、いつの間にこんな物を。のぞみが何を考えているのかましますわからなくなるナリ。」

「のぞみさんは本当にプリキュアの理想郷を築こうとしているのかしら・・・・・・・・？」

ブルームとイーグレットが近くに流れていた水路に近づこうとする  
と。。。。

「待つて2人とも!!」

ホワイトが強い声で2人を引き止める。

「ど、どうしたのホワイト。そんな怖い声出して。」

「そ、そうよ。びっくりするじゃない。」

「皆。その水路の周辺、やたらと近づかないほうがいいわ。」

「ど、どついう事よ?」

すると、ブラックとホワイトのハート・フルコミュニケーションからメップルとミップルが現れる。

「皆、この辺りには長くないほうがいいメポ!」

「この空間からゼンナーとは違う、とてつもなく嫌な気配がする  
ミポ!」

「ちょ……ちょっと、嫌な気配ってどついう事よ。説明しなさい  
よ2人とも!」

ブラックが強い語調で尋ねるが。

「プリズム・ストーンを見てみるポポ!!」

タッチ・コミュニケーションからポルンも現れ、プリズム・ストーンを見るように言う。皆はプリズム・ストーンの周りに集まる。

「……………!?!?!?」

「な……何なの一体!? プリズム・ストーンが激しく点滅しているわ!」

皆が目にしたプリズム・ストーンは、激しく点滅するという、今までには絶対に起きなかった現象が起こっていた。ホワイトはこう答えた。

「私が思うに、このプリズム・ストーンは、ガイガーカウンターの機能もついているみたい。」

「……………えええ……………!?」

「ガイガーカウンター……………!?」

メロディとリズムが言葉を失う。

「がいがかうんた……………って何?」

ビートにはよく判らないようだ。

「簡単に手短く言うと、カクカクしかじかのほにゃらら……………」

「そんな大事な事、何でもっと早く言わなかったの!」

「私たちだって知らなかったんだから、しょうがないでしょう!」

「とにかく、この辺りは放射能が強すぎて測定が出来ないようなの・

「。。。ここにいても、相当の被曝量になるわ。」

「じゃ。。。じゃあこの水路は。」

「どこからか廃液が漏れ出して、それが水路に流れ込んでるんでしょっね。」

「ううう。。。あたしそういう話って、苦手なの。。。。」

ルージュがブルブル震えて言った。

「ここでまごついていても仕方ないわ。今はのぞみと接触して、真意を確かめるのが最優先よ。」

「私もそう思うわ。今はのぞみさんを止めるほうを優先するべきよ。」

「ローズとミントの言う通りね。ここに長居は無用だわ。皆、急ぐ。」

「恐らくあの部屋にいるはずよ。」

ホワイトが指差したのは空間の上、部屋らしきものがある。

「あのはしごから行けるみたいね。」

はしごを上ったり下ったり、通路を行ったり来たりして、一向は部

屋の前に到着した。そこは司令室のようだった。

そして、部屋の中へと入る……。

「のぞみ……………」

「……………皆、遅かったね。」

そこにはのぞみがいた。いつもののぞみがいた。

「教えてのぞみ、あんたどうしてこんな事をしようとするの?」

ルージュが真っ先に質問する。

「……………」

「パインとムーンライトは死んだわ。ピーチも時空の彼方へと消えてしまったわ。のぞみ、あんたにもう勝ち目は無いわ。すぐに武装解除して投降するのよ。そうすれば、命の保障は出来ると思う。」

「……嫌だよ。」

「のぞみ!!」

「私決めているの。この世界にプリキュアがあり続けられる為には、戦いが必要なんだって。自らが動乱の火種となる事で、永遠にプリキュアを必要とする世界が続くんだって。」

「そんなの間違ってます！確かにプリキュアは伝説の『戦士』です。戦う為にいる存在です。ですがそれ以外にも希望の『象徴』でもあるんですよ！」

「ルミナス、希望を必要としている世界は、とっても不幸なんだよ。このありとあらゆる世界の歴史は、希望と絶望と野望で作られたミルフィーユのようなものなんだよ。そしてそれは、未来永劫続くんだよ。」

「確かに今までの歴史はそうだったかもしれませんが。ですが、これからどうするかは自分たち次第なんです。良くなるにも悪くなるにも自分たちの力次第なんです。」

「……結局、どうあがこうと何一つ変わらない。私たちは戦いからは逃れられないの。皆どうしてそれがわからないの!?!?どうして戦いを止めようとするの!?!?教えてよ!?!?!」

……

のぞみの叫びに、皆黙り込んでしまった。

「1ついい事を教えてあげる。さっきも見たでしょ。汚染された廃

水を。ここにはね、核が無尽蔵にあるのよ!!」

「……………な……………今何て言ったの……………核ですって……………!!?」

一行は絶句した。のぞみはそんな物にまで手を出していたのかと。

「これだけ核があれば、例え闇の勢力が現れようと、一撃で倒せちゃうね。」

「いい加減にきなさいよ!!!!!!のぞみ!あんたはパルミエどころかパラレルワールド全体を核で汚染させるつもりなの!!???もしそれが事実なら、私たちが許さないわ!!」

「ブラックは相変わらずうるさいなあ……………」

「う……………うるさいですってええええ!!!!!!」

「私たちは、皆から褒められる為でも、おいしい物をたくさん食べる為でも、男に抱かれないが為に戦うんじゃない。私たちに必要なのはただ1つ、Battle(戦い)よ!!!!だから、私は1人になるうとも、最後まで諦めずに戦うつ!!!!……………つつ!!!!」

「待ちなさいのぞみ!!!!!!」

ブラックの制止も振り切って、のぞみは人型の物体に乗り込んだ。

『シューーーーーーン』

そしてハッチが完全に閉じられた。

「しまった!!!」

皆が追いかけたが、遅かった。

『プリキュアの皆、この歴史的な兵器 REX を拝んで死になさい！皆へのせめてもの手向けだよ。未来を導く悪魔の誕生と脅威を、今から見せてやるわ!!! フッフフ・・・アツハハハハハハハハハハ!!!』

のぞみがそう言うと、REX と呼ばれた兵器はゆっくりと上昇を開始した。

「まずい！このままじゃ逃げられるわ!!!」

「飛び移るしかないわね!!!」

スタツ   スタツツ   スタツツツ

プリキュアたちは次々と上昇するリフトに飛び移った。世界の運命をかけた歴史的な一戦が、今幕を開けようとしていた・・・。

## 第43回 逆襲（後書き）

プリズム・ストーンの点滅とガイガーカウンター機能は、本作オリジナル設定です。

## 第44回 ともしび

グオオオオオオオン……

不気味な重低音をあげ、リフトに乗りながらゆっくりと上昇する、のぞみの搭乗した兵器REX。

ガコオツツン!!!

リフトが止まった。止まった場所はどうかやら搬出路のような、今までで一番ただ広い空間だった。

そしてここが、のぞみ率いるUOPとプリキュアたちの最終決戦場になる。

「皆、よくここまで来れたね。その無謀さだけは褒めてあげる。けど、あんたたちはここで死ぬのよ。プリキュアとして死ぬるんだから、少しは私に感謝して。」

「冗談じゃないわツツ!!今のあんたに感謝の言葉なんて一言も出てこないわよ!」

「返すようだけのぞみ、あなたもここで反逆者として死ぬのよ。それでもいいのね!?!」

ブラックとホワイトがのぞみに呼びかける。

「反逆者？いいわ！反逆者だろうと何だろうと構わない。私はこの道を進むだけなんだから！！」

ズダダダダダダダ！！

REXのマシガンがプリキュアたちに襲い掛かる！！

『タアアツツ！！』

しかしプリキュアはいとも簡単に避けた。

「アアアツツ！！！！」

「ルミナス！！！！」

しかしルミナスの太ももに弾丸が当たった。激痛が走り、ルミナスがその場に倒れてしまった。大量の血が流れる。

「ルミナス、大丈夫！！！？？」

ブラックがルミナスの下に行こうとするも。

「ブラック！後ろ！！」

「！？？」

「隙だらけよ！！！！」

ヒューン ヒューン

ブラックとルミナスに照準を合わせ、REXからミサイルが発射！  
2人に直撃した。

『ウワアアアアツツツツ！！！！！！！！！！』

「ブラック！ルミナス！！」

ホワイトがREXと戦いつつ2人に叫ぶ。

「ブラック、私の事は放っておいて構いません。それよりもREXを……。」

「嫌だ！ルミナスを放っておくなんて私は嫌だ！！」

「聞いてくださいブラック！！」

「嫌だ！絶対に嫌だ！私、もうこれ以上プリキュアを失うのを見たくないんだ！！」

「何そこで口喧嘩しているの？いいわ、2人とも踏み潰してあげる！感謝しなさい！！」

REXは脚部を上げ、ブラックとルミナスを踏み潰そうとする。

「とどめよおっ……！！」



った。

「グウツ！」

「いい加減に投降しなさいのぞみ！！」

「今ならまだ間に合います！」

「のぞみさん！！」

「もうこんな戦いは止めるのよ！！」

「これ以上皆を傷つけないで！！」

続いてGOGO組とローズがREXに波状攻撃をかける。技をどんどん炸裂させるも。

「……………これ位のダメージ、何でもないよ！！」

「ダメだわ、装甲が硬すぎて、私たちの攻撃が効いてない。」

「まだです。まだ何か方法はあるはずですよ。完璧なものなんて無いんですから。」

「ローズ、それに皆。今までの日々忘れないよ。だから、ここで死ねっっ！！」

REXから高出力のレーザーが照射された。

「危ないツツツ!!!」

ジュツツツツ!!!

『あああああああ!!!!!!!!!』

ローズたちを庇うようにルミナスがレーザーの前に立ちふさがった。レーザーが、ルミナスの肩から右腕の部分を焼き切った。その場にボトリとルミナスの腕が落ち、大量の鮮血が吹き出た。

「ル……ルミナス……!!!!!!」

「う……嘘でしょ……」

「うううう……」

ルミナスがその場にへたり込む。

「ルミナス、血迷ったの!?!」

「血迷ってなんか……いません!?!これ以上皆さんには手を出させません。私はこっちです!?!」

右腕を焼き切られながらも、ルミナスは持てる力を全て出し、ちょこまかと動き回り、REXの動きをかく乱する。

「どうしたんですか!?!私はこっちですよ!?!」

「もおおっ！負け犬がちよこまかとおおっ！！！！！」

ルミナスの動きにREXが翻弄される。

「だあああああつつっ！！！」

「あなたの相手は私たちよ！！！」

ブラックとホワイトが援護する。

「止まれッ！止まれッ！！止まれええッッ！！！！！！！」

「邪魔しないでよ。どいてえっ！！！」

REXがその巨体を振り回し、2人を振り払った。

「しまった！！！！！」

「ルミナスがつ！！！！！！！」

「私はこっちです！！！」

ルミナスは搬出路の壁面に立ち、壁沿いを歩いていた。しかし彼女の体力もかなり消耗していた。腕を切られているから尚更だ。

「ハア・・・、ハア・・・、ハア・・・、ハア・・・」

動きも以前より大分弱まっていた。

「鬼ごっこはもうおしまいだよ!!」

刹那、REXの嘴部分がルミナスを潰すように迫った。

「ハッ!?」

しかしREXの方が速かった。

ビチャアアアツツ!!

ルミナスが壁と嘴に挟まれ、血が壁一面に飛び散った。

「ガハアアツツ!!!!」

ルミナスの口から大量の血が溢れた。

「ルミナス、とどめだよ!!」

「光の意思よ!私に勇気を!希望と力を!!」

ルミナスが最後の力を振り絞り、ハーティエルバトンを召喚する。そして弓状に変化し、ルミナスの前にかざされる。

『ルミナス・ハーティエル・アンクシオン!!!!!!!!』

ルミナスの必殺技、ハーティエル・アンクシオンが光のパワーを持ってREXに放たれた。そして、REXの動きが止まり、嘴がルミナスから離れた。

「うううっ！！！」

ルミナスはその場にうつぶせになって倒れた。

「REXの動きが、止まった。」

するとREXの嘴が開き、のぞみの姿が現れた。

「さすが、クイーンの『生命』の具現者ね。だけどこれまでだよ！」

「ううううう……ブラック！ホワイト！今です！マーブルスクリューを撃ってください！！」

「撃てるかしら！？私にも当たるけど、ルミナスも巻き添えだよ！」

「卑怯よのぞみ！ルミナスを盾に取るなんて！！！」

「戦いに卑怯もラッキョウも無いわ！戦いの目的は、ただ勝つ事！それだけだよ！！」

「ブラック！早く撃ってください！」

「……ルミナスウ……」

「ホワイト!!」

「・・・・・・・・できない。・・・・・・・・できるわけないでしょ!!!!!!」

「撃ってください!!!でない、もうすぐ私の技の効果も・・・」

「

シューウウウウ・・・

ハーティエル・アークシヨンの効果が消え、REXは元の動きを取り戻す。

ガリガリガリガリ・・・

嘴を使い、満身創痍のルミナスを引き摺り下ろした。

「とどめよっ!!」

脚部がルミナス目がけて下ろされた!!しかし。

「・・・・・・・・!!!!」

ルミナスは耐えた。

「ブラック、ホワイト、そして皆さん……。私はどうやらここま  
でみたいです。ですが私は信じます。例えどんなに世間からボロク  
ソに言われようと、希望の光は決して消えない事を。いつか絶対に  
明るい未来が来る事を。」

「ルミナス!!」

「ルミナスウウウツツ!!!!」

「皆さん・・・・・・・・・・さようなら・・・・・・・・。」

そして再度、REXの脚部がルミナス目がけて下ろされた。その威力の前に、もはやルミナスはなす術が無かった。

ズドーーーーー！！！！！！

ルミナスはREXの下敷きとなり、その輝く生命に終止符を打った。  
。。。。

『ルミナス（ひかり）——————！！！！！！！！！！』

『……………！！！！！！！！！！』

REXの足元から血が溢れ続けていた。

「ルミナス、生命は消える間に輝きを増すって本当だったんだね。皆、これで判ったでしょ！？ 私たちは希望の象徴でも何でもないんだよ！ただの薄汚れた戦士なんだよ！！皆もルミナスの後を追いなさい！！さあ、戦いの再開だよ！！！！」







「どうしてあんたが謝るのよ。それこそ『その必要は無いわ。』じゃない。」

ルージュをはじめ、皆気に留めていなかったようだ。

「……そうね、まずはREXを止めるのが先決ね。」

すかさずほむらは、バズーカをコクピットに向けて発射した！

ポーーーーーン！……！

「うわあああっ！……！」

のぞみが悲鳴を上げる。

「皆、REXの弱点はコクピットよ。あそこを集中して攻撃するのよ……！」

「こっぴなったら、皆まとめてミンチにしてやる……！」

REXからマシンガンとミサイルが一齐に発射される。

「おっと……！」

しかし難なく避けられる。



「ローズ、行くわよ！」

「アクア、へましないでよ!!！」

ローズとアクアも体勢に入る。

「邪悪な心を包み込む。」

「薔薇の吹雪を咲かせましょう。」

『岩をも砕く激流と共に!!!!』

キュイイイイイイン……

『アクアローズ・サファイアブリザード!!!!!!』

アクアローズ・サファイアブリザード。薔薇の花吹雪と水の激流が一体化し、猛烈なパワーを叩きつける技。それはまさしく極地に吹き荒れるブリザードの如し。

ギユイイイイイイイイイン!!!!!!

「うわあああああ!!!!!!」







ブラックがREXに視線を向ける。

「よく見えないわ。一体のぞみはどうなったの?」

ローズがのぞみの様子を気にする。

すると。

カッン……カッン……カッン……カッン……

のぞみがこちらに向かって歩いてきた。しかしのぞみの様子はどこか変だ。

「の……のぞみなの?」

ローズが確認する。

「そうよ、私は夢原のぞみ。又の名をキュアドリーム、……いいえ今は違う。」

その瞬間、のぞみの周りを強烈な瘴気が発生し、彼女の体を変化させる。

「?????!!!!!!!!」

プリキュアたちは呆然とする。

「大いなる野望の力、キュアアンビション!!!これが今の私よ!!!」

まだ、運命は決着を付けさせようとしなさい。

## 第46回 炎と氷

「キュア……アンビション!?」

「そうよ。私は生きとし生ける者の邪念の集合体。野望のプリキュア、キュアアンビションよ!」

燃え盛る炎をバツクに淡々と語り始めるキュアアンビション。

「あなたたちつて、つくづくおめでたい連中ね。悪と決め付けたら躍りになって潰しにかかるんだもん。」

「当たり前でしょ!皆を苦しめる連中は絶対に許さない!」

「そんな連中から皆を守るのが私たちの使命でしょ!??」

メロディとリズムが言葉を返す。しかしアンビションは、

「ふんっ!くつだらなあい!!全員が全員守るべき対象なの!??ちやんちゃらおかしいわね!奴らは欲望と野望の塊だつてのに。」

「あんたも他人の事言えないでしょ!」

ビートが反論した。

「まだ言つの?それじゃあ、これを見てもそんな事言えるのかしら?」

アンビションは搬出路の天井をスクリーンとし、胸の蝶の飾りを光

源とし、映像を見せ始めた。

そこに映し出されていたのは。

多くの国民を前にして会見を行う共和国政府関係者。

「え、今回の一連の騒乱に關しまして、パルミエ国民の皆様におよそ信じがたい事態が発生いたしました事をご報告申し上げます。」

「ご報告？一体何の事？」

「シッ！ブラック、今は黙って見ましよう。」

ホワイトがブラックを黙らせる。

「突如と致しましてこのパルミエ共和国に出現しました、Utopia of precure 略称UOP。ありとあらゆる世界を破壊し、戦士が活躍できる争いの世界を創造しようとする連中に対し、ミルク首相自らプリキュアたちを率い、UOP殲滅に動きました。」

「ねえローズ、何だか話が……。」



「プリキュアたちによる、反政府組織UOPへの寝返りを受けて、各国は次々と声明を発表しております。」

「今度は何なのよお……!?!?」

ブルームが泣きそうな声で見る。

「この内、光の園、スイーツ王国、メイジャーランドは相次いでプリキュアたちを『脅威』と決定し、またその他の、鏡の国、お菓子の国、おもちゃの国も順次承認する予定で調整に入っているとの情報が入っております。」

「う……嘘よ!でっち上げよ!!!全て真赤な嘘っぱちよ!!!」

「それではここで現在のパルミエ共和国の様子を中継で伝えてもらいます。　××さん?」

画面が替わり、中継映像が流される。そこには『嘘つきプリキュア!』だの、『ペテン師集団!』だの、『プリキュアはいらない!』等と書かれたプラカードを掲げ、国民が集会を行っている様子をリポートしていた。

「嘘でしょ……?ねえ嘘だと言いなさいよアンビション!」

「嘘じゃないわ。これはれっきとした現実であり、事実よ!」

ここに至ってプリキュアたちは己の置かれている状況を理解した。

私たちは、UOPに売られてしまったんだ。

「お願い皆！これは全部真赤な嘘よ！信じて！！！！」

「無駄だよローズ、画面に向かって叫んだ所で、皆納得するはずないでしょ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・つっつっつ！！！！！！」

ローズが苦虫を噛む。

「皆、これで判ったでしょ。皆が皆助けろべき対象じゃないんだよ！中にはこんな腐った連中もいるって事を知りなさい。ここまで見せられて、まだあんたたちは皆を守る為に戦うって言うの！？？こんな奴らを救う為に戦うの！？？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

皆、返す言葉が見つからなかった。

「もうこうなったらしょうがないよね。あんたたちに与えられた選択肢は2つ。こんな奴らを守る為に私と戦うか。私と手を組んで、世界を敵に回してでも奴らと戦うか。さあ、選りなさい。」

アンビションは答えを求め。

「アンビション、私たちの答えはもう出てるよ。」

「私たちが欲しいのは、皆の笑顔。」

「確かにこんなクズな連中もいる。」

「守るに、救うに値しない者もいる。」

「だけど私たちは今一度だけ賭けるわ。」

「皆の心に。皆の力に。」

「例え蚤みたいにちっばけな希望でも。」



「そうよ！あんな奴らの為に命を賭けて戦うだなんて、メス犬以外の何者でもないじゃない！！揃いも揃ってバツカじゃないの！?!」

「バカはお互い様でしょアンビション。」

「グダグダ文句をたらさないで、早いとこ決着を付けましょ。私たちとアンビション。どちらが勝って、どちらが正しいのか。」

「そうね、決着を付けましょう！どっちが正しいのか白黒付けましょう！皆まとめてかかって来いよおおおお！！！！！！！！！！」

「言われなくたって判っているわああああああああ！！！！！！！！！！」

希望か、野望か、欲望か、絶望か。様々な感情が入り乱れた第2ラウンドが、今始まった。



「イーグレット、後は頼んだわ!!」

プリキュアたちは隙を見せない。すぐさまブルーム、イーグレットのパンチが襲い掛かる。

『ダアアアアア!!!!』

ボスツツツ!!

見事命中。アンビションの鳩尾と背中に同時に当たる。

「ゴホツツ!!……やるじゃないのあんたたち。それでこそ伝説の戦士よ!それでこそプリキュアよ!!」

アンビションは刹那にSS組に迫る。

「私たちに必要な要素は!」

バシツ!

「欲望!」

ボコツツ!!

「野望!!」

ビシツツツ!!!!

「犠牲!!!!」

ブシュツツツッ！……！！

「流血！……！！」

ドロリ……！！

「そして……！！」

バツツキイイインン！……！！

「闘争本能！……！！」

『うわあああああああ！……！！』

SS組が空中を舞い、地面に叩きつけられる。

「ブルーム！……イーグレット！……！！」

「2人ともしっかりして！……！！」

メロディとリズムが駆け寄る。

「……メロ・ディ……リス……ム。」

「ごめんなさい・・・足の骨が折れたみたい・・・。」

ブルームとイーグレットは、2人に詫びる。

「謝る事なんて無いわ。」

「後は私たちに任せて!」

ヒュンツ! スタツ

「ほむら!」

メロディたちの前にほむらが現れる。

「この子たちを安全な場所まで避難させるわ。戦闘不能になったら呼んで頂戴。それに私も出来るだけ援護するわ。」

「うん、ほむら、頼んだわ!」

ほむらは小さく頷くと、瞬間移動でSS組を要塞外部に避難させた。

「行くよ! リズム、ビート!」

『OK!』

3人の戦闘の組曲がアンビションに奏でられる。

「アンビシヨオオオオン!!!!!!!!!!」

1拍子。

「ウワツ！」

2拍子。

「ゲフツ!!」

3拍子!!

「アハアアツツ!!!!」

アンビシヨンは大量の血を吐きながらも、尚も戦闘姿勢を崩さない。

「楽しいよねえ！嬉しいよねえ！！ゾクゾクするよねえ！！！！やっぱりプリキュアは戦ってこそ価値があるんだよ！そこには希望なんていないんだよ！！！！」

「おふざけも大概にしなさい!!」

「あなたの言い分も一理あるけど、戦ってばかりじゃ身が持たないわ!!」

「希望があるからこそ、私たちは歩いていけるの!!!!」

「ハッ！笑わせないでよ！！希望希望と口でぬかしておきながら、世の中の奴らは常に争いを欲しがっているじゃない！！互いを滅ぼしたがっているじゃない！！希望ですって!?! 『失望』の間違いで





『かつての仲間として、あなたをここに葬り去ってあげる!!!!!!!!!!』

キュイイイン・・・

「プリキュア・プリズムチェーーーーーン!!!!!!!!!!」

ジャリッ！ジャリジャリッ！！

「チイッ！腕と足が!!」

「ミント!!」

キュイイイイン・・・

「プリキュア。エメラルドソーサーーーーーー!!!!!!!!!!」

シューーーーーー・・・

バスッ!!バスッ!!!!

「イヤアアアアアアアアア!!!!う・・・腕が、腕がああ  
ああああああ!!!!!!!!」

エメラルドソーサーが、アンビションの両腕を一刀両断にした。鮮  
血がほとばしる。

「苦しいでしょ？痛いでしょ？ルミナスはこんな苦痛を味わって死

「んだのよ！……その痛みを存分に味わって……！」

「や……野郎オ……」

「皆！今だよ……！」

「アンビションにとどめを……！」

ブラックとホワイトが皆に呼びかける。

『今こそ解き放て！プリキュアの、最後の力を……！』

プリキュアたちの体が光に包まれていき、1つにまとまり大きな白い光の球体となった。

『今こそ、全ての邪念を終わらせる時……！』

『プリキュア・ファイナルホープ・ビッグバン……！』

プリキュア・ファイナルホープ・ビッグバン。その名の通り最後の希望。それを象徴するかのような大きな光。その光がアンビションに向かって突撃する。







## 第48回 昇天

UOPの崩壊から約3ヶ月が過ぎようとしていた。パルミエ共和国はかつてないほど疲弊の極みに達していた。

政府もゴタゴタしていた。反ミルク派の勢力は一掃され、親ミルク派の勢力で固められ、改造が行われた。一時は断交も辞さなかった他の国々とも少しずつではあるが、交流を進めようとしていた。

度重なる動乱で、国土も荒廃していた。かつて要塞があった地域は高濃度の汚染水が残り、立ち入り禁止区域とした。しかし一方では国民たちが力を合わせて新しいパルミエを創ろうと、希望を見出しつつあった。今日もせつせと仕事をしたり、情報交換をしたり、復興を少しずつ進めていた。

そんな中、プリキュアたちはある場所に集合していた。彼女たちの前には10個の石があった。ここは動乱の中で命を落としたプリキュアたちが眠る墓地だった。石とは墓石の事で、それぞれにプリキュアたちの名前が刻まれていた。

「……ねえ皆。」

「どうしたのなぎさ？」

「私たちは、結局犬でしかないのかなあ……。」

「なぎさわ……。」

「いくらプリキュアが伝説の戦士だとしても、結局は誰かにいいように使われているだけだと思うんだ。のぞみの言った通り、私たちはメス犬でしかないと思うんだ。主人に忠実な忠実なメス犬でしか」

「そんな事は無いよ！」

「咲・・・？」

「確かに私たちはメス犬でしかないのかもしれない。けど一方じゃ大切な皆を守る為に戦って・・・。」

「その時点で、犬なのよ。」

「そ・・・それは・・・。」

咲は黙り込んでしまう。

「皆聞いて。私決めたの。」

「？」

「私たちがプリキュアであり続ける限り、私たちの力を欲しようとたくらむ連中がいる。それが原因でまたこんな哀しい、空しい戦いが起こるかもしれない。いいえ、絶対起こるわ！」

「……………」

「皆を守るうと今まで戦ってきたけれど、プリキュアが逆に戦いの理由や道具にされるくらいだったら……。」

「私はプリキュアの力なんていらなかつつ……!?!?!?!」

「な……なぎさっ!?!?!?」

「ほ、本気なんですか!?!」

「皆の笑顔と幸せと未来を守る為なら、私はプリキュアになれなくなつてもいい。これからはキュアブラックとしてではなく、美墨なぎさとしてこの世界を見守っていきたい。もうこれ以上パルミエの国民を泣かせたり絶望に叩き落したり落とされたりするのを見たくは無いの。」

「……………」

「それに、プリキュアの力を持ったが為に、こんなに多くの友達の命を失ってしまった。こんな事はもう繰り返しちゃいけないの。それにはプリキュアの力は厄介でしかないの!」

「……………」

「私は美墨なぎさとしてこれからも生き続ける。そしてどんな苦難が襲おうと、私は立ち向かってみせる。それが友達への供養であり、また友達を殺した自分自身への『罰』だから……。」

なぎさの言葉に全員が黙り込む。

「なぎさがそこまで言うのなら、私も賛成だよ。」

「響……。」

「のぞみは争いを好む子じゃなかった。だけどプリキュアになったが為に多くの仲間の命を目前で失い、その悲しみと絶望感から、のぞみはキュアアンビションとして覚醒し、そして私たちに消滅させられた。またこんな争いが繰り返されたら、あの世でのぞみが泣いてしまうわ。だけでもう少し待っててくれないかしら？」

「どうして……？」

「私たちにはまだプリキュアとしてやる事が残っているの。それをやり終えたら、この力を返上するわ。それでいいよね？奏、エレン。」

「ええ、いいわよ響。」

「皆、もう少し待っていて頂戴。」

「私も賛成するよ。」

プリキュアの力を肯定していた咲も、賛成に回った。

「つばみたちが自分の命を捨ててまで守ろうとしたパルミエを、もうこれ以上戦乱にさらしたくない。私たちの力が火種になるのなら、力を返上する。」

「私も咲と同じ意見よ。このままじゃ何の為につばみさんたちが死んだのか、判らなくなってしまうわ。」

舞も同じく賛成する。

「私たちはもう見たくない。」

「ひかりさんやつばみさんたちのような無惨な死を。」

「仲間同士の内紛も。」

「パルミエは私たちの力を借りなくても、絶対に復興するわ。皆で信じましょう。」

「私も首相として、このパルミエ共和国をもっともっと幸せな国にしなきゃね。」

G O G O 組も全員一致で賛成する。

「ほのかもいいよね？」

なぎさは横にいるほのかに確認する。

「私たちは友達よ。聞かなくても判るでしょ？」

「そ、そっか。そうだよね！」

なぎさはアハハハとごまかすように笑った。

「それじゃ皆、準備はいいね？」

「.....」

全員無言で頷き、各々の変身アイテムを取り出す。

「じゃあ、はじめよ。」

『パルミエと全ての世界の平和の為に！』

『二度と哀しい戦いを起こさない為に！..!』



「キュアミント。」

「キュアアクア。」

「ミルキイローズ。」

「さようなら、キュアブロッサム。」

「キュアマリン。」

「キュアサンシャイン。」

「キュアムーンライト。」

「キュアピーチ。」

「キュアベリー。」

「キュアパイン。」

「キュアパッション。」

「シャイニールミナス。」

「キュアドリーム……………」



## 最終回 足跡

「皆様、一列になって進んでくださいませ。」

パルミエに起こった哀しき動乱から、およそ半世紀の年月が過ぎた。プリキュアの名前すら歴史の彼方に消え去ろうとしていた時代、あの悲劇を語り継ごうとするツアーが組まれていた。

国王ココの発狂から始まり、プリキュアの内紛、共和制樹立、それを認めない他国の侵略、そして・キュアアンビションの誕生。それらに由来する史跡をめぐるツアーだ。

「ずいぶん平和になったなあ……。」

そのツアー客の中に、1人の人間の女性がいた。かつてキュアブラックとして戦った美墨なぎさだった。ラクロス部のエースとして君臨していた彼女もすっかり年老い、金色に輝いていた髪の毛も真っ白に、かつ薄くなっていた。ツアーに参加し、さまざまな史跡を巡りながら、なぎさは思っていた。

「本当に、これで良かったのかなあ……?」

パルミエのとある放送局では、動乱とプリキュアに関する特集番組が制作された。元プリキュアによる証言。それは時代が経ち、風化されようとしていた出来事に対し、真実を語り継がなければならぬという彼女たちの警告でもあった。そうしなければ、いずれまた同じ事が繰り返される可能性が大きいからだ。

インタビューを終えた元プリキュアたちは、かつてその力を返上した墓地へと再びやってきていた。

「そろそろなぎささんが来てもいい時間ですけど……。」

うららが時計と風景を交互に見やる。

「あ、来た来た。」

「ふい〜〜〜〜、皆お待たせえ……。」

「大丈夫なぎさ？息が荒いわ。」

「それでも元プリキュアなの？」

「ほのかあ〜、咲い〜、やっぱり歳には勝てないよ。ツアー客の足が妙に速くつてさあ。全然追いつかないんだもん。」

「うう・・私も人の事言えないナリ。孫と遊んでいる時もすぐ疲れしてしまうから。」

「まあ、お互い体は大事にしよう。」

「無理するとまた腰痛を起こしちゃうものね。」

「そう言えばミルクは？」

「執務が長くなりそうで、今日は遅れて来るって。」

「ミルクも大変ね。引退してからも仕事三昧で。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「平和ねえ。。。」

「かれんさん、ババ臭い事言わないで下さい。」

「ま、元からババ臭いけどね。」

「なぎささん!!」

「いっ・ごめんごめん!つい本音が。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「もう半世紀以上経ったんだ、あれから。」

「ババ臭いなんて言ったけど、これで良かったのかもね。」

「小さな争いはたまに起こるみたいだけど、大した事にはなっていないみたいよ。」

「・・・・・・・・それでいい。皆が笑顔で今暮らしているのなら、私はそれでいい。。。」

「つばみ、えりか、いつき、ゆりさん、ラブ、美希、祈里、せつな、ひかり、……のぞみ。こんな事言うのも何だけど、私たち出来る限りの事は全部やった。願わくば、この平和な光景を皆にも見せてあげたかった……。」

「なぎさは、のぞみの事を、……アンビションを、許すの？」

「……もう終わりにしようよ。アンビションになっても、のぞみはのぞみだよ。」

「そう……。そうね。それでいいのかもね。」

「プリキュアの歴史も、伝説も、これで終わりか……。何だか寂しいなあ。」

「響……。」

「なぎささんの言う通り、私たち最善は尽くしたわ。結果がどうであれ、ベストを尽くしたからこうなったって思うほうがいいよ。」

「今、パルミエ国民が笑顔でいられるのなら、私たちのやってきた事は無駄じゃなかったって事だわ。そうでしょ響？」

「……ありがとう、エレン。」

「これからパルミエはどうなっていくんだろう。」

「それは良くも悪くも国民次第よ。これからのパルミエ共和国は、国民の手で作られていくべきよ。……プリキュアは、もういないわ。」

「いないし、いても理由が無い……。」

「期待しましょう、パルミエの皆に。」

「……そうだね。国民を信じよう。」

「じゃあ、私たちそろそろ行くよ。皆、安らかに眠って。……また会いましょう。」

「皆、私たちのやってきた事は100%正しかったとは言えないわ。だけどやれる限りの事はやった。ココも、つぼみも、えりかも、いつきも、ゆりさんも、ラブも、美希も、祈里も、せつなも、ひかりも、のぞみも、考えは違えど、やり方は間違っていたとしても、それぞれの目的の為に一生懸命に生きたわ。短い生涯を生きたわ。だから皆、この子たちを責めないで頂戴。真に正しい事なんて、誰にもわからないんだから。後世に生きる者が笑顔でいられたのなら、それが正しい事だと思うから……。」

「なぎささあ〜ん！置いて行きますよあ〜ん！！！」

「ま……待ってよあ〜ん。少しは私を労ってよあ〜ん。」

乱

プリキュアオールスターズ戦記 くパルミエ動

完

## あとがき

執筆が終わった後。

「ふわぁ〜あ・・・やっと終わった。」

ぐびぐび・・・

作者は酒を飲みながら書いている。

シュツ

「・・・？誰だ？」

「こんにちは、作者。」

「あ、これはほむらさん。どうもです。」

「どうもですじゃないでしょ。最終回に私が出なかったのは何故？」

「と・・・唐突ですな。」

「言いなさい。どうして出なかったの？」

「覚えてません！」

パシュツツ・・・！！

「・・・。。。」

ほむら、銃弾を放つ。

「……………まあいいわ。それより書いた後の感想を述べなさい。」

「何とか上手く纏められたかなと思ってる。」

「よくもまあ……………」

「プリキュア同士の戦いや国の動乱は、なかなか扱うのは難しいし、書いていて罪悪感もあるから。」

「確かにあまり扱われないテーマだものね。」

「だけど、戦いには犠牲はつき物だから……………」

「負ければただの犬死……………ね。」

「プリキュアは伝説の『戦士』だ。100%勝ち続ける事はないよ。」

「魔法少女も、またしかり……………」

「以上です。」

「……………全然感想になっていないわ。」

「まあそんなこんなで、これにてプリキュアオールスターズ戦記は

おしまいです。皆様最後までお読みいただきまして本当にありがとうございました。」

「『キュアグラス』のほうも、どうぞよろしく。」

「それでは皆様。」

『また会いましょう！』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7665u/>

---

プリキュアオールスターズ戦記      ~ パルミエ動乱 ~

2012年1月6日19時47分発行